

ヴォロコラムスクの府主教
イラリオン（アルフェエフ）

カテヒジス — 正教要理 —
～ 正教信仰のガイドブック ～

洗礼に向けて準備している人、
洗礼は受けているけれど教義に明るくない人、
自らの信仰についてより良く知りたい全ての人へ。

2018

目次

始めに

第一部 教義

1. 信仰

2. 一つの神 ～ 父・造物主

3. イエス・キリスト

3.1. 人の子

3.2. 神の子

4. 聖霊

5. 至聖三者

6. 教会

7. 洗礼

7.1. 洗礼 ～ 教会の機密

7.2. 洗礼機密と傳膏機密の執行方式

8. 死者の復活

第二部 キリスト教道徳

1. 旧約聖書の十戒

2. 真福九端 (至福の教え)

3. 旧約聖書の十戒とキリスト教徒の道德
4. 神への愛と隣人への愛
5. 罪と痛悔
6. 家族倫理
7. 子育て
8. 教会における女性
9. キリスト教徒の生活 ～ 靈的努力の道

第三部 教会と奉神礼

1. 生神女と聖人
2. 祈り
3. 教会生活
4. 正教会の聖堂
5. イコンと十字架
6. 教会の祭日
7. 週と日の奉神礼サイクル
8. 聖体機密
 - 8.1. 教会における聖体機密
 - 8.2. 神聖なる聖体礼儀の執行方式
9. その他の機密と式

9.1. 痛悔機密

9.2. 婚配機密

9.3. 聖傳機密

9.4. 神品（聖職）機密

9.5. 教会の諸式

終わりに

始めに

洗礼を受けようと決めましたか？

子供に洗礼を授けようと決めましたか？

幼児の頃に洗礼を受けたけれど、必ずしも信仰について教えられずにきましたか？

聖堂にロウソクをたてる為に立ち寄るけれど、典礼の意義を理解していませんか？

正教会に属してはいるけれど、正教会の教えには詳しくないですか？

聖書を読もうとしてみたけれど、意味がよく分からなかったですか？

聖堂には通っているけれど、痛悔をしたことがないですか？

聖堂に通っていて、痛悔もするし御聖体も受けるけれど、教会のことがよく分からなくて、もっと知識を得たいですか？

こんな希望をお持ちのあなたのためにこの本は書かれました。

『カテヒジス』¹という言葉はギリシャ語由来です。文字通りには『啓蒙』とか『教訓』といったことを意味しますが、現在ではキリスト教信仰の基礎的

¹ 訳注：ロシア語では「Катехизис」、ギリシャ語では「Κατηχισμός」。日本では同語の英語訳「Catechism」より「カテキズム」と書かれることが多い。日本正教会では、モスクワの府主教フィラレート『カテヒジス』は次項に著述するとおり『正教訓蒙』の題で明治期に翻訳・出版されているが、それ以降にシメオン三井道郎長司祭によって書かれたもの等一般に『カテヒジス』を指す場合『正教要理』と表記している。

な事実を簡潔に分かりやすく説明した本を『カテヒジス（正教要理）』と名づける習慣があります。

『カテヒジス』は、平たく言えば「信仰についてのガイドブック」であって、何かを論証するために書かれるものではありません。『カテヒジス』の主題は、記述することと解説することとにあります。

正教会の『カテヒジス』の中で最も有名なものは、成聖者フィラレートによって著されました。1821 年から 1867 年にかけてモスクワの府主教を務めた聖フィラレートは、教会史上著名な人物で、また神学者でした。聖フィラレートの『カテヒジス（正教訓蒙）』²は正教教義の基本的な叙述として現代に於いても意義を保っていますし、権威ある、また教会の指導層にも認められた書物であり続けています。

そうは言ってもやはり、この聖フィラレートの『正教訓蒙』が出版されて以来ほぼ二百年の時が経ち、その間に人々の考え方は大きく変わりました。同書の中のいくつかのテーマは実生活上必要性がなくなりましたし、同時に、簡潔で分かりやすい答えが求められる新しい疑問が数多く現れました。さらに、十

² 『Пространный христианский катехизис Православной Кафолической Восточной Церкви（公けなる東方正教会の広範なキリスト教カテヒジス）』。1823 年に第一版、1827 年に改訂第二版発行。以下、訳注: この聖フィラレートの『カテヒジス』は、『正教訓蒙』の題で明治 19 年に翻訳されており、これは『国立国会図書館デジタルコレクション』にてインターネット上での閲覧が可能である。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824701/1>

九世紀には無かった規範書類³が教会によって採択されており、これらを見捨てることはできません。

したがって今日、長大なものや簡潔なもの、共同執筆や単独執筆といった種々の新しい『カテヒジス』が現れてくるのは極めて自然な流れだといえます。

この『カテヒジス』は、正教信仰を理解し、現代人のために正教信仰の基礎的知識を簡潔に叙述することを目的としています。本書は三部構成となっています。

第一部では、信仰、神、イエス・キリスト、聖霊、教会、洗礼、死者の復活などについての正教会の基本的な教義が説明されています。

第二部では、道徳的なテーマにふれます。旧約聖書の十戒、イエス・キリストの山上垂訓にある至福の教え、神への愛と隣人への愛、罪と痛悔、家族倫理の様々な疑問、子育て、教会での女性の位置といったお話です。

第三部では、お祈りや典礼、聖堂や聖像、教会の暦や教会の祭日、神聖なる聖体礼儀やその他の教会の典礼、秘跡や式についてお話ししましょう。

準備はよろしいですか？

正教会の信仰を学ぶこの道を私たちは一緒に進んでいきます。あなたと、この本の著者でありロシア正教会の聖職者である私です。

³ たとえば、2000年に採択された『Основы социальной концепции Русской Православной Церкви（ロシア正教会の社会構想の基本）』と『Основные принципы отношения Русской Православной Церкви к инославию（キリスト教他派に対するロシア正教会の態度の基本原則）』。双方ともにインターネット上で自由に閲覧できる。〔訳注：ただし、日本語訳はない。〕

そして、この道において、主イエス・キリストご自身が私たちの道先案内人
であられますように。

第一部 教義

キリスト教の信仰は、主イエス・キリストの教えに基づいた体系的なものです。教会はこのキリストの教えを認識し、神学的定義に基づいた言葉で表現しました。これらの神学的定義を『教義』と呼び、これは信仰上の真理です。教義を真理として受け入れることは、教会の一員として必要不可欠な要素です。

キリスト教徒としての信仰に関わる教えは、信経〔信仰告白〕のテキストを追って、順に勉強していきましょう。信経とは、基本的なキリスト教教義の簡潔な叙述であり、四世紀に現在にまで伝わる形での完成をみました。

第一条 我信ず、一つ⁴の神、父、全能者、天と地見ゆると見えざる万物を造りし主を。

第二条 又信ず、一つの主イエス・ハリストス、神の独生（どくせい）の子、万世（よろずよ）の前に父より生まれ、光よりの光、真（まこと）の神よりの真の神、生まれし者にて造られしに非ず、父と一体にして万物彼に造られ、

第三条 我等人々の為又我等の救いの為に天より降り、聖神⁵ 及び童貞女マリアより身を取り人となり、

⁴ 信経に於いて「一つの」とは「唯一の」を意味する。すなわち、「一つの神」とは「唯一の神」のことです。（以下同様に「一つの主イエス・ハリストス」とは「唯一の主イエス・ハリストス〔イエス・キリスト〕」を表し、「一つの教会」は「唯一の教会」、「一つの洗礼」は「唯一の洗礼」をそれぞれ意味します。）

第四条 我等の為にポンティイ・ピラトの時、十字架に釘うたれ苦しみを受け
葬られ、

第五条 第三日に聖書に应（かな）うて復活し、

第六条 天に昇り父の右に座し、

第七条 光栄を顕して生ける者と死せし者を審判する為にまた来たり、その
国終わりのなからんを。

第八条 又信ず、聖神^o、主、生（いのち）を施す者、父より出で、父及び子
と共に拝まれ讃（ほ）められ預言者を以て嘗て言いしを。

第九条 又信ず、一の聖なる公なる使徒の教会を。

第十条 我認む、一つの洗礼以て罪の赦しを得るを。

第十一条 我望む、死者の復活、

第十二条 並びに来生の生命を。アミン。

1. 信仰

信経は「我信ず」の言葉から始まります。この言葉は、信仰が人と神との間
の関係性の基本であるということを示すものです。

「信仰」とは？

多くの人が、自身を信者であるとしています。それにもかかわらず一定数の
人々は自らの宗教の基本を知らず、他の宗教との違いを認識することができ

ていません。たとえば「私は教会には通っていないけれども、心の中に神様が
いる」という様に言う人がいます。「ではあなたにとって神様とは何ですか？」
と質問をすると、返ってくる答えは大概「私は何か崇高な、良きものを信じて
いるのです」とか「私は善良さを信じている。だって一番大事なのは善良な人
であり続けることであって、教会に通ったり何か宗教的な儀式に参加したり
することは必ずしも必要ではないじゃないか」とかいった様な、はっきりとし
ない曖昧なものです。

なぜ「心の中に神様をもっている」だけでは不十分なのでしょうか？なぜ、
何かしら抽象的で縁遠い善良な起源を信じているだけでは不十分なものでし
ょうか？なぜならば信仰とは、神の存在や、他の世界、或いは高次の力の存在を、
ただ単に知的或いは理論的に信じることとは違うからです。信仰とは、神との
対話に基づいた生き方です。信仰は、人が神と出会うことを前提としているの
です。

信仰への道のりは神秘的なもので、多くの点で説明されえないプロセスで
す。しかしキリスト教の伝統においては、どの人間の心にも宗教感情は存在す
るものだ、という理解があります。西方の著述家テルトゥリアヌス（2-3 世紀）
は人間の心について「根本的にはキリスト教徒である」⁵と述べましたし、ま
た他の西方教父・至福者アウグスティヌス（四世紀）は「汝は我等を汝に向け

⁵ テルトゥリアヌス『護教論』、17。

て造り、我等の心は汝の内に安らぐまで安らぎを知らない」⁶と書きました。
およそ人間たるもの、信仰への内面的な下地があり、自らの創造主への志向を
生まれながらにして持ち合わせているのだ、といえます。それにも関わらず、
天性の宗教感情が全ての人において表出するわけではないのです。

信仰は人の心の中で熱く燃える炎です。信仰の炎は、何世紀にもわたって
人々を偉業や英雄的な行為へと導きました。自らの信条を主張し続け、その信
条の為に死をもいとわなかった人々は、信仰によってこそ力を得ました。信仰
こそが精神的な力となり、致命者〔殉教者〕たちに激しい拷問に耐える力を与
え、処刑場へと連行される人々に最期の時を生き立派に死の時を迎える力を
与えたのです。これはただの昔話ではありません。つい最近ですらも、人々の
心から信仰心を奪い去ってしまおうと、強大な力と物資が使用され、神父や修
道士、そして一般信徒といった信仰者たちが肉体的に殺戮されていたのです。

信仰とは、内的な燃焼であり、自らの持ち得る創作力、或いは人生の全てを
高尚な理想に捧げる覚悟です。芸術家、建築家、音楽家、詩人、作家たちにと
って信仰心は、壮大で美しい芸術作品を生み出す助けとなりました。キリスト
教の信仰は何世紀にもわたって人類の文化的生活をより豊かにし、信仰の理
想形によってこそ様々な有名な芸術作品が生み出されたのです。

信仰とは神への服従

⁶ アウグスティヌス『告白』1巻1章。

使徒パウロは次の様に定義しています。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。[.....] 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。(ヘブ 11 : 1、3)」⁷。

パウロは、旧約聖書の太祖アブラハムを例としてさらに述べています。「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み [.....] ました。アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していたからです。[.....] 信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。[.....] アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。(ヘブ 11 : 8-10、17、19)。」

聖書 (創 22 : 2-12) には、いかにして神が 100 歳を迎えたアブラハムと彼の不妊の妻サラに息子を与えることを約束したか、いかにして老夫婦が長年に渡りこの約束の果たされることを心待ちにしていたか、いかにして待望の息子が生まれ、そしてこの息子が成熟するに至り、神がアブラハムを試して「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」

⁷ 訳注：以下聖書の訳文は、特記がなければ新共同訳のものを使用する。正教会で用いられている訳と重大な違いがある場合には、これを注記する。

と言ったかが書かれています。この神の言葉を受けて、アブラハムは息子と従者たちを連れて出発したのです。

三日目に彼は神の示す場所を遠望し、従者たちに「お前たちは、ろばと一緒にここで待っていなさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる」と言いました。アブラハムが生贄の動物を連れていないのを見て、イサクは父に「火と薪はここにありますが、焼き尽くす献げ物にする小羊はどこにいるのですか」と質問しました。それに対してアブラハムはこう答えます。「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきっと神が備えてくださる」と。

そしてついに、父子は神によって示された場所に到達しました。アブラハムはイサクを縛って生贄のための祭壇に置き、これを刺殺しようとしてナイフをその上に振りかぶります。この瞬間に天使が彼に声をかけます。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」。

「信じるすべての人の父（ロマ 4：11）」というアブラハムの称号は正当なものです。聖書の最初の書である創世記のかなりの部分（創 11：26-25：9）がアブラハムの人生を記しており、この中で彼は神への絶対的かつ完全な忠誠の模範として描かれています。自分の人生によって彼は、信仰のなんたるか、信仰はどうあるべきかを示しました。「信仰する」とは、信頼し、愛し、聴き従う、ということなのです。信者は、自身よりも神を信頼し、自身よりも深く神

を愛し、自身の意思を遂げようとするよりも神の命令を遂げようとするより努力するのです。

神の啓示

キリスト教の信仰は、人間の創作や人間の知恵によって生みだされたものではありません。キリスト教の信仰は、神の啓示、すなわち、「人々が正しく、救われる様に神を信仰し、神をふさわしく尊敬することができる様に、神自身が人々に明らかにしようとしたもの」⁸に基づいているのです。神の啓示の本質を指して使徒パウロは「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。(ヘブ 1:1-2)」と述べました。これはすなわち、神が、人々に対し段々と順を追って自らを明らかにしたことを示しています。神の啓示の第一段階は、預言者を通じたものであり、第二段階は、神の子、イエス・キリストを通じたものだったのです。

聖書と聖伝

神の啓示の二段階は、キリスト教徒にとっての聖書物、すなわち**聖書**の中に反映されています。聖書は、旧約と新約の二つに分けられます。

⁸ 非刺列徒（三井西面訳）『正教訓蒙』正教会、1881年、6頁参照。以下、フィラレート『正教訓蒙』と表記する。

旧約聖書には、この世界の創造から始まる人類の歴史と、神によって選ばれたイスラエル人の歴史が描かれています。旧約聖書のかなりの部分は、救世主のこの世への到来を予め告げる預言者たちの書が占めています。

新約聖書に含まれているのは次のものです。すなわち、イエス・キリストの生涯、受難、死、そして復活を語る四つの福音書、キリスト教会の最初期を述べる聖使徒言行録〔使徒言行録〕、キリスト教の信仰と道德の様々な側面について書かれている聖使徒たちの公書簡⁹、広く神学的・道德的なテーマについて明らかにしている聖使徒パウロの諸書簡、この世の終わりとキリストの再来に関する預言的ビジョンを述べている黙示録です。

教会はこれら聖書物に含まれるすべての書を「神によってインスピレーションを受けたもの」或いは「神来のもの」と呼んでいます。これらの書物の著者は人でしたが、この人たちは聖霊¹⁰の助力、聖霊の啓示によって記していたからです。

聖書はキリスト教徒にとって、権威を持ち、また、疑う余地のない、信仰の原典です。聖書は聖伝の一部であり、聖伝のコンテクストに基づいてのみ正しい解釈ができます。

⁹ ここで「公書」とは、具体的な教会共同体に宛てて書かれたもの（「ローマ書」や「コリント書」など）ではないことを示します。

¹⁰ 神・聖神⁹ については後掲(---項)。

正教会において**聖伝**とは、信仰上の教え、機密、式、道徳的規定、そして、世代を通じて信者に受け継がれる書面上の、そして口碑の、様々な霊的経験を指しています。

2. 唯一の神 — 父・創造主¹¹

信経は「我信ず、一つの神、父、全能者、天と地見ゆると見えざる万物を造りし主を」の言葉から始まります。

一つの神

この言葉に於いて、「神は唯一なのである」というキリスト教の最も基本的な教義が確認されます。

キリスト教は一神教信仰の宗教です。キリスト教は、旧約聖書に記されている昔のユダヤ人の宗教から、唯一の神への信仰を受け継ぎました。

「わたしの前に神は造られずわたしの後にも存在しない [.....]。わたし、わたしが主である。わたしのほかに救い主はない（イザ 43 : 10-11）」とあるように、旧約聖書が述べている神は、一つかつ唯一の神です。モーセの十戒の内第一の誡には「わたしは主、あなたの神 [.....] である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。（出 20 : 2-3）」とあります。また申命記で神は自らについて「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。

¹¹ 訳注：造物主とも。

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。(申 6 : 4-5)」と述べています。

イエス・キリストは、唯一の神についての旧約の誠の重要性を、繰り返し指摘しています。彼を試みる悪魔に対してイエスは「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ (マタ 4 : 10、ルカ 4 : 8)」と答えています。また「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」と尋ねた律法学者に対して、イエスは「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』と答えています (マコ 12 : 28-30)。

使徒パウロはこう述べています。「唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています。[.....] たとえ天や地に神々と呼ばれるものがないとしても、わたしたちにとっては、唯一の神、父である神がおられ¹²、万物はこの神から出、わたしたちはこの神へ帰って行くのです。また、唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在しているのです。(一コリ 8 : 4-6)」。

旧約聖書における神理解

¹² これはつまり「天上の様々な想像の産物を神と呼んだり、地上で人々が神格化したものを神と呼んだりしているが、実際には一つの神しかいない。」ということです。使徒はここで様々な形の多神教について言及しているのです。たとえば、古代ギリシャや古代ローマの宗教は多神教でした。現代でも、ヒンズー教、ジャイナ教、神道などの多神教があります。

旧約聖書における神は決して、抽象的で人間から遠く離れた何かしらの力ではありません。彼は、**生活の【生ける】神**（サム上【列王記第一】17：26、36、王下【列王記第四】19：16）、すなわちいつ何時でも生きて活動している神であり、彼は「まどろむことなく、眠ることもな（詩121【120聖詠】：4）」く、「倦むことなく、疲れることもな（イザ40：28）」いのです。

旧約聖書の神は、**聖なる神**（イザ57：15）であり、彼の名は「畏れ敬うべき聖なる（詩111【110聖詠】：9、詩99【98聖詠】：3）」ものです。神は恵み深い（詩34【33聖詠】：9、詩100【99聖詠】：5、詩145【144聖詠】：9）¹³、つまり善であるとされます。神は絶対的な善であり、あらゆる善、あらゆる聖性の源泉です。神は「全世界を**裁くお方**（創18：25）」です。神は「肉なるものをすべて裁き主に逆らう者を剣に渡され（エレ25：31）」ます。神は、公正に裁き、「日ごとに憤りを表す（詩7：12）」方です。神は御座につき、裁きを行います。神は「ある者を低く、ある者を高くなさ（詩75【74聖詠】：8）」り、誇る者に報いを与えられ（詩94【93聖詠】：2）ます。

多くの旧約聖書中のテキストでは、神については隠喩的に、顔、目、耳、手、足を持ち呼吸をする、人のような存在として語られています。神が、見、聞き、話し、歩き、向き直り、そっぽを向き、思い出し、忘れ、怒り、落ち着き、驚き、悲しみ、嫌い、悔いと述べられています。

¹³ 訳注：正教訳では「仁慈」の語が用いられている。

このような隠喩的表現の基になっているのは、神との個人的な出会い、人々の生活に神が常に参加していることの知覚です。昔の人々は、神が自分のすぐそばにいて感じていました。神は、彼らの王であり統率者であり、彼らの礼拝や祭日において、毎日の生活において彼らを助けていたのです。昔の人々は、神との自分たちの対話の経験を、人の姿や概念を用いて、彼らの使える方法によって表現しようとしたのでした。

新約聖書における神理解

新約聖書において神は、イエス・キリストを通じて、まず第一に**天の父**として明らかにされています。旧約聖書において「父」の名は、時々神に対して用いられています（イザ 63：16）が、これは、神がイスラエル民の父である、という意味で用いられています。新約聖書では、粘り強く首尾一貫して、神は、**全ての人々の父**¹⁴であるという認識が示されています。

神には、それぞれの人についての意図があり、それぞれの人々が神にとって価値あるものです。神にとっては、余計な人などというものはなく、神の配慮と愛に値しない人などというものはいないのです。神は、自らお創りになった全てのものを覚えています。「二羽の雀が一アサリオン¹⁵で売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちる

¹⁴ マタイによる福音書中のイエスの教えの中で「天の父（常に「あなたがたの」「わたしの」の言葉と共に登場します。）」の表現は、全部で二十回登場します。

¹⁵ アサリオンは、少額の硬貨。

ことはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。(マタ 10 : 29-31)」

イエスは、自身の天の父について「憐れみ深 (ルカ 6 : 36)」く、「恩を知らない者にも悪人にも、情け深 (ルカ 6 : 35)」く、「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる (マタ 5 : 45)」方であると話しています。

人の善は、神の至善と比べられるものではありません。この意味でイエスは「善い方はおひとりである (マタ 19 : 17、マコ 10 : 18)」と言っているのです。同時にイエスは自身の信奉者たちに、情け深さが彼らを神に近づけ (ルカ 6 : 36)、平和の実現が彼らを神の子にすることを思い起こさせて、神の完全性を手本とするように呼びかけ (マタ 5 : 48) ています。

旧約聖書の宗教を基にして、イエスは、人々を神の息子・娘とする、新しい宗教を創ったのです。人が神の子となるのは、聖霊の助力によるものです。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ¹⁶、父よ』と呼ぶのです。この霊こそは、わたした

¹⁶ アラム語で「父」を意味する言葉。

ちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてください（ロマ 8：14-16）。」

聖書は、**神とは理解しがたいものである**と証明しています。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。いったいだれが主の心を知っていたであろうか。（ロマ 11：33-34）」神は、その本性において理解しがたいものであるにもかかわらず、何百年もの間に、自身の働き、預言者たち、そしてイエス・キリストを通じて、自身を明らかにしてきました（ヘブ 1：1-2、3：1）。

聖書によれば、**神は目に見えません**。旧約聖書の中で神はモーセに「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである（出 33：20）。」と話しています。しかし、新約聖書は、その御子を通じた、目に見えない神の啓示となったのです。ヨハネの福音書の中で、この啓示の核心は「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。（ヨハ 1：18）」と表現されています。イエス・キリストは、「神は霊である（ヨハ 4：24）」と述べています。これはつまり、神は、体を持たず、非物質的であり、時間や空間にとらわれないことを意味しています。モスクワの成聖者フィラレートは「神は、永遠の霊であり、もっとも善であり、全てを知り、もっとも公正であり、全能

であり、どこにでもおられ、変わることなく、何の不足もなく、至福な御方である」¹⁷と書いています。

新約聖書には「神は光であり、神には闇が全くない（一ヨハ 1 : 5）」とあります。「光」の言葉は、ここでは比喩的に用いられています。光は善を、闇は悪を象徴しているのです。ここで述べられているのは、肉体的な視力によって感知できる光のことではありません。神は、使徒パウロの言葉によれば「近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方（一テモ 6 : 16）」です。ナジアンゾスのグレゴリオス（四世紀）は、神を太陽と比べています。「神は、最上の光であり、近寄りがたく、いうに言われず、頭脳によって到達できず、言葉によって述べがたく、あらゆる理性的本性を照らす光です。彼〔神〕は霊的世界において、感覚世界における太陽と同じものなのです。」¹⁸

新約聖書は「**神は愛**（一ヨハ 4 : 8、16）」であると証しています。神は、ただ自身の外側の何かに向けた愛を持っているわけではありません。神は、自身の内側にあって、自身の存在において愛であるのです。同時に、神の愛は外側へも現れます。このような神の愛の一つの現れとなったのが、世界と人の創造でした。

¹⁷ フィラレート『正教訓蒙』43 頁参照。

¹⁸ ナジアンゾスのグレゴリオス「第 40 講話」5。

全世界の創造主である神

神は、多様性と美しさを備えた全世界を創りました。太陽、月、惑星、恒星、銀河という、目に見える宇宙全体が、一つの全能の神、「天と地、見ゆると見えざる万物を造」った主によって創造されたのです。

神は全能者です。なぜなら、ただ全宇宙を創っただけではなく、その宇宙を自身の手の内に握って、つまり宇宙を統治し、気遣い、その存在を支えているからです。世界は、その創造主との結びつきによってこそ存在しています。神から独立して、それ自体では世界は存在することができないのです。モスクワの成聖者フィラレートの生き生きとした比喻によれば、世界を創りだした神の創造の言葉は、ダイヤモンドの橋です。その橋の上に、「神の無限性の深淵の下、自分自身の矮小さの上」¹⁹に、創造された全てのものが置かれ、立っているのです。

全世界が神によって創造されたということは、全ての人が信じているわけではありません。世界はそれ自体で出現したのであって、なにものもこれを統治していないと考える人々もいます。世界に**創造主**がいることは、信仰によって人に明らかとなり、信仰によって「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができ（ロマ 1 : 20）」²⁰るのです。

¹⁹ Филарет Московский. Слово в день обретения мощей святителя Алексия Московского // Слова и речи. М., 1877. Т. 2. С. 436.

世界自体のすばらしさと多様性が、この世界には創造主がいるということを証明しています。絵画が、芸術家なしにそれ自体で出現することのできないのと同様に、世界も創造主なしに現れることはできなかったのです。時計が、職人なしに作りあげられたり、ねじを巻くことなしに進んだりできないのと同様に、世界も、これを創造し、統治するお方なしに存在することはできないのです。

なぜ神は世界を創造したのでしょうか。キリスト教神学はこの問いに対して次のように答えています。世界創造の理由となったのは神の善であり、この善にとっては「それ自体の思弁の中だけで動くのでは不十分であり、善は、広がってさらに動いていかなければならなかった」²⁰のです。神は「自身を観照するだけでは飽き足らず、その有り余る善によって、彼の恩恵を被り、彼の善に与る何かが発生することを望」²¹んだのです。

絶対的な善である神は、その善に与れる被造物が現れることを望んだのです。愛である神は、彼の愛が彼の創造した世界にも広がることを望んだのです。

世界と人の創造

世界と人の創造については、聖書で語られています。聖書は「初めに、神は天地を創造された（創1：1）」の言葉から始まります。その後、神が光を創

²⁰ ナジアンゾスのグレゴリオス「第38講話」9。

²¹ ダマスコスのヨアンネス「第三部 正統信仰の解明」『知識の泉』2章2。

ってこれを闇と分け、天と海と地、天の大空の星、海の魚、地を這うものや獣、空の鳥を創造しました（創 1：2-25）。「神は御自分にかたどって〔正教訳：己の像に従い〕人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』（創 1：27-28）」

聖書にある六日間の天地創造の記述は、必ずしも文字通りに理解すべきものではありません。聖詠には「千年といえども御目には昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません（詩 90：4 [89 聖詠 5]）」とあります。使徒ペトル〔ペトロ〕は「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のよう（二ペト 3：8）」だと言っています。聖書中の六日間は、偉大な芸術家の壮大な絵のように、だんだんと順を追って進んでいく創造の六段階として理解できます。そしてそれぞれの段階は、必要なだけ続きえたのであって、カレンダー上の一昼夜だけである必要は全くありません（ましてや太陽が現れたのは四日目のことでした）。

神の像と肖〔似姿〕によって人が創造されたという聖書の教えは、人間とその使命についてのキリスト教の教えの基となっています。神の像の特徴は、理性、自由意志、創造的潜在能力、そして、自身の創造主たる神への先天的な内的志向を人が有していることに認められます。肖とは、通常、人が志向しなければならない目的のことだと理解されます。人は、神への服従とその戒めを実

行することとを通じて、ますます神に似てゆくようにという使命を帯びているのです。

神は愛であり、神は、人に愛する能力を授けました。神は、最初の人々を一組の夫婦として創造し、夫と妻とを愛の関係で結びつけ、彼らに産み、増えることを命じました。生命の継続は、愛なしには不可能です。人は、男女の愛の結果としてこの世に生まれてきます。人は、赤ん坊の時から両親に惹かれており、愛のきずなが彼らを結びつけているのであり、まだ喋ることもできない時から、既に愛することができるのです。人が成長して結婚すると、生命のサイクルはその人の子孫の中で再生していくことになります。このように、神によって人の中にその能力が埋め込まれた愛は、人の歴史を動かしてゆく主要な力となるのです。愛のおかげで、生命は世代から世代へと受け継がれていくのです。

目に見える世界と目に見えない世界

神は、目に見える世界の他に、身体を持たない霊的存在である天使たちがいる、目に見えない世界を創った、と聖書は教えています。この世界へこそ、人々の魂は、死後に旅立つのです。

天使²²には、善いものと悪いものがあります。善い天使とは、神に仕えるものたちであり、逆らわずに神の意志に従い、神と人との間の仲介者としての役割を果たすこともあります。悪い天使とは、自分たちの傲慢によって神からこぼれおちたものたちです。彼らは、神の意志に反抗すること、そしてまことの信仰や神の戒めに従うことを人々にやめさせることに力を注いでいるのです。

悪い天使は魔鬼や悪霊と呼ばれ、その首領は**悪魔**、サタナ²³と呼ばれます。彼こそが初めて神に反抗し、他の数多くの天使たちを自分の側に引っぱり込み、最初の人々であるアダムとエバ [エバ] に蛇の形で現れて、神への不服従を行うように説き伏せ、誘惑したのでした（創3：1-15）。

神が悪を創ったわけではありません。神が創ったものは、元来全て「極めて良かった（創1：31）」のでした。悪は、理性を持った存在、つまり初めは悪魔や悪霊たち、それから人々の自由意思によって、世にもたらされたのです。悪は、神が許容する分だけ、そして、神によって定められた境界線の中でだけしか、世に存在できません。

神の照管

²² [ロシア語で天使を表す] 言葉「アンゲル」は、ギリシャ語「アンゲロス（使者）」から。[訳注：正教訳では「神使」とも。この項以外では、単に「天使」の語を筆者が用いる場合には、「善い天使」を指している。]

²³ ギリシャ語「ディアボロス」は、中傷者、ペテン師を意味する。アラム語「サタナ（ヘブライ語「サタン」から）」は「敵対者」を意味します。

人と全世界についての神の配慮は、キリスト教神学の言葉で**神の照管**と呼ばれます。神の照管とは、神が、それぞれの人の善行を助け、世に存在する悪を良い結果へと向けて、人の生命と成長や霊的発達のための環境とを与えるということの意味します。

照管とは、全ての存在するものを統治する神の御心です。この御心は、二通りに働きます。紛れもなく善であることについては、神の御心は自由に働きます。世で悪が行われている時には、これは神の御心によってではなく、神がただ許容することによって、そして人々が神の御心の実現を邪魔していることによって行われているのです²⁴。

「全ては神の御心によって [起こっている]」とよく言われますが、これは正しくありません。神の御心は、善にのみ向けられています。悪は、善に矛盾するものです。意志によって、あるいは意志によらず悪事を行うとき、人は意識的に、あるいは無意識的に神の御心に反抗しているのです。しかし神の照管は、人々の悪事すらも神が何か善いことに変えてしまえる、というように働くのです。

神はなぜ罪びと、犯罪者やろくでなしを罰さないのか、神はなぜ悪を黙って見ているのか、神はなぜ悪人に、善人のなかで生活して、悪事を行うことを許容しているのか、と質問されることがあります。答えは、神が悪に気付かない

²⁴ ダマスコスのヨアンネス「第三部 正統信仰の解明」『知識の泉』2章29。

とかそれを黙認しているとかいうことではなく、神の忍耐強さにあります。

「主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。永久に責めることはなく、とこしえに怒り続けられることはない。主はわたしたちを罪に応じてあしらわれることなく、わたしたちの悪に従って報いられることもない（詩 103 [聖詠 102] : 8-10) ²⁵」と聖詠にあります。

もし神が、人の本性におけるあらゆる悪の発現を機械的に遮ってしまったとすれば、神は人の自由意思を奪うことになってしまいます。これは人を操り人形に、人の社会を人形劇場に変えてしまうことでしょう。神は、人が、強制によってではなく、自身の自由意思によって、人生の各段階で善の選択をし続けることを望んでいるのです。悪はいつでも神に反するものですが、神は、人々の自由と自分自身が人に与えた選択の権利とを尊重しているので、いつでも悪を遮るというわけではないのです。

それと同時に、あらゆる悪事は結果をもたらすものです。もし人が罪を犯し、そして悔い改めなければ、その人はこの世での生命の間に、あるいは来生において、かならず罰を受けることになります。旧約聖書の中で神は自身について「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおか（出 34 : 6-7)」ないと述べています。

²⁵ 正教訳：主は宏慈にして矜恤、寛忍にして鴻恩なり、怒りて終あり、憤を永く懷かず。我が不法に因りて我等に行はず、我が罪に因りて我等に報いず。

神は全てを知っています。神に何かを隠すことはできませんし、神は未来を現在のように見えています。しかしこれは、人の人生における全てのことが予め定められているということではありません。キリスト教²⁶は、予定説、宿命、運命といったものを信じていません。神は、事前に人の行う善いことも悪いことも含めて全て知っています。しかしこれは、人が、善悪の選択をする際に、どちらか一方を行うように予め定められているということを意味しません。この選択は、その人の自由意思によるのです。

善にのみ向かう神の御心と、多くの場合善と悪とがその中で絡み合っているところの人の意志との結合によって、結局それぞれの人の将来ができていくのです。それでいて神は、全ての人について配慮しており、自身の照管において、意識的に悪の道に立った人々をすらも見捨ててくことはしないのです。

陥罪〔墮罪〕の結果

最初の人々の不服従と陥罪の結果は、樂園からの追放でした。その時から現在に至るまで人々は、神に創られた時の状態ではなく、**陥罪**の状態にあります。最初の人々の神に対する不服従によって、この世界に悪が入り込み、いまではそれぞれの人の前に、善と悪という二つの道が開かれているのです。善の道へ

²⁶ 訳注：著者が本文中で「キリスト教」と述べる際、「正教会」を意図している場合が多く見受けられるが、本箇所においても意図されているのは「正教会」であろう。

と人を導くのは神であり、この道で人を助けるのは天使たちです。悪の道へと人を突き落とそうとしているのは、悪魔とその手先である悪霊たちです。

この2つの道については、旧約聖書の中で「わたしは[.....] 生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい（申30：19-20）」と述べられています。神は、この世にやって来る人それぞれに向けて、そう呼びかけているのです。しかし人々は、それぞれ自分のやり方で、アダムとエバのあやまちを繰り返します。神の声を聴く代わりに、悪魔がささやくことに耳を傾けてしまっているのです。

人の持つ罪の性質を否定する哲学潮流があります。それによれば、人間のあらゆる問題は、人々がきちんと教育を受けていないことからきているとされ、もし何が善く何が悪いのかを分かるように説明すれば、人々は善だけを行うようになるとされます²⁷。

しかしキリスト教の見方によれば、悪は、陥罪した人の本性自体に、その心に根差しています（マコ7：21-22）。使徒パウロは、悪が人の中に住み着いていると述べています。「わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです（ロマ7：19-20）。」

²⁷ 啓蒙時代の哲学者たちは、このねらいを根拠としていました。

自身の中からの罪の除去、そして罪の現れとの戦いは、信者それぞれが直面する最も重要な道徳的課題なのです。ただし、人はこの戦いで独りぼちなわけではありません。神自身が助けてくれるのです。

救世主の待望

神は、人の魂のために、その救いのために常に戦っています。昔の人々はそれを知っていて、アダムから、彼の子孫の一人が悪と悪魔とに打ち勝つという期待をかけて生きていました。キリスト教の伝統においては、エバを誘惑した蛇に対して神が向けた言葉は「このようなことをしたお前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く（創3：14-15）」は、まさにその意味で理解されています。

この、悪魔と悪とに勝利し、永久に人間を「罪、呪（のろい）及び死」²⁸から救うエバの子孫となったのは、イエス・キリストでした。昔の人々は、何世紀にもわたってイエスの来臨を待望して生き、彼の来臨は預言者たちによって預言されていたのでした。

3. イエス・キリスト

²⁸ フィラレート『正教訓蒙』71頁。

信経ではイエス・キリストについて、次のように述べられています。「又信ず、一つの主イイスス・ハリストス、神の獨生の子、万世の前に父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、生まれし者にて造られしに非ず、父と一体にして万物彼に造られ、我等人々の為又我等の救いの為に天より降り、聖神⁹ 及び童貞女マリヤより身を取り人となり、我等の為にポンティイ・ピラトの時、十字架に釘うたれ苦しみを受け葬られ、第三日に聖書に应うて復活し、天に昇り父の右に坐し、光栄を顕して生ける者と死せし者を審判する為にまた来たり、その国終わりのなからんを。」

イエス・キリストとはいったい誰で、なぜ彼がキリスト教の中心の位置を占めているのでしょうか？なぜ信経は、テキストの半分以上が彼について述べたものなのでしょうか？わたしたちはイエスについて何をどこから知っているのでしょうか？イエスは、自身を人の子、また神の子と呼んでいます（ヨハ 3：13-18）²⁹。これらの呼称は、何を意味しているのでしょうか？

3.1. 人の子

イエス・キリストは、地上に生きた全ての人の中で、最も有名な人物です。誰一人として、彼のようにたくさん書かれたり述べられたりした人はいません。本、絵画、音楽作品、映画が彼を取り上げ、説教で彼について語られ、イ

²⁹ 「人の子」とは、福音書の中でイイスス・ハリストスが自分を指して使う主要な言葉です。ヘブライ語からの訳でこの慣用句は、ほかでもなく「人」を意味します。

ンターネットでも彼について書かれています。さらに、彼にちなんで聖堂が建てられ、二十億以上の人々が彼の名で自分たちを呼んでいます。キリスト教徒は、地球上でもっとも大人数の宗教です。

福音書

イエス・キリストに関する情報の最重要な源泉は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる四**福音書**です。福音書は、イエス・キリストの地上での生涯を目撃した人々の証言であり、あるいは、このような証言に基づいたものです。聖書の全書の内、福音書こそが教会においてもっとも権威あり、読まれ、敬われるものです。四福音書を収めた本は、典礼に不可欠な物で、信者による伏拝のために持ち出されたり、特別な畏敬の印として接吻（つまり口づけ）されたりします。

わたしたちは、この書物から、イエス・キリストが、（かつてキリスト教を批判する人々が描き出そうとしたような）架空の文学的登場人物ではなく、**実在の歴史上の人物**であったことを知ることができます。彼は、歴史上の具体的な時期、ローマ皇帝アウグストゥス（オクタヴィアヌス）とユダヤのヘロデ大王の治世に生まれました。彼の出生地は、当時の**ローマ帝国ユダヤ**の街、ウィフレム [ベツレヘム] でした（マタイ 2 : 1、ルカ 2 : 4-7）。

Добавлено примечание ([小野 成信
провинция Иудея? ユダヤ属州? ヘロデ時代はローマの保護国で、ヘロデの死後に属州化したのでは? p36

イエス・キリストの降誕

イエス・キリストは、特別な、超自然的なかたちで生まれました。彼の母はマリアという、ヨセフという男性と婚約したユダヤの女性でした。彼女に天使が現れ、彼女が子を生むこと、その子がいと高き方の子と言われること、彼の国に終わりが無いことを告げました。マリアは「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」と問い、天使は「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む」と答えたのでした（ルカ 1：26-35）。

信経では、この福音書中の叙述に従って、**イエス・キリストは聖霊と処女[童貞女]マリアから生まれた**と述べられています。マリアは、イオシフと聘定していたとはいえ彼と**夫婦関係を持たず не вступила в брак**、童貞女であり続けたと教会は信じています。教会は彼女を「永貞童女」、つまり処女であることを永久に護った人と呼びます。

赤ん坊が生まれた時に与えられた「イエス」という名前は、ヘブライ語からの訳で「主は救い」を意味します。イエスについて新約聖書の中で数多く述べられているギリシャ語の言葉「キリスト」は「**被膏者** [膏（あぶら）を塗られた者]」³⁰を意味します。これは、イエスの司祭 [祭司]、預言者、そして王の

Добавлено примечание ([小野 成信
е вступила в брак
とは、「結婚しなかった」？「夫婦関係を持たなかつた」？ p36

Добавлено примечание ([小野 成信
教訓蒙 64 p

³⁰ 「キリスト [ハリストス]」は、ヘブライ語の「マシアハ」、あるいは「メシア（ヨハネ 4：25）」のギリシャ語訳です。

職³¹、つまり彼のイスラエル民族と全人類とに対する特別な使命を示しています。

イエス・キリストの降誕は、超自然的なしるし〔正教訳：休徴〕をともなうものでした。天使が羊飼いにイエスの降誕を告げ（ルカ 2：8-18）、不思議な星に導かれた東方の博士たちがイエスを拝するためにやってきた（マタイ 2：1-12）のです。

赤ん坊イエスは、生後八日目に、ユダヤの律法に則って割礼を施され（ルカ 2：21）、四十日目にマリアとヨセフとが彼を「主に献げるため」エルサレム神殿に連れて来たのでした。そこで彼らを正しい人、長老シメオンが迎え、イエスが「異邦人を照らす啓示の光」、イスラエル民の誉れとなることを預言した（ルカ 2：23-33）のでした。

イエスの受洗と宣教の開始

ローマ皇帝ティベリウスの治世十五年目、ヨルダン川岸边に、人々に悔い改めを呼びかけ、彼らに対して罪からの浄めのしるしとして、ヨルダン川に体を沈める洗礼の儀式を行う預言者が現れました。教会の伝統で洗礼者ヨハネ、あるいは前駆〔先駆者〕ヨハネと呼ばれるこの預言者については、四福音記者全

³¹ 古代イスラエルにおいては、司祭（出 28：41）、預言者（列王記第三〔王上〕 19：16）、そして王（列王記第一〔サム上〕 10：1、16：13 他）が、膏を塗ることを通じてその職に就けられていました。

員、さらに他の史料（特に一世紀ローマのユダヤ出身歴史家フラウィウス・ヨセフス）が物語っています。

ヨハネは、自身のところにきた人々に「わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と話していました。イエスがヨハネから洗礼を受けるためにヨルダン川に来た時、最初ヨハネは彼を止めようとして「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか」と述べます。イエスは「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」と答えました。そのあとでヨハネは、イエスに洗礼を受けることを許します。そして、イエスが水から上がった時「天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。そのとき、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』と言う声が、天から聞こえた」のでした（マタ 3 : 11-17、マコ 1 : 9-11、ルカ 3 : 21-22）。この頃イエスはおよそ三十歳でした（ルカ 3 : 23）。

洗礼を受けた後イエスは、荒野に行き、四十日を食べ物も水も摂らずに過ごしました。ここで悪魔が彼を誘惑しましたが、イエスは全ての誘惑にうち勝ち、悪魔との戦いに勝利したのでした（マタ 4 : 1-11、マコ 1 : 12-13、ルカ 4 : 1-13）。

イエスが宣教を始めた言葉は、授洗ヨハネが人々に向けたのと同じ「悔い改めよ。天の国は近づいた」でした（マタ 3 : 2、4 : 17）。すぐにイエスの周囲には弟子と信奉者のグループができあがり、その中から彼は十二人を選んでこれを使徒と名付けました（ルカ 6 : 13）。イエスの奇跡や教えにひきつけられた群衆が、彼の後に続いたのでした。

イエス・キリストの奇跡

奇跡は、イエス・キリストの生涯においてその公生活の内、もっとも周囲の人々の興味をかきたてた側面でした。ガリラヤで宣教を始めてすぐ「イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従（マタイ 4 : 24-25）」いました。時間とともにイエスの名声は増すばかりで、彼に治癒された人々の一部は、女性も含めて、彼の弟子グループに加わっていったのでした。

イエスが公生活に出た後に行った奇跡についての話は、福音書叙述のかなりの部分を占めています。全体として福音書中には、イエスの奇跡に関する（彼の生涯や公生活で起こった、様々な種類の超自然的事象についての短い言及を除いて）はっきりした話が三十以上収められています。その中には、数

多くの治癒、悪霊につかれた人々からのその放逐、死者を復活させたこと三回、自然に対するイエスの権能を物語る出来事数回（水上を歩いたこと、暴風を鎮めたこと、いちじくを呪ったこと）、その他超自然的事象数回（水を葡萄酒に変えたこと、五つのパンによって五千人を、四つのパンによって七千人を満腹させたこと、奇跡的な豊漁二回）が含まれます。

イエスの行った奇跡の総数に関していえば、これは計算することはできません。数百、あるいは数千の治癒についての話になるかもしれないのです。これについては、イエスが治癒や悪霊放逐を大規模に行っていたことを明らかにする、福音書の多くの箇所³²が物語っています。

Добавлено примечание ([小野 成信
うちちょっとスツキリ訳せるか？p43-44

奇跡と信仰

福音書には、イエスが誰かを治癒することを拒否した、という話は一つも収められていません。ところが彼は、自分の権能を証明するためにしるしを要求された時には、奇跡をおこなうことを拒否しています。イエスは、荒野で悪魔に誘惑された時、悪魔が期待した奇跡を 1 つも行おうとはしませんでした。イエスは、「天からのしるしを見せてほしい」と頼んだファリサイ派とサドカイ派の人々に対して、これを拒否して（マタ 16：1-4、マコ 8：11-12）います。

³² マタ 4：23-24、8：16-17、9：35、12：15、14：35-36、15：30-31、19：2、21：14、マコ 1：32-34、39、3：10-11、6：54-56、ルカ 4：40-41、6：17-19、7：21、ヨハ 20：30 参照。

ファリサイ派の人々は、イエスを信じるためにといって奇跡を要求しましたが、イエスの教えによれば、まさしく信仰こそが奇跡が起こるための不可欠な条件とならなければならないのであり、**奇跡は、信仰の結果であって理由ではない**のです。イエスは自身の弟子たちに「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない」と言っています（マタ 17：20）。信仰者にとっては、できないことは何もないのです。奇跡は、周囲の世界全てと同様、その人の生活の歴然かつ疑うべからざる現実たりえるのです。

イエスは、何回も治癒される人に信仰を要求し、あるいは彼らの信仰を試しました。治癒を求める目の見えない人に対して、イエスは「わたしにできると信じるのか」と聞いています（マタ 9：28）。同じく頻繁にイエスは、治癒された人の信仰が持つ救いの力を断定しています。「あなたの信仰があなたを救った（マタ 9：22、マコ 10：52）。」「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように（マタ 15：28、ルカ 7：50）。」「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい（マコ 5：34、ルカ 8：48）。」「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った（ルカ 17：19）。」「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った（ルカ 18：42）。」

イエスに治癒を求めた全ての人が、強い信仰を持っていたわけではありませんでした。ある人はためらい、悩み、まだ不信仰と信仰との中途にいたのです。しかし主は、彼らの信仰を強くする手助けをしました。ある人は、幼い時からひどい発作を患っていた自分の子をイエスのところに連れてきて、「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください」と言いました。イエスは彼に『『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる』と答えます。子どもの父親は、涙して「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と叫んだのでした（マコ 9：17-27）。イエスは、子どもの重病を癒し、それと同時にその父親の霊的病である不信仰をも癒したのです。

主の変容

イエスの奇跡の中で、**変容**は特別な位置を占めます。「イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。ペトロが口をはさんでイエスに言った。『主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。』ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、『これはわたし

の愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた。(マタ 17 : 1-5。Cf. マコ 9 : 1-7、ルカ 9 : 28-35)」という出来事です。

この奇跡のおかげで、人体というカーテンに隠されたキリストの神性が、弟子たちに示されました。目に見える特別な形で、イエスの内に在る神の栄光が示されました。イエスが神としての本性³³によって有する光が示されたのでした。

成聖者グレゴリオス・パラマス（十四世紀）の教えによれば、変容の山で弟子たちが見た光は、通常の物理的な光ではありませんでした。これは、自らの臨在を示す、特別な神の力の現れだったのです。神の光は、人を変え、変容させ「それを見た人々は、それをただ肉体的な目ではなく、神の神^oの力によって変えられた目によって見た」³⁴のでした。

イエス・キリストのたとえ話

福音書の中でイエスは、街から街へと移動して人々に神の国について語る、絶えず移動する説教者、**教師**として現れています。自分の話の中で、イエスは、日常生活や自然界から借用した隠喩や直喩を頻繁に用いました。彼の話は、表現力豊かで鮮明、詩的でした。

³³ イイスス・ハリストスの2つの本性については、「3.2. 神の子」ハリストスの2つの性参照。

³⁴ グレゴリイ・パラマ『講話集』第34（主の変容について）。[和訳は、グレゴリオス・パラマス（大森正樹訳）『講話集』上智大学中世思想研究所（編訳・監修）『中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』平凡社、1994年。、。]

彼の教えの多くは、短い物語である**たとえ話**の形態をとっています。その中では、比喩を使って霊的・道徳的真理が伝えられています。福音書の中には、このようなたとえ話が 30 以上収められています。霊的・道徳的真理を伝えるための基本的形態としてたとえ話をを用いるのは、福音記者たちが以下のようにわざわざ指摘するほど、イエスの特徴でした。「イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった（マタ 13 : 34）。」「イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。たとえを用いずに語ることはなかった [.....]（マコ 4 : 33-34）。」イエスがたとえ話によって語るのをやめた時には、それは「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません（ヨハ 16 : 29）」と驚きをもって迎えられたのでした。

たとえ話を理解するための鍵は信仰です。このことは、イエスのたとえ話と彼の奇跡とを類似させています。心がかたくなになり、見ても見ず、聞いても聞かない人々に対しては、たとえ話の意味は隠されているのです（マタ 13 : 13、マコ 4 : 12、ルカ 8 : 10、ヨハ 12 : 40）。イエスの奇跡が、律法学者やファリサイ派の人々をして、彼の教えが真理であることを納得させることがなかったのと同様に、たとえ話の中で述べられるイエスの教えも、彼が神から遣わされたメシアであると納得させることはなかったのでした。反対に信仰によって、イエスの奇跡の目撃者や彼のたとえ話の聴衆の多くは、彼のメシアとしての役割を理解するにいたったのでした。

イエスのたとえ話の不変の価値は、人々がよりよく神を理解し、神に近づき、神を愛することを助けるという点にあります。これらのたとえ話の中で神は、自身の部下に対して絶対的な権力を有する最高支配者として現れます。彼は必要だと考えるものをそれぞれの人と与え、後でそれぞれの人から受け取ったものを何に使ったのかを報告させます（マタ 25 : 14-30）。彼は、その意思に反抗し、その命令を実行しない人々を厳しく罰します（マタ 22 : 7）。同時に神は、自らを、その抱擁に悔改する罪びとを受け入れる用意のある、忍耐強く憐れみ深い父として現わしてもいます（ルカ 15 : 20）。神は、自身の被造物として、自身の子どもとして人を愛しており、多くのたとえ話は、それぞれの方法で、この真理を明らかにしています。

さらに、たとえ話は、神のひとり子について述べています。たとえ話の中で彼は、ただ聡明な教師としてではなく、迷った羊を捜し、見つけ、喜んでその羊を担いで行く善い牧者としても現されています（ヨハ 10 : 1-16）。彼は、収穫物を受け取るために神によってその葡萄園に遣わされ、自身の生命を代償として父の意思に服従する者として明らかにされています（マタ 21 : 33-41）。

最後に、たとえ話は、人がどのように隣人との関係を築かなければならないかを述べています。人は、父が放蕩息子を赦したように、神が債務者を赦す（マタ 18 : 27）ように、赦さなければなりません。また、強盗の手にかかった人の災難に応じた憐れみ深いサマリア人（ルカ 10 : 30-37）のように、他人の災難に応じなければなりません。（ルカ 7 : 41-47）。多くを赦された人が愛するよ

うに、愛さなければなりません。神の目によって人々を見、彼らのたましいの深淵を見つめ、その中に神の像を見抜かなければならないのです。

天の国

イエスの教えやたとえ話の主要テーマは、**天の国**、あるいは神の国です。イエスはどこにも天の国の定義を与えてはいませんが、その本質を、多くの表象、比喩、たとえ話によって明らかにしています。

彼は、たとえ話を「神の国は何に似ているか。何にたとえようか（ルカ 13 : 18)」という疑問から始めたり、「天の国はからし種に似ている。[.....] 天の国はパン種に似ている。[.....] 天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。[.....] また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。[.....] また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。（マタ 13 : 31、33、44、45、47）」というようにそれらの疑問に対する答えから始めたりしています。

イエス・キリストの宣教において、天の国とは全てを包括する概念であり、これを現在や未来、地上の現実や永久のいずれにもまとめることは不可能です。天の国は、具体的な地上の姿も具体的な言語的表現も有していません。天の国は、時間においても場所においても、限定されえません。天の国は、この、今の、外的なものではなく、天上の、将来の、内的なものを指向しているのです。天の国とは、人の生活や人の相関関係を目に見えない形で満たし、

人々を取り巻く様々な物体や現象を通して透けて見え、生命に意味と正当性を与えるのです。

イエスは、天の国について、人の内的経験として語っています。ある時ファリサイびとたちがイエスに「神の国はいつ来るのか」と尋ねた時、彼は「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」(ルカ 17:20-21) と答えました。

イエスは、神の国到来を宣べ伝えて、人々に、神を中心とする新たな生命の価値を明かしています。しかし、神の国に関するイエスの報せは、神に服従することへの呼びかけに留まりません。もしそうでなかったとすればこれは、旧約の預言者たちが人々にもたらした報せと根本的には変わらなかったことになってしまったでしょう。彼らも、悔改の不可欠性、思考様式と生活様式の修正、歴史における神の働き、彼の人々の内における存在について語っていました。旧約の神もまた生ける神ですが、人々から離れて天上に、雲の彼方に住まい、雷や電で自身の栄光を示す神でした。

神の国に関するイエスの報せが根本的に斬新であるのは、彼自身がこの国を天上から地上へと引き下ろしているという点にあるのです。そして、彼は、ただ国のみならず、従来は見えぬ知られぬ秘められた近寄りがたいものだっ

Добавлено примечание (小野 成信
1p、原文では「ルカ 17:21」)

た神の顔³⁵を地上の人々に明らかにして、天上の神自身を示しているのです。天の国は、ただ未来の現実となるだけでなく、ここの現在、つまり地上で、[永遠の中ではなく] 時間の中における人々の生命の新たな次元となっているのです。

使徒パウロは、この次元を「わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命（ロマ 6：23）」と呼んでいます。ただ神における生命ではなく、まさにキリスト・イエスにおける生命が永遠であるというのは、人々にとってこれが死後に始まるからではありません。この生命は、すでにここで、つまり人がキリストを信じ、彼の弟子となったその瞬間から始まり、永遠の中で続いていくのです。

イエスは、神の国を宣教して、人々に自分自身を明らかにしています。同時に彼は人々に、神への道をも明らかにしています。彼は自身について「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない（ヨハ 14：6）」と述べています。

天の国は、イエスという人物、彼の業、彼の宣教、そして彼の証と不可分のものです。最終的に、天の国は、イエスの教えによってというよりもむしろ、各福音書がそのエピソードによって終わるところの、贖罪の業によって明らかにされるのです。

³⁵ 本カテヒジスにおいて「神の顔」の表現は、旧約聖書において神の手、足、目について述べられているのと同様、比喩的、転義的に用いられます。

イエスの敵対者

四福音書全てが、イエスと、祭司長、ファリサイびとや律法学者といった当時のイスラエル民族の宗教エリートたちとの間に激しい対立があったことを語っています。これは、イエスが宣教を始めてすぐに起こり、時間とともに深刻化の一途をたどりしました。

イエスとその敵対者との間の論争は、宗教生活の本質に関するものでした。信仰とは何か。神は、どのような崇拝を要求しているのか。**律法学者やファリサイびと**たちは、信仰とは、成文化された法律と、人々が絶対的に従わねばならない口伝の言い伝えとによって記録された規則の総体である、と確信していました。しかし規則があまりにも多かったため、ファリサイびとたちは、これらの規則を破ることを許す大体系を確立したのでした。ファリサイびとたちは、神に対する礼拝はエルサレムでのみ行うべきものであり、ヘブライの民だけが選ばれ、予め救いを約束されたものであると確信していました。エルサレムではなくゲリジム山で神に礼拝しなければならないと考えていたサマリア人たちは、ファリサイびとたちと争っていました。この争いは、武力衝突や殺人に発展することもありました。

ひるがえってイエスは「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。[.....] しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこの

ように礼拝する者を求めておられるからだ。(ヨハ4:21-23)」と語っていました。

イエスの教えによれば神への崇拝とは、よしんば神の權威によって成聖されたものであるにせよ、ある種の規定の総体を綿密に遂行することに帰着するものではありません。宗教生活の本質とは、天の国を探すということにあるのです。この主たる目的に、人の全ての志向が従属していなければならないのです。イエスは、悔改、つまり内的に生まれ変わることを呼びかけました。これは決して、ある種の外的規定を実行することに留まるものではないのです。

モーセの律法と安息日に関する論争

イエスと彼の敵対者たちとの間の論争の多くは、**モーセの律法**³⁶の具体的な規定に関するものでした。この律法の戒めの一つには「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日である(出20:8-10)」とあります。人は一週間の内一日、すなわち安息日には地上の仕事や思い煩いを最低限にし、この日を神に捧げなければならない、ということがこの戒めの意義でした。しかしファリサイびとは、この戒めを浅薄な知識にしてしまいました。彼らは、安息日に人が歩い

³⁶ モーセ五書、すなわち聖書の最初の五書、特に出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の中に含まれる規定や法を集めたものが、モーセの律法と呼ばれています。

ても良い最大距離など、安息日に関する多くの制限を定めました。彼らの意見によれば、その助けによって、人は神を喜ばせることができるのでした。

ひるがえってイエスは「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない（マコ 2：27）」と語りました。手段であるものが、目的になってしまっはいけません。外的規定は、内的目的を達成するための手段に過ぎないのです。彼の宣教は、まさにこの目的にこそ向けられていました。

イエスは、自身の弟子たちに、安息日に畑を通っている際に麦の穂を摘んで食べることを許しましたが、これはファリサイびとたちの許していなかったことでした。イエスは、ファリサイびとたちの憤慨に応じて、自身について「人の子は安息日の主なのである」と述べています（マタ 12：1-8）。

イエスは、安息日に数多くの治癒を行いました。これは、彼が意図的に安息日の平穩の戒めを破ろうとしていたからではなく、安息日に彼は会堂に通っていて、そこには群衆が集まっており、多くの人々が彼に治癒を乞うたからでした

ある時イエスは、腰が十八年にわたって曲がったままでどうしても伸ばせなかった女性を治癒しました。その際会堂長は「イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。『働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない』」。イエスは彼に「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サ

タンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか」と言ったのでした（ルカ 13：10-16）。

ファリサイびとたちは、善行は時間割に従ってだけ行うべきで、奇跡をおこなう手順もきちんと規定に従っていなければならないと考えていたのです。彼らにとって善行は目的そのものではなく、最も重要なのは、儀式、規則の順守、モーセの律法と「昔の人の言い伝え」の順守でした。ひるがえって、イエスの関心の的となっていたのは、常に、生きた人、つまり道、家や会堂で出会った人、将来のいつかではなく、今ここで助けを必要としている人でした。彼らがイエスに依頼してきたときには、彼はすぐに治癒を行い、安息日はなんらこれを妨げるものではなかったのです。

清浄と不浄に関する論争

ファリサイびとたちは、自身たちを、神との特別な親近性を有する、普通の人々から「分けられたもの（『ファリサイ』の言葉自体が『分離した者』を意味します）」であると考えていました。彼らが最も気遣っていたのは、何かしら、あるいは誰かしら不浄なものとの接触によって汚れてしまわないようにすることでした。不浄な人々や事物のリストは、旧約聖書中にあります。ファリサイびとたちは、これらの表に、より明確にする数多くの詳細を加えたのでした。福音書記者はこう述べています。「ファリサイ派の人々をはじめユダヤ人は皆、昔の人の言い伝えを固く守って、念入りに手を洗ってからでないと食

事をせず、また、市場から帰ったときには、身を清めてからでないと食事をしていない。そのほか、杯、鉢、銅の器や寝台を洗うことなど、昔から受け継いで固く守っていることがたくさんある（マコ 7 : 3-4）。」

ひるがえって、汚れと罪の源は、人の外ではなくその内にある、というのがイエスの教えでした。「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。[.....] 中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである（マコ 7 : 15、21-22）」とイエスは語っています。

イエスは人の弱さに対して寛大で、罪深い女性（ルカ 7 : 36-50）や姦通した女性（ヨハ 8 : 3-11）と話すことをいといませんでしたし、税吏や罪人と食事をとって（マタ 9 : 11、マコ 2 : 16）いました。しかしファリサイびとに対しては、イエスは、彼らを「蝮の子」「偽善者」「ものの見えない案内人」と呼んで、また彼らを「外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている」墓に例えて（マタ 23 : 13-27）、その偽善を激しく糾弾し、容赦がありませんでした。

イエスとファリサイびとたちの間の対立は、イエスが、亡くなって四日も埋葬用の洞に眠っていたラザロを復活させた時に、その頂点に達しました。その後、祭司長とファリサイびとたちは、イエスを殺すことに決めたのでした（ヨ

ハ 11 : 43-53)。彼らはこの決定をしばらく心中であたためていましたが、イエスが若いロバに乗って、群衆の熱狂的な叫びの下にエルサレムに凱旋した後に、ちょうど良いチャンスがやってきたのでした。その時「都中の者が、『いったい、これはどういう人だ』と言って騒いだ。そこで群衆は、『この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ』と言った」のでした（マタ 21 : 6-11）。祭司長とファリサイびとたちは、「イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するため」でした（ヨハ 11 : 57）。

機密の晩餐

捕縛される前夜、イエスは弟子たちとともに、後に**機密の晩餐** [最後の晩餐] と呼ばれることになる、自身の最後の食事をとったのでした。これについては、四福音書全てに述べられています。

福音記者マタイ、マルコ、ルカの記述によれば、機密の晩餐は過越の食事³⁷ でした。「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしの体である。』また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった。彼らは皆その杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。『これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶど

³⁷ ユダヤ人の過越の祭りは、イスラエル民族がエジプトでの奴隷生活から解放されたことを記憶する祭日です。

うの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。(マコ 14 : 22-25、マタ 26 : 26-29)』イエスは弟子たちに「わたしの記念としてこのように行いなさい (ルカ 22 : 19)」と命じたのでした。

まさにこの戒めこそが、教会の最重要な機密である聖体機密 [ユーカリスト、聖餐]³⁸の基礎となったのです。

ヨハネの福音書によれば、イエスは晩餐の直前に、上着を脱ぎ、「たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始め」ました (ヨハ 13 : 4-5)。

その後でイエスは、その大部分で愛について述べている、最後の教えを述べたのです。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。[.....] 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。[.....] わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である (ヨハ 13 : 34-35、15 : 9-10、12)。」

³⁸ これについては——頁参照。раздел III на стр. 232

受難、死、そして埋葬

イエスは何度も**自身の死を預言**していました。イエスは、自身が「多くの人の身代金として自分の命を献げるために（マタ 20：28）」この世に来たことを知っていました。イエスは、自身の父の意志に従い、死へと向かっていたのです

人として、イエスは死を恐れていました。捕縛前夜に彼は弟子たちに「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい」と語り、神・父に向って「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」と祈っています（マタ 26：38-39）。その際、イエスの「汗が血の滴るように地面に落ち（ルカ 22：44）」ていたのです。それと同時にイエスは、死が避けられないことを知っており、従順に神・父の意志を受け入れたのです。神・父に対するイエスの**服従**は、絶対的なものでした。彼は「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順（フィリ 2：8）」だったのです。

イエスはユダヤの最高法院³⁹によって死刑を宣告され、ローマ帝国の総督ポンテオ・ピラト⁴⁰の判決によって磔刑に処されました。イエスは裁判の間、無罪判決を求めず、沈黙して告発や嘲笑に耐え、愚弄され鞭打たれたのです。

³⁹ 最高法院とは、祭司長と 70 人の裁判官からなる最高裁判所でした。

⁴⁰ 当時のユダヤは、プラエフェクトゥスという役職のローマ帝国の代官によって統治されていました。時が経つと、この役職は「プロクラトル」と呼ばれるようになりました。

イエスは十字架に磔にされました。彼は激しい苦痛の中で死んでいきました。ローマ兵たちが彼を十字架に釘打った時、イエスは「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです（ルカ 23：34）」と祈り、十字架上で自身の父に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか（マタ 27：46、マコ 15：34）」と呼びかけています。

教会の信仰によれば、イエスは一瞬たりとも神・父に見捨てられてはおらず、しかし彼は、人々を救うために、ただ身体的にだけではなく、精神的にも激しい苦しみを味わわなければならなかったのです。イエスは自由意思で苦しみの盃（さかずき）を受け入れたのであり、これを底まで飲み切らなければならなかったのです。人に降りかかるものの中で、人にとっての苦しみの底、最も厳しい試練とは、神に見放されること、神の沈黙、神がいないようにみえることです。

苦しみながら神の存在を疑う人々、神にぐちをこぼす人々、不平を言う人、覇気をなくしてしまう人々までも含む、全ての苦しむ人々に対するイエスの同情が、彼の十字架上の苦しみの中で、最も強く示されました。イエスはぐちをこぼさず、不平を言わず、疑わずゆらいでもいませんが、彼の感じている耐えがたい身体的な痛みは、一人きりで断末魔の恐怖の中にとり残された人として味わっている精神的苦悩で増幅されたのでした。イエスは神に見放されませんでした、神に取り残されたという体験をしなければならなかったのです。なぜならイエスは「神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となっ

て、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです（ヘブ 2 : 17-18）。」

神は、イエスが極めて厳しい苦しみさらされている時ですらも、彼にとって父であり続けました。福音記者ルカの証（あかし）によれば、イエスが十字架上で最後に述べた言葉は「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます（ルカ 23 : 46）」でした。この言葉とともに、イエスは息絶えたのでした。

イエスの遺体は十字架から降ろされ、慣習に従って洞穴に埋葬されました。ユダヤの過越し祭と重なった安息日に、イエスの遺体は墓にあり、イエスにつき従っていた女性たちは「掟に従って休んだ（ルカ 23 : 56）」のでした。

復活

週の最初の日（後にロシアの伝統では「ヴォスクレセーニエ [ロシア語で復活（祭）、日曜日を意味する]」と呼ばれるようになります）に女性たちは、イエスの遺体に香油を塗るために、彼の埋葬場所へとやってきました。女性たちは墓所が空になっているのを見、天使たちが彼らに**イエスが復活した**ことを告げました（マタ 28 : 2-7、ルカ 24 : 4-7）。その後、弟子の 2 人、ペトルとヨハネが墓へと走りついて、イエスの残した葬送用の布だけを見つけたのでした（ヨハ 20 : 3-10）。さらに後で、復活したイエスは、墓のすぐそばでマグダ

ラのマリア⁴¹に（マコ 16 : 9、ヨハ 20 : 11-18）、墓から立ち去って行く他の女性たちに（マタ 28 : 9-10）、エマオへの道すがら 2 人の弟子たちに（ルカ 24 : 13-31、マコ 16 : 12-13）、弟子たちの集まりに（マコ 16 : 14、ルカ 24 : 36-50、ヨハ 20 : 19-25）現れました。8 日後にイエスは、また弟子たちに現れ（ヨハ 20 : 26-29）、その後でまた 1 度ならず様々な弟子たちに現れました（ヨハ 21 : 1-23、一コリ 15 : 5-7）。

最後にイエスは、ガリラヤの山で弟子たちに現れてこう言いました。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる（マタ 28 : 18-20）。」その後で彼は「天に上げられ [昇（のぼ）り]、神の右の座に着かれた（マコ 16 : 19）」のでした。

イエス・キリストの復活は、イエス自身によってその業（わざ）を継続するために選ばれた弟子たち、使徒が世界へともたらした主要な知らせでした。イエスの復活が彼らの教えの主要な主題でした。この事実の意義は、初代教会にとって明白で疑う余地のないものだったため、使徒パウロはコリントのキリ

⁴¹ マグダラのマリアはイエス・キリストの女性の弟子の一人です。彼女は、イエスにつき従っていた女性たちの中で、福音書中最も多く登場しています（マタ 27 : 56、61、28 : 1、マコ 15 : 40、47、16 : 1,9、ルカ 8 : 2、24 : 10、ヨハ 19 : 25、20 : 1、11-18）。

スト教徒に向けて「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です（一コリ 15:14）」と述べています。

イエス・キリストの復活は、現代でもキリスト教信仰の核心であり続けています。まさしくこの出来事を中心として、キリスト教会の神学が組み立てられています。教会の典礼の暦（こよみ）において一年間の祭日〔の多く〕は、キリストの復活祭に従って組み立てられており、復活祭は「祭の祭（まつりのまつり）」、「祝の祝（いわいのいわい）」と呼ばれます。

3.2. 神の子

キリスト教会にとってイエス・キリストは、単なる人ではありません。彼は藉身した神です。イエス・キリストは神であり救世主であるという信仰こそが、キリスト教徒と非キリスト教徒とを区別するのです。

イエスは神の独生の子

教会は、イエス・キリストが**神の独生（どくせい）の子**〔神の独り子〕だと信仰しています。ヨハネによる福音書は「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。[.....] 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった（ヨハ 1:1-2、4-5）」という言葉で始まっています。こ

ここで「言」とは、この世に目に見えない神を現した「父のふところにいる⁴²独り子である神（ヨハ 1：18）」を指します。信經によれば神の子は、人や天使と異なり、生まれたのであって、造られたものではありません。神の子は、神の被造物ではなく、永遠に「時がないときから」神・父との一致にあります。神の被造物全てはその本体〔本質〕において神と異なっていますが、神の子は「父と一体」、つまり神・父と神・子は、同一の神性の本体を有しているのです。

神・子は、神性においては神・父から生まれましたが、彼は時間の中ではなく、永遠において「時間の枠の外で」生まれたのです。神・子は神・父に同等であり、常に神・父とともにありました。神・父とともに神・子がなかったという瞬間はなかったのです。人としては、神・子は、具体的な歴史的瞬間に神・聖神[°]と童貞女マリアから生まれたのでした。

イエスは神人

神の独生の子、主イエス・キリストは**神人**、つまり同時に、神であり人です。彼は、半分の神、半分の人なのではなく、完全な神であり、完全な人なのです。神の子は、人となって、自身を信じる人々を天の父の子とし、これらの人々にとって親戚、兄弟となったのでした⁴³。

⁴² 「父のふところにいる」とは、神・子が神・父の内にあることを、赤ん坊が母の胎内にいることに例えた比喩表現です。

⁴³ 新神学者シメオン『道徳講話』第13講話（ロシア語翻訳では第35講話）。

イエス・キリストは自身の個位において、時間と永遠とを、地のものと天のものとの、人のものと神のものとの組み合わせたのでした。イエスは人性において、罪以外の全てに関してわたしたちと同じです。彼は、他の人々と同様、飲食し（マタ 9：10-13）、感心し（マタ 8：10、ルカ 7：9）、疲れ（ヨハ 4：6）、眠り（マタ 8：24、マコ 4：38）、怒り（マコ 3：5）、憤り（マコ 10：14）、喜び（ルカ 10：21）、泣き（ヨハ 11：35）、悲しみもだえ（マタ 26：37-38、マコ 14：33-34）ていました。しかしイエスにおいて、人性の発現全ては、罪という成分を有していなかったのです。

キリストの二つの性

神性と人性の**二性**は、イエス・キリストの中で「混じらず、変わらず、相別れず、相離れず」結合しています。これはつまりキリストの中で、二性がお互いと何か新しい性を構成するような合体をせず、一方がもう片方を吸収することがなく、その結合において二性のそれぞれが変化しないということを意味しています。それと同時に二性は、神・聖神^oにより受胎した瞬間以降、互いと別れたり離れたりしていないのです。

イエス・キリストは、一体不可分の一つの個位であり、その中では神性と人性とが、調和した切り離せない形で結合しています。これこそ、キリスト教神学が時間を超越した神の子と、時間において生まれた人イエスとを区別しない理由です。そして処女マリアは、イエスを人として生んだにもかかわらず生

神女（神を生んだ女）と呼ばれますが、これは、時間を超越した神の子と、時間において生まれた人イエスとは、同じ個位だからなのです。

イエスは主であり神

教会はイエスを、天の神・父を呼ぶのと同様、**主**と**神**という名で呼んでいます。この 2 つの名がイエスに対して最初に用いられたのは、使徒トマスによってでした。彼は、復活したイエスが弟子たちに初めて現れたときその場にいませんでした。彼らが主を見たと言うと、トマスは「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と応じました。八日後、弟子たち皆が集まっていたときにイエスはやってきて、トマスに「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と言いました。フォマはそれに応じて「わたしの主、わたしの神よ」と言ったのでした（ヨハ 20:25-29）。

信経においてイエスは、「一つの主」、「真（まこと）の神よりの真の神」と呼ばれています。これによって、神・父と神・子の等しい位（くらい）が強調されています。

信経の言葉「万物彼に造られ（全てのものが彼によって造られ）」は、世界と人の創造に神の子が参加していたことを示しています。ヨハネによる福音書には「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは

何一つなかった」とあります（ヨハ 1:3）。使徒パウロは神・子について、神が彼によって「世界を創造（ヘブ 1:2）」と述べています。教会は、神・父が世界を創造した際、神・子が神的創造の過程に参加していたと信仰しています。

イエスは光よりの光

信経の中でイエス・キリストは「光よりの光」と呼ばれています。神は光であり（一ヨハ 1:5）、キリストもまた光です。まさに彼について、福音書の中で「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである（ヨハ 1:9）」と記されています。イエス自身が弟子たちに「わたしは世の光である（ヨハ 8:12）」と語りました。彼は、自身について群衆に対して「光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい（ヨハ 12:36）」と語っています。

神・子の光と神・父の光は、一つの**神的光**です。聖フィラレートはこう説明しています。「わたしたちは、太陽を仰ぎ見れば、光を見る。この光から、太陽を取り巻く場所全てで見られる光が発生する。しかしその両方が同質であり、互いに別れない、唯一の光である。これと同様、神・父は永遠の光である。彼から、同じく永遠の光である神の子が生まれる。しかし神・父と神・子とは、一つの神性の、互いに別れない、一つの永遠の光なのである。」⁴⁴

イエスは贖罪主であり救世主

⁴⁴ フィラレート『正教訓蒙』67 頁参照。

教会はイエス・キリストを**贖罪主**（しょくざいしゅ）、**救世主**と呼んでいます。なぜなら彼の苦しみと死とが、罪を贖（あがな）う性格を有していたからです。使徒ペトルは「あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました（一ペト 1：18-20）」と記しています。

使徒パウロはローマ人への手紙の中で、イエス・キリストが「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活（ロマ 4：25）」したことを述べています。それに続けて、イエスの死の贖罪的性格について記しています。「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです（ロマ 5：6-10）。」

贖罪の諸理論

人の肉体における地上への神の来臨は、信心の秘められた偉大な真理（一テモ 3:16）です。何世紀にもわたって神学者たちはこれを解明しようと努力してきました。人の頭脳の限界を超えたものを説明するために、様々な**贖罪の理論**が作りだされました。

たとえば、神学者の一部は「贖罪（身代金）」の言葉の文字通りの意味を根拠として、キリストが、自身の死によって、人類を悪魔から身請けしたと主張しました⁴⁵。他の者たちはこのような解釈を、神を侮辱するものであるとして、人類の救済のためにそれほど高い値を要求するとは、悪魔は何者なのかという正当な反論を行いました⁴⁶。

4 世紀には次のような贖罪理解が提案されました。陥罪の結果、人は悪魔の奴隷となりました。人をあがなうためには、悪魔に代価、身代金を支払わなければなりません。身代金として供されたのは、人、イエス・キリストでした。悪魔は、人類と交換にイエスを受け取りますが、キリストの人性という「餌」の「覆いの」下には、神性の「釣り針」が隠されており、悪魔はこれを呑み込み、しかし引き留めておくことはできなかったのです⁴⁷。このように

⁴⁵ オリゲン [オリゲネス] 『マタイ福音書注解』16 章 8。

⁴⁶ ナジアンゾスのグレゴリオス「第 45 講話」22。

⁴⁷ ニッサのグリゴリイ『教理大講話』第 22-24 講話。[和訳は、ニユッサのグレゴリオス（篠崎榮訳）「教理大講話」上智大学中世思想研究所（編訳・監修）『中世思想原典集成 3 盛期ギリシア教父』平凡社、1992 年、561-566 頁。]

神は悪魔を欺いたのです。この鮮明で巧みな解釈は、かつては贖罪の機密を理解するのをより簡単にするためのものでしたが、現代人がこの奥義の本質を認識するのに役立つものではないでしょう。

中世に西方カトリック圏では、神の子の十字架における犠牲は、神・父の公正さを満足させる必要性によって行われたものだという理論が発展しました。この理論の本質は次のようなものです。つまり、人々は、自身の罪によって神を怒らせ、神に対して莫大な債務を負い、自身のいかなる善行や功労によっても、神とこれを清算することはできなかったのです。神の公正さを満足させ、人類に対する神の怒りを消すためにはいけにえが必要であり、そのいけにえをもたらしたのは神の子だったのです。

正教の伝統では、このような贖罪の解釈は受容されませんでした。東方の教会の師父〔教父〕たちは、キリストが自身を神・父にいけにえとして捧げたのは、神がではなく、わたしたちがこのいけにえを必要としていたからだと述べています。「わたしたちが生き返るためには、藉身し、殺された神が不可欠だった」⁴⁸のです。神・父にではなく、わたしたちにとってこそ、神・子の十字架上のいけにえが必要だったのです。わたしたちの救いのためには、他のどのような神でもなく、まさに**十字架に釘打たれた神**が必要だったのです。

⁴⁸ ナジアンゾスのグレゴリオス「第45講話」28-29。

神・子の十字架上の死は、人に対する神の愛の結果でした。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである（ヨハ 3：16）。」この言葉が、神の藉身と救世主の十字架上の死という「大いなる機密」を最も良く明らかにしています。この言葉から、神は、ある特定の民族やある特定の人々への愛ではなく、全世界への愛のゆえに、自身の子をいけにえに捧げたという結論が導き出されます。

救い

これらの言葉からはまた、救いと永遠の生命とは、キリストを信仰する人々だけのものとなるということがいえます。イエスは自身の昇天の前に弟子たちに「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける（マコ 16：15-16）」と言いました。神であり救世主であるイエスへの信仰、洗礼、そして彼の戒めに従った生活なしには、救いは不可能なのです。

救いとは、キリスト教神学の最重要用語です。信経によれば、神の藉身は「我等の救いのため」に行われました。この目的のためにまた、神・子は地上で生き、奇跡を行い、人々に教え、受難し、十字架上で死に、死者の内から復活し

ました。神・子は、自身の教え、自身の行状、自身の死、そして自身の復活によってわたしたちの救いをなしたと成聖者フィラレートは述べています⁴⁹。

人は、自身の力によっては救われることができません。これはキリスト教神学の主要な公理の一つです。救われて神との一致を達成するためには、救世主が必要です。全人類のためのこのような救世主になったのが、人々のために苦しみを受けて死んだイエス・キリストだったのです。彼の神の恵み⁵⁰が、彼を信仰し、彼の戒めに従って生きる人々を救うのです。

キリストは全ての人々のために苦しんで死んだのか、という質問に対してモスクワの府主教フィラレートは「一方で、主イエス・キリストは、全ての人々のために自身の身を犠牲に捧げ、全ての人々に恩寵と救贖とをもたらしました。しかし他方では、自由意思でイエスと苦しみを共にする人々が、それ[の恩恵]を享受するのです。[.....]わたしたちは、活発で熱心な信仰によって、イエス・キリストが受けた救贖の苦しみと死との力をその内に秘めた秘跡によって、そして、自身の肉体とその情と欲とを十字架に釘打つ⁵¹ことによって、イエス・キリストと苦しみと死とを共にするのです」⁵²と答えています。また、なぜイエス・キリストの苦しみと死とは、わたしたちに救いをもたらすものな

⁴⁹ フィラレート『正教訓蒙』88 頁参照。

⁵⁰ ハリストス教神学において恩寵とは、人に働きかけてこれを救いへと導く、神の特別な力を意味します。

⁵¹ 「肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです[正教訓：肉体を其情及び慾と共に十字架に釘せり](ガラ 5:24)」の表現は、使徒パウエルのもので、情欲や罪深い欲望との戦いを意味します。

⁵² フィラレート『正教訓蒙』96-97 頁参照。

のかという質問に対しては「イエスが、復活し、それによってわたしたちの幸福な復活の基礎を置いたからです」⁵³と答えています。

キリスト教において救いとは、ただ単に神が人々を助けにやって来たという意味では理解されません。神は、溺れかけている人にただ救命浮き輪を放って、その人が海からなんとかあがるのを同情の目で見ているわけではありません。神自身が、人がすがりついて助かることができるように、人の生活の荒れ狂う海へと自らを投じるのです。

神をつかみなさい、しっかりと神にすがりつきなさい、神を離してはいけません。そうすればあなたは溺れません。キリスト教は人々にこう語っています。神人イエス・キリストは、まさにこのような神の姿、遠くから単に同情するのではなく、人生の全ての哀しみと試練を人と共にする神の姿を、人々に明らかにしているのです。

愛のいけにえ

旧約聖書中、神・子による救贖の原像は、たとえばアブラハムの捧げ物のエピソードにみることができます⁵⁴。このエピソードの中では、アブラハムもイサクも神の意志の実行者として描かれています。ところが、アブラハムの方はこの意志を知っていますが、イサクの方は、父の行動が健全な理性、人として

⁵³ フィラレート『正教訓蒙』99 頁参照。

⁵⁴ 本書「信仰とは神への服従」参照。

の道理、伝統的な家族のあり方とあまりにも矛盾しているにもかかわらず、完全に父の意志に従っているのです。イサクは全く反論していません。ただ1度だけ当惑して疑問を投げかけているだけです。イサクは、いけにえの祭壇に何も言わずに横たわります。この出来事を、彼にとっては父の意志と一致している神の意志として受けとめているのです。

聖書のこのエピソードは、どのようにイエスの受難と死という出来事に投影されているのでしょうか。受難の出来事において、神・子は、最初から「多くの人の身代金として（マタ 20：28、マコ 10：45）」のいけにえとなるために「地上に」来たことを知っています。神・子は、自身を遣わした神・父の意志を実行しなければならないことを知っているのです（ヨハ 4：34、6：38）。彼の地上の生活すべては、この世に彼が来た目的であるところの時への移動です（ヨハ 12：27）。しかし、アブラハムに関する旧約聖書のエピソードでは最後の瞬間に天使が、子の上にふりかぶった父の手を押し止めているのに対して、神のひとり子の場合にはこのようなことは起こっていません。神・父の宣告は、そのひとり子によって捧げられたいけにえが、全人類のために救贖のもの、救いのものとなるように実行されるのです。

人と神についての新しい啓示

イエスの藉身、地上での生活、受難と死は、**人についての新たな啓示**となりました。イエスは、人類に神の顔を現し、同時にまことの人の顔をも明らかに

したのです。つまりイエスは、人がどのようになれるか、どのようになるべきかということを示したのです。キリスト教徒にとってイエス・キリストとは、霊的、道徳的完全性の絶対的な手本なのです。

イエス・キリストの受難と十字架上の死は、**神についての新たな啓示**となりました。これらは、それまで人々がいつ何時も見たことのなかった神の顔を現したのです。人々のために、血を流し、十字架上で受難し、恐ろしい苦しみの中で死ぬという神を、人類は初めて知ったのでした。

キリスト教の神は、理神論者の語るような、世界を創造し、自然法則を定め、その後自身は何もせず、世界がそれらの法則に応じて自己発展していくに任せるという神ではありません⁵⁵。また、旧約聖書が現わしている神、つまり積極的に人の生活に干渉し、奇跡を起こし、しるしを見せ、それでいて遠く手の届かない、達成できず理解できず目に見えない、恐怖、震え、戦慄を呼び起こす神とも違います。キリスト教は、同じ神を別のかたちで明らかにしました。神は、人の苦しみを天の高みから眺めるのではなく、自身が人の苦難のまっただ中へと入り、自身がその苦難を受け、人々のために死ぬのです。

キリストの再臨

⁵⁵ 18-19 世紀〔訳注：17 世紀末-18 世紀末か〕にこのような説を発展させたヨーロッパの思想家を理神論者と呼びます。

イエスは〔地上の〕生命の間に、彼がこの世の終末に際して、自身の栄光の内に、それぞれの人に対して最後の審判を行うために再度やって来ることを弟子たちに預言していました（マタ 25 : 31-46）。キリストの**再臨**と最後の審判を待つ心で、初代キリスト教会の生活全ては満たされていました。典礼を起源とするものと考えられる「アーメン、主イエスよ、来てください（黙 22 : 20）」という歓喜の叫びで、新約聖書最後の書物である黙示録は終わっています。

キリスト教徒にとって救世主の再臨は、恐怖の原因ではありません。キリスト教徒は、「〔神が〕彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去（黙 21 : 4）」る日、「最後の敵として、死が滅ぼされ〔.....〕神がすべてにおいてすべてとな（一コリ 15 : 26、28）」る日を待望しています。ハリストスの再臨は、神の悪魔に対する、善の悪に対する最終的な勝利となるのです。キリスト教徒の霊的視線は、この出来事へと向けられています。

4. 聖霊

「又信ず、聖神^o、主、生（いのち）を施す者、父より出で、父及び子と共に拝まれ讃（ほ）められ預言者を以て嘗て言いしを」と信経にあります。これは、聖霊が神であって、キリスト教徒が神・父、神・子に対するのと同様聖霊に祈ることを意味しています。

聖書における神の霊

神の霊については、旧約聖書の中で既に散発的に言及されています。世界創造のとき、神の霊は「水の面を動いて（創 1：2）」いました。神の霊が人を造り（ヨブ 33：4）、人は神の霊によって息をしています（ヨブ 27：3）。神の霊、または主の霊は「知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊（イザ 11：2）」です。

しかし、神・聖霊の真の啓示となったのは、新約聖書でした。イエス・キリストの地上の生活の間、神・聖霊は常に彼と共にありました。イエスの誕生以前にもう、天使が処女マリアに現れて「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む（ルカ 1：35）」と言っています。イエスは処女と聖霊によって生まれました（マタ 1：18-20）。イエスの前駆〔洗礼者ヨハネ〕は自身の母の胎内で既に聖霊に満たされていました（ルカ 1：15）。ヨハネは、後から来る方が「聖霊と火（マタ 3：11、マコ 1：8、ルカ 3：22）」とによって洗礼を授けると語っています。イエスの洗礼の時、聖霊が鳩の姿でイイススへと降りました（マタ 3：16、マコ 1：10、ルカ 3：22）。洗礼のすぐ後に、“霊（れい）”は、悪魔からの誘惑のために、イエスを荒れ野へと導きました（マタ 4：1、マコ 1：12、ルカ 4：1）。

自身の教えの中でイイススは、聖霊の働きについて何度も語っています。イイススは、弟子たちが迫害されることを預言していますが、何を言わなければならないか心配しないようにと諭しています。なぜなら彼らではなく、聖霊が語ることになるからです（マタ 10：20、マコ 13：11、ルカ 12：12）。イエス

は、聖霊に対する冒涇は、この世でも後ろの世でも赦されないと警告しています（マタ 12 : 32、マコ 3 : 29、ルカ 12 : 10）。

イエスがまだ栄光を受けていなかったとき、その弟子たちには“霊（れい）”がありませんでした（ヨハ 7 : 39）。キリストの死と復活は、弟子たちが聖霊を受けるための不可欠な条件だったのです。キリストはこれについて弟子たちとの別れの会話で語っており、その主要な主題の 1 つは**弁護者**が降ることでした。「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である（ヨハ 15 : 26）。」「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである（ヨハ 15 : 26）。」「その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである（ヨハ 16 : 13）。」

イエスは、自身の復活の後弟子たちに現れ、息を吹きかけて彼らに聖神を与えています。「聖霊〔聖神〕を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されなのまま残る（ヨハ 20-22-23）。」それと同時にイエスは、弟子たちに命じてこう述べています。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖

霊〔聖神〕による洗礼を授けられるからである。[.....] あなたがたの上に聖霊〔聖神〕が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる（使 1：4-8）。」

イエスが預言したことは、**五旬祭**の日、使徒たちに火のような舌が降り「一同は聖霊〔聖神〕に満たされ、“霊〔神（しん）〕”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した（使 2：4）」時に実現しました。さらに使徒ペトロはその時こう語りました。「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。[.....] あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、[イエスを] 十字架につけて殺してしまったのです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。[.....] それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです（使 2：22-24、33）。」これを聞いた人々は「大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と言った。すると、ペトロは彼らに言った。『悔い改めなさい。めいめい、イ

エス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。』（使 2 : 37-38）」

教会における聖神の働き

五旬祭からキリスト教会の務めが始まりました。この務めは今日でも続いていて、その中では聖神が働き続けています。“神(しん)”のこの働きこそが、キリストの教えが歪曲されないこと、彼の務めが弟子たちと信者たちによって続けられていくことの保証だと教会では受けとめられています。キリストは、生きて行動する教会の頭(かしら)であり続けながら、聖神の助けによって教会を導いています。この聖神は、イエスが自身の教会に残した「別の弁護者」であり、弟子たちと永遠にいて(ヨハ 14 : 16) 自身からではなくキリストから告げる(ヨハ 16 : 13-14) のです。

福音書がキリストの地上の務めについて述べているのに対して、使徒言行録は、何よりもまず、キリストによって基づけられた教会における聖神の働きについての証(あかし)です。使徒言行録中、信仰者に対する聖神の働きは、「聖霊[聖神]に満たされ(使 4 : 8、4 : 31、9 : 17、13 : 9、13 : 52)」る、「聖霊[聖神]を受ける(使 8 : 15、17)」と表現され、また、信じる人に聖神が降ることについても述べられています。(使 8 : 39⁵⁶、10 : 44、11 : 15)。洗礼は

⁵⁶ 訳注：この節はギリシャ語、新共同訳では「彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った」となっているが、正教訳ではロシア語シノド訳にならい「彼等が水より上りし時、聖神⁵⁷（せいしん）は寺人〔新共同訳：宦官〕に降り、主の使ひフィリップを挙げて去り」となっている。

Д о б а в л е н о п р и м е ч а н и е ([小野 成信

9 ὅτε δὲ ἀνέβησαν ἐκ τοῦ ὕδατος, Πνεῦμα Κυρίου ἤρπασε
τὸν Φίλιππον, καὶ οὐκ εἶδεν αὐτὸν οὐκέτι ὁ εὐνοῦχος·
ἐπορεύετο γὰρ τὴν ὁδὸν αὐτοῦ χαίρων.

Дух Святой сошел на евнуха, а Филиппа восхитил Ангел
Господень

ロシア語テキストとギリシャ語テキストが異なる。

聖神の降臨を伴いました。使徒パウロがエフェソで弟子たちに教えていたとき「人々はこれを聞いて主イエスの名によって洗礼を受けた。パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした（使 19 : 5-6）」のでした。

教会は、全ての神聖な機密が聖神の働きによって行われると信じています。たとえば聖体礼儀⁵⁷でパンとぶどう酒は、聖神の働きによって、キリストの体と血になります。聖神の恩寵は、主教の按手（あんしゅ）を通じて人々を聖務者 **священнослужитель** にします。そして洗礼を受けるそれぞれの人は、傳膏（ふこう）機密 [堅信礼]⁵⁸において「聖神の恩賜の印（しるし）」を受けます。

聖神の力は、昔から最近にいたるまで、多くの聖人の生活の中に現れていました。ロシアの大いなる聖人、サロフの克肖者聖セラフィム（18-19 世紀）は、自身のところに話に来た商人モトフィロフに、キリスト教徒の生活の目的は聖神の獲得だと説明しました。モトフィロフはその意味をたずねはじめたとき、目の前でセラフィムがキリストと同じように変容するのを見たのです。セラフィムの顔が太陽よりも明るく輝き、彼から温かさと芳香とが流れ出したのです。セラフィムは、驚嘆した来訪者との会話を「神においては彼とその

Добавлено примечание ([小野 成信
文 PDF,c.81 「Деян. 19:6」は間違いでは？

Добавлено примечание ([小野 成信
文 PDF,c.81 「19 世紀」 —1759-1833 は 18-19 世紀では？

⁵⁷ キリスト教教会の最重要の奉神礼である聖体礼儀ではパンとぶどう酒がキリストの体と血となりますが、これについては **——** を参照。

⁵⁸ 洗礼機密と傳膏（ふこう）機密については **——** を参照。

ひとり子への正しい信仰が賞されます。これに対してこそ聖神の恩寵が、天から豊かに与えられます」⁵⁹の言葉で終えています。

5. 至聖三者

昇天の直前にイエスは、「父と子と聖霊〔聖神〕の名によって（マタ 28:19）」人々に洗礼を授けるようにと弟子たちに命じました。ここで初めて、至聖三者の三位格全てが、一つの簡明なフレーズで言及されています。しかしこれよりもさらに前に、神・父、神・子、神・聖神は人々に現れていました。イエスがヨハネから洗礼を受けたときです。その時、神・父の声が聞こえ、神・聖神が鳩の形で、神・子に降ったのでした。

三位一体の神

三位一体の神についての教えは、神の啓示によるものです。この教えの基礎となったのは、特にヨハネによる福音書に多い、イエス・キリストによる自身の父と聖神についての言及です。使徒パウロの記述中にも、神の三位格について多数の記述があります。自身の書簡の一つを、パウロは「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊〔聖神〕の交わりが、あなたがた一同と共にあるように（二コリ 13:13）」の言葉で終えています。

⁵⁹ サロフの克肖者セラフィムとモトフィロフの対話。

「至聖三者」の用語は、新約聖書には登場しませんが、二世紀以前にはキリスト教神学に登場し、しっかりとキリスト教教会の神学語彙にくみこまれたのでした。この用語で、三位格において讃美される一つの神が言い表されます。

至聖三者への信仰は、一つの神への信仰である一神論をおとしめるものでは全くありません。至聖三者は**三つの神ではなく、一つの神**なのです。それでいて至聖三者のそれぞれの位格は、神の一部ではなく、完全な[欠けるところがない]神です。このように、父は神であり、子は神であり、聖神もまた神です。しかし三者全てをあわせて、一つの神なのです。

至聖三者において神性の源は、父です。神・父から神・子が生まれ、神・聖神が出ます⁶⁰。神・子の**誕生**も神・聖神の**発出**も、時間の中で起こる出来事ではありません。これは、神・子と神・聖神の、永遠[時間の枠の外]から固有の特質、性質なのです。教会は、神が常に三位格だったが、この真理は旧約聖書では明らかにされていなかったのだと信じています。主イエス・キリストが、この真理を人々に明らかにしたのです。

至聖三者の三位格は、常に、愛によって結ばれていて、考えと行動において一致しています。三者の間には、衝突も矛盾も不和もありませんし、ありえま

⁶⁰ イエス・キリストは、聖神が「父のもとから出る(ヨハ15:26)」と教えました。この教えにしたがって、信経では聖神が「父より出で」と告白されています。西方カトリック圏ではキリスト降誕後第二千年紀に、聖神が「父と子から」出るという教えが広がりました。この「フィリオクエ(ラテン語 *Filioque*、『また子より』から)」として知られ、カトリック教会で教理となった教えは、東方正教圏では聖書の証(あかし)に矛盾するものとして否定されました。

せん。イエスは、神・父と自身との相互関係について「はっきり言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである（ヨハ 5：19-20）」と述べました。またイエスは、聖神については「その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである（ヨハ 16：14-15）」と話しています。

神の子は、全人類にとって神・父のもとの「弁護者（一ヨハ 2：1）」です。しかし聖神もまた「言葉に表せないうめきをもって執り成（ロマ 8：26）」し、「神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成（ロマ 8：27）」します。

神・父、神・子、神・聖神への祈り

信者たちは祈りの中で、神・父に対して、神・子に対して、神・聖神に対して、また、同時に至聖三者の三位格に対して話しかけます。

神・父に対する祈りの一例は「天に在（いま）す我等の父〔主経。主の祈り〕」⁶¹です。他のこのような例は、聖体礼儀中に司祭が読む祈りです。これらは主として、神・父に向けられています。

⁶¹ 参照。

非常に多くの祈りがイエス・キリストに向けられています。「主イエス・ハリストス [イエス・キリスト] 神の子よ、我罪人（ざいにん）を憐れみ給え」という、イエスの祈りと呼ばれるものはその一例です。奉神礼で読まれる多くの祈りが、イエス・キリストに向けられています。

聖神への呼びかけの一例は、多くのキリスト教徒があらゆることを始める前に読む祈りです。

天の王慰（なぐさ）むる者や、真実の神（しん）、在（あ）らざる所なき者、満（み）たざる所なき者や、萬善（ばんぜん）の宝蔵（ほうぞう）なる者、生命（せいめい）を賜うの主や、来（きたり）て我等の中（うち）に居り、我等を諸（もろもろ）の穢（けがれ）より潔（いさぎよ）くせよ、至善者（しぜんしゃ）や、我等の霊（たましい）を救い給え

至聖三者の三位格に向けられた祈りの例は、聖体礼儀の中で用いられ、祈祷集の多くに入っている古い歌「聖なる神、聖なる勇毅（ゆうき）、聖なる常生（じょうせい）の者や、我等を憐（あわれ）めよ」です。三つの呼びかけのそれぞれが、一つ目は神・父、二つ目は神・子、三つめは神・聖神と、至聖三者のそれぞれの位格に向けられていると考えられています。しかし祈り全体は、一つで不可分の至聖三者に向けられています。

さらにもう一つの同様の祈りは次のものです。

至聖三者や、我等を憐（あわれ）めよ、主や、我等の罪を潔（いさぎよ）くせよ、主宰（しゅさい）や、我等のあやまちを赦せ、聖なる者や、臨（のぞみ）て我等の病（やまい）を癒し給え、ことごとく爾（なんじ）の名による。

この祈りの中で、「主」は神・父に、「主宰」は神・子に、「聖なる者」は神・聖神に向けられています。

6. 教会

「又信ず、一（ひとつ）の聖なる公なる使徒の教会を」と信経にあります。

教会とは

教会は、キリストの教えを護るものであり、その救いの業（わざ）を続けるものです。教会は**キリストの生ける臨在の場所**であり、彼とその信者との対面の場です。キリストは今日の教会を通じて、弟子たちに自らを現したのと同じ十分さで、信者たちに自らを現しています。教会におけるキリストの臨在は消えず、彼の恩寵は乏しくならず、彼の救いの力はなくならず減っていないのです。教会を信じることは、キリスト教の基本的教義の一つです。「教会なしにはキリスト教はない」⁶²とすら言われます。キリスト教とは、ただキリストという人物とその教えを理性的に認めることとは違うのです。キリスト教とは

⁶² これは、1929年に迫害され殺害された神品致命者イラリオン（トロイツキー）の表現です。

何よりもまず、その弟子たちの共同体の一員たることです。そしてこの共同体というのが、キリストによって創られた教会なのです。

キリスト教とは道徳的教えに、または神学に、または奉神礼に還元できるものではありません。キリスト教はまた、上記のもの全ての総和でもありません。キリスト教は、神人キリストという人物の、彼の教会を通じた啓示なのです。

教会の創立

マタイによる福音書では、ある時イエスが弟子たちに「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」と聞いたことが述べられています。弟子たちは『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます」と答えました。イエスは「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」と問い、ペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えます。その時キリストはペトロに「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない」と言ったのでした（マタ 16 : 13-18）。

このエピソードは、東方キリスト教会と西方キリスト教会とで互いに異なる解釈をされました。西方では、ローマの主教に自身の首位性を渡した使徒共同体の頭（かしら）、地上におけるキリストの代理者としてのペトロの役割が

強調されました。東方では「教会は、ペトロの言葉がその表明となった、イエス・キリストの神性への信仰に基づいている」という異なった解釈が普及しました。使徒ペトル自身は、書簡の中で、教会の礎石は彼ではなくキリストだと主張しています（一ペト 2 : 4）。

教会はなぜ必要か

教会は、何よりもまず、人々に天の父を明らかにし、キリストと一体にし、聖神の恩寵を与えることによって、**人々を神へと導く**ために必要です。教会は、わたしたちに福音書の深さと美しさを明らかにし、救世主の教えを実現するのを助けています。教会は、洗礼機密、聖体機密、その他の機密を通じてわたしたちを天の国に触れさせ、これをわたしたちの生活の現実とします。教会のおかげでこの国は、からし種と同じように、わたしたちの中で成長して大きな木となり（マタ 13 : 31-32）、また粉の中のパン種（マタ 13 : 33）と同じように、わたしたちの人生を中身と意味とによって満たすのです。教会が「地上における天」と呼ばれるのは偶然ではないのです。

教会は、神の恩寵と力とによって**人々をより良く変える**ために必要です。多くの人々が、霊的にすさみきって、絶望して、完全な人生を送ることのできない状態で教会へとやってきます。彼らは、奉神礼への参加、祈り、聖体を受けること、その他の機密のおかげで段々と変わっていきます。教会は、人々が生ける神に触れるのを、彼らを神から引き離す深い溝を乗り越えるのを助けま

す。教会は、人々を善行と創造的偉業へとふるいたたせることのできる炎を、彼らの心に灯すのです。

教会は、**世界を変える**ために必要です。しかしどんな人も、まず自分自身を変えなければ、世界を変えることはできません。わたしたちは、非常に頻繁に周囲の人を変えたいと願います。夫婦のそれぞれが自身を磨くのではなく、たがいを変えようとするがために、家族仲がうまくいかなくなります。1人が他の人にどうしたら良くなれるかというやりかたを提案しますが、双方が折り合いをつけることができず、結果として家族が壊れてしまうのです。

教会は、人々が自分を、他者を変容させることを使命とする個人ではなく、一つの共同体のメンバーであると感じるのを助けます。この共同体では、それぞれの人が聖神の援助のもとに自身を磨き、皆が一緒になってキリストの像と肖にしたがって変わるのを互いに助けあうのです。人は教会に入ることによって雄大な流れに加わり、その流れる水はその人を目的、つまり霊的完全性へと運び始めるのです。それでいてその人は、ただ独立性と自由を失わないだけでなく、むしろ反対に、自らが神から受け取った霊的、創造的潜在能力を明らかにするための新しい力を得るのです。

教会はキリストの体

使徒パウロは教会を**キリストの体**（コロ 1：24）、その中でそれぞれのメンバーが自身の役割、使命、務め（1 コリ 12：28-30）を持っている生きた体だ

と定義しています。パウロの言葉によれば「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは「……」皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。「……」あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です（一コリ 12：12-14、27）。」

教会の体の頭はキリストです（エフェ 4：15）。彼は自身の中で生きた人々、信仰の内に永眠した人々を一つにしているのです。彼らは、イエスの中で喜びと幸福との主たる源を見つけるのです。

教会の二つの本性

教会は地上に創られましたが、天上の起源を有しています。教会を創立したイエス・キリストが神性と人性という二つの本性を持っているのと同様、教会もまた、地上のもの、そして天上のものという**二つの次元**を持っています。

地上の教会は「神によって創立された、正教の信仰、神の法、神位〔教会の聖職者の位〕、そして機密によって結ばれた人々の社会」⁶³です。天上の教会には、霊的世界の住人、つまり天使たち、聖人たち、そして真の信仰の内に永眠した全ての人々が含まれています。地上の教会は「戦う教会（つまりこの世の悪との戦いにあるということ）」、また「移ろいゆく教会（道中にあるというこ

⁶³ フィラレート『正教訓蒙』116頁参照。

と)」と呼ばれることがあり、天上の教会は「勝利の教会（既に目的を達し、悪に対する勝利をおさめたということ）」と呼ばれることがあります。

教会が一つであること

教会は、ただ一つの神の像にしたがって創られたので、ただ一つです。教会は全世界で一つです。全世界の教会が一つであることは、そのメンバーの信仰が一つであること、そして、彼ら全てが参加する聖体機密⁶⁴が一つであることによって確保されています。

使徒パウロは、教会がキリストと一つであることを、妻が夫と一つであることにたとえています。彼は、比喩的に、教会を唯一の夫、キリストと婚約した純潔な処女として描写しています（二コリ 11：2）。キリストは教会の頭であり体の救い主です。彼は「教会を愛し、教会のために御自分をお与えにな」りましたが「そうなさったのは、言葉を伴う水の洗い⁶⁵によって、教会を清めて聖なるものとし、しみやしわやそのたぐいのものは何一つない、聖なる、汚れない、栄光に輝く教会を御自分の前に立たせるためでした。」教会は妻が夫に対するのと同じくキリストに仕え、キリストは、わたしたちが「キリストの体の一部なので」教会を養い、いたわります（エフェ 5：22-30）。

教会が聖であること

⁶⁴ 聖体機密については、参照。

⁶⁵ つまり洗礼機密のことです。

教会は、それを創った、自身の本性において聖なるものである神の像にしたがって、聖なるものです。教会の聖性は、そのメンバーの罪によって失墜するものではありません。教会の聖性は、決してその地上のメンバーの功績や善行の総和に基づいているのではなく、教会がその体であるところのイエス・キリストの聖性に基づいているのです。

その本性において聖なるものである教会は、それ自体によってそのメンバー全員を聖にします。この成聖は、痛悔機密や聖体機密といった教会の機密を通じてなされます。痛悔機密で人は自身の罪を神の前で悔い改めて神からの赦しを得ますが、これは（すぐにではないにせよ）罪から脱するのを助けるのです。聖体機密では人は、パンとぶどう酒の形でキリスト自身を自分の中に受けるのです。

イエス・キリストは弟子たちにこう語りました。「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして灯の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである（マタ 5 : 13-16）。」

キリスト教徒は聖性と完全性を求められています。イエスは「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい(マタ 5:48)」と述べています。この呼びかけは、どんな人でも絶対的完全性を有していないことから、実現不可能なものに思えるかもしれません。教会がなかったとしたら、実際に実現不可能だったことでしょう。聖なるものであり完全なものである教会は、そのメンバーを成聖し、より完全なものとするのです。そして教会の頭であるキリストは、それを願う教会のメンバーそれぞれを、聖性と完全性へと導いています。彼はただ道を示しただけではなく、彼の信奉者たちをこの道で導いているのです。

教会が公（おおやけ）であること（ソボールノスチ）

教会は公（おおやけ）なる（または、ギリシャ語からの文字通り訳せば「普遍的な」「全地の」⁶⁶）ものです。なぜなら教会は全世界に広がっており、人種や社会的地位にかかわらずあらゆる人々に開かれているからです。エルサレムの聖キュリロス（四世紀）はこう述べています。「教会は普遍的な〔公（おおやけ）な〕ものと呼ばれます。なぜなら地の果てから地の果てまで全世界に

⁶⁶ 「公（おおやけ）な（普遍的な）」と訳されるギリシャ語の形容詞「カトリケー（καθολική）」は、1054年に東方教会と分離した西方教会によって自称として用いられるようになった「カトリック」という形容詞のもととなりました。東方教会でも自称として「カトリック」を用いられます。1054年の教会分離の後、東方教会の主要な自称は「正教（ορθόδοξη）」となりました。一つの名称の中で両方の形容詞が用いられることもよくありました。たとえば、ロシア革命（1917年）以前のロシア正教会の公式名称は「ロシア正教ギリシャ・カトリック東方教会（Российская Православная Греко-Кафолическая Восточная Церковь）」でした。

わたるものであって、人が知るべき教え、目に見えるものと見えないもの、天上のものと地上のものについての教えをどこでも完全に授けるからです。また、上役も部下も、学者も不学者も、全人類を真の信仰へと導くからです。また、どこでも霊的、身体的に行われるあらゆる類の罪を治療するからです。行い、言葉、あらゆる霊的賜物（たまもの）に現れるあらゆる類の完全性を有しているからです。」⁶⁷

全世界の教会は地方教会⁶⁸からなり、地方教会は主教が統治する教区からなります。教区は、司祭が統治する〔個別の〕教会共同体からなります。

普遍性〔公（おおやけ）であること（ソボールノスチ）〕は、教会の最も重要な性質です⁶⁹。教会は、全世界、地方、教区、そして〔個別の〕教会共同体という、その存在の全てのレベルにおいて普遍的で、教会の普遍性は、全世界〔教会〕、そして地方〔教会〕のレベルでは、全主教、全聖職者、全信徒⁷⁰の信仰が一つであることによって確保されています。地方〔教会〕のレベルでは教

⁶⁷ エルサレムのキュリロス『カテーケシス（教話）』第18講話23節。[『イエルサリムの大主教聖キリル全書』正教会編集局、1903年、442頁参照。]

⁶⁸ 訳注：主として、各国にある独立教会を指す。これに自治教会を含む場合もある。

⁶⁹ Соборность（ソボールノスチ）という言葉は、19世紀のスラヴ派によって神学的に用いられるようになりました。この言葉は1) 教会の全地的性格、その普遍性、全世界に普及していること、2) 教会がその存在する全てのレベルにおいて完全な教会性を有していること、3) 教会が主教たちの公会によって統治されていることを指します。

⁷⁰ 信徒とは、教会のメンバーであって、聖職を持たず、または修道誓願をしていない者のことを呼びます。Под клиром принято понимать всех представителей духовенства, кроме епископов (в современном словоупотреблении понятие «клир» может включать в себя также епископов). Мирянами называют членов Церкви, не имеющих священного сана или монашеского пострига. PDF с. 94

会は主教たちの公会（主教会議）によって統治され、公会において主教たちのそれぞれは、自分という個人ではなく、聖職者、神の民からなる自身の「教区の」教会共同体を代表しているのです。

教会のヒエラルキー

教会のメンバーであるとは、つまり、主教や司祭という教会のヒエラルキーと一つであるということを意味します。神は、この主教や司祭たちに自身の羊たちを牧することを任せたのです。

教会のヒエラルキーは、神の財産の上に、それを支配するために置かれた権力であると捉えてはなりません。これについて使徒ペトロはこう述べています。「わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい（一ペト 5：1-3）。」

信徒と同様、主教や神父もまた、キリストの体のメンバーです。しかし主教や神父は、特別の務めを持っています。彼らは、聖体機密の執行の際に「信徒の」群衆を代表して神の面前に立ち、割り当てられた領域において教会を統治し、自身に任された人々の牧会を行います。そのために使徒パウロは信徒に対

して、教会のヒエラルキーに服従するように呼びかけています。「指導者たちの言うことを聞き入れ、服従しなさい。この人たちは、神に申し述べる者として、あなたがたの魂のために心を配っています（ヘブ 13：17）。」⁷¹

教会のヒエラルキーは、**主教、司祭、輔祭**という三つの職位からなります。主教は直接的な使徒の継承者ですが、司祭や輔祭はそうではありません。司祭は、その務めを行う権利を主教から与えられ、主教の許可の下で主教の名において聖務や機密を行います。輔祭は、主教や司祭が聖務を行うときにこれを助けますが、独立して聖務を行うことはできません。

教会の使徒性

リヨンの聖エイレナイオス（2 世紀）はこう書いています。「教会から容易に受けることのできる真理を以後、他の人々のところに求めるべきではない。使徒たちは人が誰でもその意思さえあればその〔教会〕から生命の飲み物を受けることができるよう、ちょうど豊かな倉に〔集める〕ようにして真理に関することをすべてその〔教会〕に集めたからである。」⁷²

⁷¹ 聖職者は教会の中で権威を有していますが、不可謬ではありません。人間である聖職者の誰もが、誤る可能性があるのです。このような誤りを正すために、教会には特定の仕組みがあります。たとえば、主教は、司祭に対して誤りを指摘し、もし司祭が悔い改めない場合には彼に処分を与える場合があります。誤りを犯した聖職者の案件を審議するためには教会裁判所があります。

⁷² エイレナイオス（小林稔訳）『キリスト教教父著作集 第3巻I 異端反駁 III』（教文館）1999 年、12 頁。

教会は使徒的なものです。なぜなら教会は、主イエス・キリストがその弟子たちに命じた宣教と洗礼の務め（マタ 28：19）を担っているからです。

全世界教会の創立者は、主イエス・キリスト自身ですが、初めの地方教会の創立者は使徒やその後継者でした。教会が生まれた最初期に使徒たちは、宣教の結果現れてきた地方教会の牧会のために、司祭（プレスヴィテロス）⁷³や主教を叙聖（じょせい）するようになりました。このように教会では、使徒継承が始められました。

ヒエラルキーの使徒継承は、教会に関する正教の教えの最重要概念です。使徒へとさかのぼる絶え間ない、ヒエラルキーの継承性を有する教会だけが、真のキリスト教会なのです。もしこのような継承性がない、またはいつかとだえている場合には、教会共同体は真のものだと認められず、そのヒエラルキーは「教会法上」合法だと認められず、機密も真の「有効な」ものだとは認められません。

しかしヒエラルキーの使徒継承性は、自動的、あるいは魔術的なものではありません。叙聖の継承性は、なにか教会と別個の、自立した線というわけではありません。主教や司祭は、教会全体の賛同の下で使徒たちによって叙聖されたのであり、この賛同の重要さは、合法的な叙聖があったという事実の重要さに劣るものではありませんでした。使徒継承の線は、教会の中でのみ真のものた

⁷³ ギリシャ語「πρεσβύτερος」は「年長者」「長老」を意味します。初代教会では司祭たちはまさにこう呼ばれていました。

りえるのです。教会の外ではこの線は、真であることも有意義であることもできないのです。

教会が使徒的であるのはまた、使徒の教えを護り、それをこの世で広めているからでもあります。この教えは救世主キリスト自身の言葉に基づいて使徒たちが言い表したもので、これを変える権利は誰にもありません。キリスト教神学は発達し、より良くなりえますが、その基礎となっているのは常に、キリストの、使徒たちによって護り伝えられた教えなのです。

教会は思いやりある母

教会はキリスト教徒にとっての**霊的な母**です。教会の祈りと思いやりとが、キリスト教徒の人生の間ずっと彼とともにあります。キリスト教の家族に子どもが生まれると、彼は洗礼機密と傳膏機密とを受けるために聖堂へと連れてこられます。幼児の時すでに、その子は聖体機密に参加することができますし、分別のある年頃になれば痛悔機密に参加できます。教会は、結婚など人生のあらゆる重要な出来事を祝福し、成聖します。誰かが病気になった時には、聖傳機密を行うためにその人のところに司祭たちがやってきて、教会共同体はその人のために聖体礼儀の中で祈ります。誰かが死の床に伏していれば、司祭が、その人に最後の聖体機密を与え、彼が地上の生活から平和に旅立つようにと祈るためにやってきます。誰かが亡くなれば、教会はその人を最後の道へ

と送り出し、彼についてその後も忘れず、神が彼に幸福と永遠の生命を与えるようにと祈り続けます。

思いやりのある母として、教会はキリスト教徒の地上の生活を導き、彼に天の国の門を開くのです。「教会を母としない人にとって、神は父ではない」⁷⁴という考え方が遠い昔にすでに形成されたのは偶然ではありません。もちろん神は、教会の外でも、教会のほかでも人々について思いやっています。しかし神は、教会の中では特別な形で人々と関係を持ち、教会の中でだけ神と真に結びつくことができるのです。これは教会の機密を通じてこそ行われるものです。

信仰と教会。正教

信仰と教会とは密接に関わり合っています。正教の奉神礼では「これ使徒の信、これ師父〔教父〕の信、これ正教の信なり」⁷⁵と述べられます。これら三つの形容詞は、真のキリスト教信仰の最重要な質、あるいは特徴を指していますが、同時に教会の質をも指しています。

⁷⁴ この文言は、三世紀の神品致命者、カルタゴの聖キュプリアヌスによる『カトリック教会の一致について』にある「教会を母としてもたない者は、神を父としてもつことができない〔和訳は、キュプリアヌス（吉田聖訳）「カトリック教会の一致について」上智大学中世思想研究所（編訳・監修）『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、1999 年、190 頁による。〕」を言い換えたものです。〔ここでカトリックとは「普遍」を指すのであり、西方のローマ・カトリック教会を指したものではない。〕

⁷⁵ 訳注：正教勝利の主日に行われる正教勝利の式より。この奉神礼の和訳はないので、正教奉神礼和訳の文体を参考に、教会スラブ語テキストから訳した。

特に「**正教**」の言葉は、信仰についても、教会についても用いられます。ギリシャ語ではこの言葉「オルトドクシア（Ορθοδοξία）」は、「正しい」を意味する形容詞「オルトス（ορθός）」と、「意見」または「讃美」という意味を持つ名詞「ドクサ（δόξα）」からなります。ギリシャ語の言葉「オルトドクシア」の文字通りの訳は、正しい意見、または（神についての）正しい教えとなるでしょう。しかしスラブ語翻訳者はこの言葉を伝えるにあたって、もう一方の選択肢、正しい（神の）讃美「プラヴォスラヴィエ（Православие）」をとりました。これによって、スラブの伝統における信仰理解の特別な、主に奉神礼的な性格が強調されたのです。正教のキリスト教徒であるとはつまり、ただ神についての正しい意見を持つというだけではなく、彼を正しく讃美することができるということなのです。

正教会は、イエス・キリストが創立した、信経の中で述べられている、一（ひと）の聖なる公（おおやけ）なる使徒の教会です。正教会は、キリスト、その使徒と教父⁷⁶の教えを純粋なままそこなうことなく⁷⁷保ったのです。

⁷⁶ 教父〔聖師父〕と呼ばれるのは、教会の教義を形成した神学者たちです。教義の形成については、初代教会の時代（一-三世紀）と**全地公会**の時代（四-八世紀）が最も実のあるものでした。初代教会の時代に教義の基礎がおかれ、七回の全地公会でこの教義は、立ち起こる異端に対抗して形成されたのでした。

⁷⁷ 正教との一致から脱落した共同体について、ロシア正教会はこう述べます。「正教会は、教父の口を通して、キリストの教会の外では救いが得られないと主張している。しかし、正教との一致から脱落した共同体は、神の恩寵を完全に欠いているとは決して見なされてこなかった。教会の交わりの断絶は、必然的に信徒の生活を傷つけるが、分裂した共同体から神の恩寵が完全に消滅するとは限らない。まさにそのため、他教派の共同体から正教会に来る人を受け入れる際に、〔再度の〕洗礼機密執行以外の方法もとるという習慣がある。一致の崩壊にもかかわらず、ある種の不完全な交わりが残っており、それに

7. 洗礼

信経には「我認む、一つの洗礼以（もつ）て罪の赦しを得るを」とあります。

7.1. 洗礼は教会の機密

洗礼についてまず知っておかなければならないのは、これがただの儀式ではないということです。**洗礼とは教会の機密**です。教会の言葉で機密とは、神が自身の救いの恩寵を人に与えるという形で、人に直接働きかける聖務のことを呼びます。

洗礼は、教会の七つの機密の一つです。洗礼機密の他に、傳膏機密 [堅信]、聖体機密、痛悔機密 [ゆるし]、神品機密 [叙階]、婚配機密 [結婚]、聖傳機密 [病者の塗油] があります⁷⁸。しかし、キリスト教徒の生命はまさに洗礼から始まるのです。洗礼こそが教会への扉を開き、他の全ての機密を受けることを可能にし、人を教会のメンバーとするのです。

洗礼とは**靈的な誕生**です。イエス自身がこれに関して、話に来たニコデモに話しています。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」ニコデモは救世主の言葉が理解できず「年をとった者が、どうして生まれることができましよう。もう一度母親の胎内に入って生

よって教会の中の一致、普遍的完全性と一体性への復帰の可能性が保たれるのだ。』『非正教会教派に対するロシア正教会の態度の基本原則』1.15。

⁷⁸ 傳膏機密については本章で、その他の機密については第三部「教会と奉神礼」八・九章で述べます。

まれることができるでしょうか」と聞きました。イエスは「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」と答えたのでした（ヨハ 3 : 3-6）。

洗礼は、人を神と結びつけ、人に悪魔にさからう力、キリスト教徒としての生活を送る力を与えます。洗礼は、病気を免れさせるわけではありませんが、キリスト教用語で罪と呼ばれ、人の霊的、肉体的組成全体に悪い影響を与える霊的病（やまい）を克服するのを助けるのです。多数の病（やまい）が、在的な生活様式の直接的、間接的な結果です。教会は、人が罪から自由になるのを助け、それによって人を霊的、肉体的に強くするのです。

教会は、洗礼機密において人の罪全てが赦されると信仰しています。洗礼の後にその人が犯した罪については、痛悔機密（悔い改め）によって浄められます。

新約聖書中の洗礼

歴史的にみれば、ヨハネの洗礼が、キリスト教の洗礼の先駆けとなりました（マタ 3 : 1-12、マコ 1 : 4-8、ルカ 3 : 3-17）。その内容は「罪の赦しを得させるため」の「悔い改めの洗礼」でした（ルカ 3 : 3）。

イエスは、ヨハネから洗礼を受けた後「弟子たちとユダヤ地方に行って、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられ（ヨハ 3 : 22）」ました。すぐに彼は、

Добавлено примечание ([小野 成信
DF, с. 105. Многие болезни являются прямым или
косвенным следствием греховного образа жизни.

人々に洗礼を授ける権威を弟子たちに与えました（ヨハ4:2）。天に昇るときイエスは、すべての民に教えを伝え彼らに洗礼を授けるようにと弟子たちに命じました（マタ28:19）。弟子たちは、イエスの直接の命令によって宣教し、洗礼を通じて、信じた人々を教会に受け入れたのでした。洗礼は、教会へと入ったことを示す行為、教会生活への完全な参加への道を開く行為となったのです。

洗礼への準備

洗礼の前にはいつでも、キリスト教信仰の真理を学ぶ、**洗礼への準備**〔啓蒙〕が行われてきました。この準備期間は、数時間から数日間、数週間、数か月間、数年間というように、短い場合も長い場合もありました。

使徒言行録には、エチオピア女王の高官である宦官について述べられています。彼は馬車に乗って、イザヤの預言書の、来るべきキリストについて書かれている箇所（イザ53:7-8）を読んでいた。使徒フィリポは彼へと近寄り、「読んでいることがお分かりになりますか」と聞きます。宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と答え、一緒に座るようにフィリポに頼みました。するとフィリポは「口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせ」ました。彼らが水のある所に来ると、宦官は「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか」と聞き、フィリポが「真心から信じておられるなら、差し支え

ありません」と応じます。宦官は「イエス・キリストは神の子であると信じます」と言いました。この言葉は、洗礼を受けるのに十分な短い信仰の告白でした。使徒は宦官に洗礼を授け、その後で聖神が彼に降った⁷⁹のでした（使 8：27-39）。

現代でも洗礼の前には、洗礼への準備が行われます。成人は、洗礼を受ける際高い意識をもってアプローチするべきであり、意味を理解せずにちょっと参加できるただの儀式だと考えないということが非常に重要です。まさにそのために、洗礼への準備が不可欠なのです。

洗礼が幼児に対して行われる場合、幼児に対して意識的な信仰は要求されません。しかし幼児の親や、受託者とも呼ばれる代父母に対しては、このような意識的な信仰が要求されます。親には子どもを信仰の内に育てる準備がなければなりませんし、代父母にはこのことにおいて親たちを助ける準備がなければなりません。

幼児洗礼と成人洗礼

幼児に洗礼を授けるのは、使徒の時代から教会にある古来の習慣です。「[このような] 洗礼は幼児の人格を無視したものだ。幼児が成長してから、自分で何を信じるかを決めるだろう」というような意見を耳にすることもあります

⁷⁹ 訳注：この節はギリシャ語、新共同訳では「彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った」となっているが、正教訳ではロシア語シノド訳にならい「彼等が水より上りし時、聖神⁸⁰（せいしん）は寺人〔新共同訳：宦官〕に降り、主の使ひフィリップを挙げて去り」となっている。

が、これは間違っています。母は、幼児が頼む前からもう授乳します。子どもが学校に行くのも、子どもがそうしたいからではなく「そうしないといけない」からです。人間は生まれたときから、物質的な糧（かて）だけではなく、霊的な糧（かて）も必要としているのです。神の恩寵は、子どもの側がそれを理解できるようになる前から、子どもに働きかけるようになります。子どもから恩寵あふれる神の臨在を奪うべきではありません。

「幼児期に洗礼を受けた気がするが確信できない」というように、ある成人が、自身が洗礼を受けたのかどうか分からないという場合があります。このような場合には司祭のところに行って、この事実を伝えなければいけません。このようなときには洗礼が授けられますが、概して洗礼の祈祷文に「もし洗礼を受けていなければ」という言葉が加えられます。

ある人が幼児洗礼を受けたものの、長年にわたって信仰を持たずに生きてきた後で教会に戻ってくるという場合には、再度の洗礼は行われません。信経では「一（ひとつ）の洗礼」を認めると述べられています。これによって、洗礼機密がただ一つであること、繰り返されないものであることが強調されているのです。洗礼を受けた人が教会から離れたとしても、この機密の恩寵は消え去らず、その人が教会に戻ってきたときに、また働き始めるのです。

洗礼は、洗い落とすことのできない**神の印**です。それと同時に、教会に通わず、痛悔せず、聖体機密を受けず、非キリスト教的な生活を送り、できるかぎ

り福音にしたがって生きようとしなない人においては、洗礼はその働きを事実上失ってしまうということを覚えておかねばなりません。

昔の教会では洗礼機密は、概して大きな教会祭日、特に復活祭に行われるものであり、復活祭前の時期は洗礼への準備の期間でした。この古来の習慣から、大斎の奉神礼には光照に備うる者〔洗礼への準備をしている人〕のための特別な祈りが残っていて、聖大土曜日〔復活祭前日の土曜日〕の聖体礼儀には司祭たちが暗い色から明るい色へと祭服を着替えるならわしが残っているのです。

現代では洗礼は、司祭と話し合って同意を得られれば、どんな日でも行うことができます。洗礼を受けるため、または子どもに洗礼を授けるためには、聖堂に行って直接司祭自身に話すか、あるいはロウソク売り場で教会の機密の受付をしている人に話す必要があります⁸⁰。彼らが、何を持ってこないといけないか説明してくれます。胸掛け十字架や白い洗礼着は、事前に準備しておくものです。

洗礼を受ける人（幼児洗礼の場合には、親か代父母の内の一人）は、何を讀んでいるのかを理解しながら朗読できるように、信經を知っていなければなりません。

代父母

⁸⁰ 訳注：ロシア教会の現状であり、日本教会では司祭に直接話すのが普通である。

代父母（受託者）になれるのは、教会によく通じた人だけです。これは、定期的に痛悔しキリストの聖機密⁸¹を受け、福音と教会の教えにしたがって生きる努力をしている正教信者のことです。他の宗教を信じている人、あるいは他のキリスト教教派に所属している人、ましてや信仰を持たない人は、代父母になることはできません。代父母として「実践していない」正教信者、つまり形式的にしか正教会に属していない人を選ぶべきではありません。

代父母両方がいないといけないというわけでは全くなく、一人いれば十分です⁸²（この場合には、代父または代母は、洗礼を受ける人と同じ性別でなければなりません）。

洗礼は大きな道の始まり

周囲の人々が洗礼を受けているから、あるいは親が言うから、友達がすすめるからという理由だけで洗礼を受けてはいけません。子どもが病気にかからないように、よく勉強するように、親の言うことを聞くようにという理由だけで洗礼を受けさせてはいけません。洗礼は、その人が、大人であるにせよ幼児であるにせよ、教会に入ということを示しています。洗礼を受けると人は、そこから発生する権利も義務も持った教会の一員となるのです。

⁸¹ 「キリストの聖機密（または単に「聖機密」）」とは、聖体機密でパンとぶどう酒から変化した、キリストの体と血のことです。

⁸² 訳注：ギリシャ教会、ロシア教会の現状であり、日本教会では通常、代父母両方を立てることを求められる。洗礼を授ける司祭に直接質問して指示を仰ぐべきである。

洗礼とは人生の特別な出来事の一つであり、神の光の下に生まれ出ることも劣らないほど重要です。洗礼の日には喜ばしく記念すべきものです。この日については「今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう（詩 118 [117 聖詠] 24)」という聖詠の言葉で語れます。

しかし、洗礼を受けたことによって、あるいは子どもに洗礼を受けさせたことによってそれでお終いにしていいいのだと思ってしまっはいけません。反対に、この瞬間からキリスト教徒としての人生の道は始まるところなのです。この道は全人生ずっと続く道です。むしろこの道は死でも終わらず、永遠にまで続くのです。

7.2. 洗礼機密と傅膏機密執行の手順

初代教会の伝統にのっとり、現代の洗礼機密の式は、啓蒙と洗礼それ自体という二つの部分からなります。啓蒙とはここでは、洗礼に先立ついくつかの祈禱文と聖務とを指します⁸³。啓蒙式は、洗礼機密と別個で執行されることも可能ですが、実地ではおおむね洗礼機密の直前に行われます。

啓蒙式の始め

啓蒙式は、洗礼を受ける人が信仰、希望、そして愛に満たされるようにという祈りから始まります。この祈りを読みながら、司祭は洗礼を受ける人に手を

⁸³ この場合啓蒙は、初代教会で「啓蒙」の言葉で説明されたもの、つまり洗礼への準備過程の結びの部分のことです。

置きます。その後は、神ではなく悪魔に向けられたいくつかの祈祷文が続きます。司祭はこの祈祷文の中で悪魔に対して、洗礼を受ける人を離れ、二度とこの人に触れないようにと要求します。これらの祈祷文の後には、神に向けられた二つの祈りが続きます。その中で司祭は、洗礼を受ける人から悪霊を放逐し、あらゆる悪魔の働きを遠ざけ、悪魔をこの人の足元に倒し、この人に悪魔や他の悪霊に対する勝利を与え、洗礼を受ける人の内的な目を開き、この人を福音の光で照らし、あらゆる悪魔の働きからこの人を守る守護天使を与えるようにと神に願います。

その後で司祭は、神に向けた「彼の心に隠れ潜（ひそ）む凡（およそ）の凶悪なる不浄の気を彼より逐（お）い出（い）だせ」の言葉とともに、洗礼を受ける人に十字型に息を吹きかけます。キリストの教えによれば心は人の中の善だけではなく悪の源でもあり（マコ 7：21-22）、そのため洗礼の前に心は神の恩寵によって浄められていなければならないからです。

悪魔の拒絶

続いて**悪魔を拒絶する**式が行われます。司祭は、洗礼を受ける人を西に向かせ、彼に『サタナ』及びそのことごとくの所行（しわざ）、そのことごとくの使（つかい）⁸⁴、そのことごとくの勤（つとめ）、そのことごとくの矜（ほこり）

⁸⁴ ここで意図されているのは罪に堕ちた天使、つまり悪霊のことです。〔訳注：教会スラブ語テキストでは **ангел**（アングェル）の言葉が用いられており、この言葉は、特に現代語では、通常神に仕える善良な天使を指すが、元々天使だったものの悪魔に従って神に背いた悪霊についても使われる言葉である。〕

をすつる（すてる）か」と質問します。この質問は三回繰り返され、それに対して洗礼を受ける人は「すつ（すてる）」と三回答えます。「『サタナ』をすてしや（すてたか）」の質問に対して「すてり（すてた）」と三回答えます。続いて司祭は、悪魔に息を吹きかけ唾を吐くようにと洗礼を受ける人に促します⁸⁵。一部の現代人は、古代から続くこの儀式に笑いをこらえきれないようですが、これは深い象徴的意義を有しています。悪魔を拒絶することで、人は悪魔に戦いを申し込み、この瞬間から神の側に立つのだということを明確に宣言しているのです。キリスト教徒の生活とは、甘いひまつぶしではなく、暗い悪の力との戦いも含んだ霊的な戦いなのです。使徒パウロはこう述べています。「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威⁸⁶、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです(エフェ6:11-12)。」

洗礼を受けてそれによって悪魔に戦いを申し込むのと同時に、人は、将来的に自分自身の中の悪を根絶し、悪魔によってもたらされる誘惑を克服するための恩寵の力を受けます。啓蒙式の祈りの中では、人に対する悪魔の権力は、錯覚上のもの、幻想で生まれたものであることが強調されます。恩寵の力で武装した人は、この誘惑を克服することができるのです。

⁸⁵ 訳注：通常は象徴的に唾を吐きかける仕種をするだけで、実際に唾を吐くわけではない。

⁸⁶ ここで「支配と権威」とは様々な悪魔の力を指します。

キリストとの結びつき

悪魔の拒絶がすんだ後、洗礼を受ける人は東側（つまり〔聖堂の〕至聖所）に向き直り、**キリストとの配合**（結びつき）を厳かに宣言します。司祭は彼に三度「ハリストスに配合せしや（したか）」と質問し、彼は毎回「配合せり（した）」と答えます。その後洗礼を受ける人が（または代父母が彼の代理として）信経を朗読します。その後司祭は洗礼を受ける人に、神、つまり神・父、神・子、神・聖神にひざまずくように呼びかけ、神がこの人を洗礼機密に招くようにという祈りを捧げます。これで啓蒙式は終わります。

水の成聖

その後で**洗礼機密**自体が始まりますが、その最初にあるのは水についての祈りです。水が聖神の力、働き、降臨によって成聖されるように、水に救いの恩寵とヨルダン川の祝福とが降るように、水に至聖三者の浄めの働きが降るように、水が目に見える、そして目に見えない敵の謀略を退ける力を持つようにという祈りが捧げられるのです。さらに教会共同体と洗礼を受ける人についての祈りが加えられます。この人が神の国にふさわしい者であるように、この人が光の子、永遠の幸福を継ぐ者となるように、キリストの死と復活に参加する者となるように、畏（おそ）るべき審判の日に洗礼の衣（ころも）と聖神の約束のしるしを汚れなく清浄なまま護るようにという祈りです。

水の成聖についての祈りの中で司祭は、なによりもまず、神の偉大さについて神を賛美し、神人キリストの地上への来臨をはじめとする、人類への神の善行に対して感謝します。イエスが洗礼者ヨハネから受けた洗礼が思い起こされます。司祭は、聖神の恩寵が水に降り、これを「救（すくい）の水、成聖の水、霊体の潔（きよめ）、縛（なわめ）の解（ほどき）、諸罪の赦（ゆるし）、霊の光照（てらし）、復生の浴盤、霊神の更新（あらたまり）、子とする⁸⁷の恩賜、不朽の衣、生命の泉」とするようにと願います。

洗礼

浸水の前には、成聖された油を塗る式が行われます。この油は、洗礼を受ける人の額、耳、胸、手、足に十字型につけられます。その後司祭は「神の僕（洗礼名）洗を領（う）く、父、『アミン』及び子、『アミン』及び聖神の名に因（よ）りてなり、『アミン』」という言葉とともに、この人を三回水に浸からせます。この瞬間がまさしく洗礼です。

洗礼において**水**は特別な役割を担っています。水は浄さと清めの象徴であり、水は人の身体をすすぎ、同時に彼の霊を罪から解放し、霊的に彼を改めます。正教会では洗礼は完全な浸水によって行われます（スラブ語の「крещение（クレシェーニエ）」の言葉自体が浸水を意味するものです）。特別な場合には灌水や、あるいは（例えば洗礼を受ける人が重病を患っていたり、死に瀕して

⁸⁷ 人は洗礼機密を通じて神の子となります。

いたり、人工呼吸器をつけているというような)水をかける〔滴礼など〕ことによっても行われます⁸⁸。

水に浸かることは死を象徴し、水からあがることは復活を象徴します。教会の教えによれば人は洗礼において生まれ変わり、「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです（コロ 3：9-10）。」

傅膏機密

正教会では、洗礼機密はもう一つの機密、**傅膏機密**と同時に行われます。これは、洗礼を受ける人が水からあがり、清浄と改まりの象徴である白い衣（ころも）を着た後（伝統的に、新しく洗礼を受けた人はこの時に十字架を胸に掛けます）で行われます。

人は傅膏機密で「聖神の恩賜の印（しるし）」を受けます。この文言を述べながら、司祭は洗礼を受けた人の額、目、耳、鼻、口、胸、手、足に、香り高い油を混ぜた特別な聖膏（せいこう）をつけます。聖膏（せいこう）は総主教（地方教会のトップ）の直接的監督の下で準備され、彼によって教区に分配され、〔教区の〕主教によって個々の教会共同体に分配されます。このようにして総主教によって成聖された聖膏（せいこう）を通じて、聖神の恩賜の受け取

⁸⁸ もし洗礼が何らかの理由で、灌水や水をかけるという形で行われた場合、これに後から浸水によって再度の洗礼を「付け加える」ことはできません。洗礼が行われるのは一度だけだからです。

り以外にも、総主教、主教、司祭、それぞれの信徒の間の関係が象徴的に表れているといえます。

油をつけるのは古代からの慣習です。旧約においては預言者たちが、王の即位の時、王に油をつけていましたし、油をつけることによって祭司たちはその務めに就けられました。新約においてはレビびとの世襲祭司職⁸⁹は廃止され、キリスト教徒全てが「選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民（一ペト 2:9）」と捉えられるようになりました。それに応じて、古代の油をつける慣習の意味も見直され、油をつけるという行為は「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった（黙 1:5-6）」キリストを信仰する全ての人に対して行われるようになりました。

イエス・キリストは、王としての務めと司祭としての務めを自身の位格の中で兼ね備えており、自身の信者たちにもまた王と司祭となる権威を与えました。これはキリスト教徒が、罪的情念を支配するという使命を帯びているという意味であり、キリスト教徒は自身の生活を神への務めとして捉え、神から受けた賜物を神に感謝とともに返していかなければならないのです。

洗礼の行進、使徒書簡と福音書の朗読

⁸⁹ レビびとの祭司職とは、すなわち旧約聖書時代の祭司職です。規定によれば、聖書にある族長レビの子孫だけが祭司職に就くことができました。つまり祭司職は父から息子へと継承されていたのです。

傳膏機密の後には、司祭、洗礼を受けた人、代父母という機密の参加者全員が、洗礼盤の周囲を三度歩いて回ります。この儀礼は、復活祭前日に人々を洗礼していた頃からずっと残っているもので、彼らは、教会共同体が挨拶をするために待ち構えている聖堂の中へと、白い衣で荘厳に入っていったのです。

その後で、使徒パウロのローマの信徒への手紙の一部分が朗読されます。

「それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。死んだ者は、罪から解放されています。わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死

んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい（ロマ 6：3-11）。」

使徒の手紙からのこの朗読は、洗礼機密の深い意義を明らかにしながら、これを総括しているといえます。使徒パウロの言葉に照らせば、主の死の隠喩としての、洗礼盤の水へと浸かるという象徴がよみがえります。洗礼のおかげで、キリストの生活、死、復活が、キリスト教徒の霊的経験の一部となるのです。パウロは同時に、罪に対しての死と「新しい命」への復活という、洗礼の内的意義を強調しています。

使徒の手紙朗読の後には、キリストが弟子たちに、父と子と聖神の名によって洗礼を授けるようにという命令を与えている福音書の箇所（マタ 28：16-20）が朗読されます。この朗読は、洗礼機密が神によって規定されたものであることを証明しています。この朗読箇所は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる（マタ 28：20）」と、キリストが教会の内に常に臨在していることを思い起こさせています。

福音書の朗読は、洗礼機密の意味的しめくくりです。現代の実践としてはこの後に、洗礼を受けた人の身体からの聖膏（せいこう）を拭き取り、神への服従の印として髪を切るという儀礼が行われます。これは初代教会では洗礼の八日目に行われていました。また「Воцерковление」が行われます。つまり、新しく洗礼を受けた人を至聖所の門まで連れて行き、救世主と生神女の聖像

(イコン)に接吻させるのです。新しく洗礼を受けたのが男児の場合、至聖所に連れて行き、宝座の周りを巡るというならわしがあります。

8. 死者の復活

信経は「我望む、死者の復活、並びに来生の生命を。アミン」という言葉で終わっています。

来生の生命の信仰

有名な古代宗教は全て、**死後の存在**への信仰を有しています。それでいて、死後の命は様々に理解されます。たとえば、いくつかの東方の宗教では、人の体から動物の体ということも含めて、一つの身体から離れた霊（たましい）が他の体に移るという考えが見られます。

キリスト教は、このような考え方を否定しています。これは、人の霊（たましい）と体とは一度結びつけられたのだということに立脚しています。それでいて死の瞬間に霊（たましい）は体を離れ、この世ではない世で、独立して存在し始めます。

永遠の生命への転機としての死

死の意義についての疑問は、あらゆる時代にわたって人類を悩ませてきました。なぜ人は死ぬのでしょうか。なぜ死を避けることができないのでしょうか。不死はありえるのでしょうか。キリスト教は、これらの疑問に対して、**死**

は永遠の生命への転機であり、この生命は、神を喜ばせた人々にとってはこの世の生命よりも良いものになるのだと答えます。この世の生命では、善は悪と入り混じっていて、喜びには悲しみがつきものです。永遠においてはこんなことはなく、義人（ぎじん）たちは神の顔を観照し、不断の喜びと平穏の中にあり続けるのです。

人は不死のために創造されたのであり、この不死はキリストへの信仰のおかげで得られるものです。死の力はキリストへの信仰によって克服され、人は、体において死んでも、霊（たましい）において生き続け、彼のために用意された、より美しく完全な、他の世へと移るのです。信経の言葉によれば、その世ではキリストの国に終わりが無いのです。

しかし死後の境遇は、全ての人々にとって同一なわけではありません。それぞれの人の霊（たましい）に対する最終的な裁きは、**畏（おそ）るべき〔最後の〕審判**で下されることになります。

畏るべき審判と死後の報い

自身の死の少し前、主イエス・キリストは次の教えを述べました。「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たち

のために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気の見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気の時、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』(マタ 25 : 31-43)」イエスはこの教えを「こうして、この者ども

は永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである（マタ 25 : 46）」と結んでいます。

この教えは、死後の報いについてのキリスト教的理解の本質を明らかにしています。永遠における人の生命は、地上の生命の続きなのです。ある人がこの世で神を愛し、神の戒めを実行して善を行おうとしていた場合、来世でもその人は神とともにあり続けます。ある人が地上で神に反抗する者であり悪魔に仕えていた場合、死後もその人は悪魔の権力の中にあることになります。

神は悪を創っておらず、また地獄も創っていません。悪魔、悪霊、そして、神の意志に意識的に反抗する人々、善の道の代わりに悪の道を選ぶ人々が、自分たちの働きによって地獄を創り出しているのです。神は「**すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んで**（一テモ 2 : 4）」いるのです。しかし全ての人々がこれを望んでいるわけではありません。神は人々を強制的に、彼らの意志に反して救うことはしません。ある人々は、神に反抗して、自分自身に対して、そして周囲の人々に対して、初めはこの世、地上で地獄を創り出します。この地獄は彼らにとっては、後に来生の生命でも続くのです。

キリストは自身の復活によって死に勝利し、例外なく全ての人々のために永遠の生命の門を開きました。全ての人々が死後に樂園に行かないのは、全ての人々が神の道、善の道を選ぶわけではないからです。神は誰をも、樂園にも地獄にも追いやろうとはしていないのです。人の死後の境遇は、その人自身の選択の結果なのです。畏るべき審判においては神がそれぞれの人に裁きを言

い渡しますが、その人は自身の行いと全ての生活のあり方によって、永遠における自身の境遇をあらかじめ決めてしまっているのです。

復活の信仰

「我望む、死者の復活」の言葉は、**全ての人が復活する**というキリスト教の教えを指しています。この復活について使徒パウロはこう述べています。「アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。最後の敵として、死が滅ぼされます（一コリ 15：22-26）。」

教会は、全ての人の復活が身体的なものであると信じています。つまり人々は肉体において復活するのです。旧約聖書で義人ヨブは「わたしは知っている／わたしを贖う方は生きておられ／ついには塵の上に立たれるであろう。／この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう（ヨブ 19：25-26）」と述べています。イザヤの預言書には「あなたの死者が命を得／わたしのしかばねが立ち上がりますように。／塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。／あなたの送られる露は光の露。／あなたは死霊

の地にそれを降らせられます。(イザ 26 : 19)」とあります。エゼキエルの預言書では全ての人の復活が、隠喩的にその様相を示されています。エゼキエルは地上にある多くの死者の骨を見、神の命令によって骨と骨とがつながって筋と肉とが生じ、最後に神が彼らに生命の霊を吹き込み、彼らは再生したのでした(エゼ 37 : 1-11)。

復活した人々の肉体は、どのようなものになるのでしょうか。今現在と同じものか、それとも違うものなのでしょうか。キリスト教神学はこの疑問に対してははっきりした答えを与えていません。復活した後のキリストの肉体の外見が、近しい人々ですらすぐには彼だと分からない(ルカ 24 : 16、ヨハ 20 : 15)ように変わってしまったのと同じように、肉体の外見は変化するのかもしれない。

死に対する勝利

キリスト教徒は死を恐れてはいけません。なぜなら**キリストが死に勝利した**ことを知っているからです。この確信は、復活祭の聖歌の言葉に反映されています。

ハリストス死より復活し、死をもって死を滅(ほろぼ)し、墓にある者に生命を賜えり。

キリストはそれぞれの人の心の扉を叩いていますが、全ての人が彼に扉を開くわけではありません。キリストは、自身の教えに反応する人に、天の国を与え、自身の父とともにあり続けるようにします。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたし声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように（黙 3：20-21）。」

Добавлено примечание ([小野 成信
文 PDF127p では「Откр. 4:20」とあるが、3：20 の間違い。])

アミン（アーメン）

信経の結びの言葉は「アミン（アーメン）」です。これは「まことに」を意味する古代ヘブライ語の言葉で、旧約時代の祈祷から借用されたものであり、キリスト教奉神礼でしばしば現れるものです。キリスト教徒は「アミン（アーメン）」の言葉によって信経の内容に合意していることを表しているのです。

課題

新約聖書か聖書⁹⁰を購入して、手始めに四福音書の内一番短いマルコによる福音書を読んでみてください。もし何か分からなくても戸惑わないでくださ

⁹⁰ 最も信頼できる聖書のロシア語訳は、十九世紀にフィラレート（ドロズドフ）の指導の下で作られたいわゆる「シノド訳」です。この翻訳が〔現代でも〕モスクワ総主教庁によって発行される聖書の全ての版に用いられています。〔日本の正教会では、奉神礼の際に用いられるのは十九世紀後半にニコライ（カサートキン）によって翻訳された聖書だが、奉神礼以外の場面では新共同訳などが一般に用いられている。〕

い。すぐに分からないことも後から分かるようになるでしょう。一回目の読みで大切なのは、イエス・キリストの地上生活のあらすじを知ること、彼の言葉の音色に耳を傾けること、彼の神としての顔を見つめることです。もしイエスの姿があなたの興味を引き、あなたが彼に対する信頼で満たされるならば、残りのものは、すぐにせよだんだんにせよやってくることでしょう。

第二部 キリスト教道徳

1. 旧約聖書の十戒
2. 真福九端（至福の教え）
3. 旧約聖書の十戒とキリスト教徒の道徳
4. 神への愛と隣人への愛
5. 罪と痛悔
6. 家族倫理
7. 子育て
8. 教会における女性
9. キリスト教徒の生活—霊的努力の道

イエス・キリストほどに人類共同体の霊的道德的發展に影響を与えた人物は、歴史上ありません。イエスには社会的変革者としての性格は全くありませんでした。しかし彼の教えは時代の流れとともに、人と人との関係の体系全体に深く抜本的な変化をもたらしました。個人的道徳のレベルだけではなく、社会的レベルにおいてもです。

イエスは奴隷制廃止を訴えませんでした、まさにキリスト教の、自然状態における人間間の平等性理解のおかげで、奴隷制は廃止されたのでした。イエスは政治体制の転換や法体系の改革を呼びかけませんでした、まさにキリスト教のおかげで人間社会は、多くの国家が活動する際の基礎となっている

現代の法体系を創り出したのでした。イエスは人権の闘士ではありませんでしたが、女性や子どもたちを社会の一人前なメンバーとし、人権における不平等や、民族的、人種的特徴による差別、さらにその他多くの古代世界に見られる社会構造の欠陥の撤廃を可能とした人権理解は、キリスト教の教えに基づいています。

社会の変容は、個人の道徳的変容から始まります。旧約の戒めは、道徳的健全さとイスラエル民族の統一性を保全することをねらいとしていました。このためには、もし不可欠であれば、一部の人々を犠牲にすることすらいとわれなかったのです。「その人は民の間から断たれる。わたしの契約を破ったからである（創 17：14）」という聖書の表現は特徴的です。神の戒めを破る人は、民全体に害を及ぼす余計で危険な要素として、ただ切り離して一掃されなければならなかったのです。

新約においては、それぞれの人が神の目の前で価値を持ったものとされています。イエス・キリストの道徳的教えは、ある一つの民族ではなく全人類に向けられたものであり、それでいて彼は具体的な人物に話しかけています。キリスト教にとって、不要な人、他者の幸福のために破壊してしまってもいい人などないのです。それぞれの霊（たましい）が貴重なのであって、キリストは手に負えない犯罪者にすら矯正のチャンスを与えています。「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来（一テモ 1：15）」たと使徒パウロは強調し

ています。主は十字架上で悔い改めた犯罪人に赦しを与えています（ルカ 23：40-43）。

イエスは、自身の教えの中で道徳的な法や規定の全集を与えようとしていたわけではありません。このような全集を創ろうとしていたのはファリセイびとや律法学者で、このようなやり方はイエスには全く無縁なものでした。道徳的主題についてのイエスの教えは、人の霊的発展の基本的方向性を与えていますが、これは、人の自由を奪ってその生活すべてを規定するためのものではありません。これは反対に、人が罪や情念に隷属することによって失った、内的、霊的自由を取り戻させるものなのです。

使徒パウロの手紙、教父たちの著作の中では道徳的、社会的テーマが数多く言及されています。しかしこれらの書き手もまた、道徳的問題に関するキリスト教徒のための教科書を創ろうとしたわけではありませんでした。

このカテヒジスの第二部では、社会道徳にかかわる主題を検討します。キリスト教の理解による個人的、家族的な道徳の原則については、いくつかのものに言及するにとどめます⁹¹。

1. 旧約聖書の十戒

⁹¹ 社会についての正教会の教えは『社会に関するロシア正教会の基本理念（Основы социальной концепции Русской Православной Церкви）』という文書で読むことができます。[2021 年現在和訳はない。]

キリスト教道徳は、旧約聖書中にその前身を有しています。出エジプト記では、神がモーセを通じてイスラエルの民に与えた十戒について述べられています。いくらか省略した十戒を見てみましょう。

1. わたしは主、あなたの神 [.....] である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。
2. あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。
3. あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれない。
4. 安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も [.....] 同様である。
5. あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。
6. 殺してはならない。

7. 姦淫してはならない。
8. 盗んではならない。
9. 隣人に関して偽証してはならない。
10. 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。(出 20 : 2-17)

この十戒は、旧約聖書の道德観の基礎となっています。十戒はキリスト教徒にとっても意義深いものであり、それについてはイエスと裕福な青年との会話が証明しています。「一人の男がイエスに近寄って来て言った。『先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。』イエスは言われた。『なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。』男が『どの掟ですか』と尋ねると、イエスは言われた。『『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』』(マタ 19 : 16-19)」イエスは、モーセの十戒から六つ目、七つ目、八つ目、九つ目と五つ目を引用し、それらに隣人への愛という戒めを加えています。

イエスは旧約聖書の戒めを重んじているものの、同時に、自身の信者たちに、それを実行することに限定されるものではない道を示しています。これが**靈的完全性**の道です。イエスはこの道を裕福な青年に示したのであり、青年はこれにそって生きることを望まなかったのです。「もし完全になりたいのなら、

行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい（マタ 19：21）。」イエスの示している道は、モーセの律法を否定するものではなく、人をさらに遠くへ、靈的完全性の頂点へと導くものなのです。

モーセの律法に対するイエスの態度は、山上垂訓の中で最も完全に明らかにされています。この態度は二通りです。一方でイエスは「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない（マタ 5：17-18）」と語っています。他方では、まさに山上垂訓が、後で検討するように、キリストの道德の教えは旧約の道德性の繰り返しでも拡張でも直接的な続きでもないことを証明しているのです。

旧約聖書は、キリスト教聖書に完全に組み込まれ、人類の発展のある段階で与えられた神の啓示としての意義を持ち続けています。しかし旧約聖書の道德に関する規定の多くは、キリスト教の伝統においては再解釈され、増補され、拡充され、あるものについては変更されたり廃止されたりしたのでした。

たとえば、安息日（スボタ）に何もしないようという戒めは、旧約時代に理解されていた形では、キリスト教の伝統においては事実上廃止されています。同時にスボタ（土曜日）は、キリスト教の奉神礼暦では、全ての死者を思い起こす特別な日であり続け、聖大スボタ（土曜日）（復活祭前日）は、主イ

エス・キリストが墓の中で安息していたことを思い起こす日です。神が天地創造の七日目に全ての仕事を離れて安息したことが、墓におけるイエスの安息の原像となっています。キリスト教徒は、日曜日を特別な形で神に捧げます⁹²。

死を禁じる戒めは、キリスト教でもその意義を保持しており、自身の死をなんらかの理由で願う人々にも広げられています。教会の教えによれば、自殺は大罪です⁹³。自発的な自由意思による、いわゆる安楽死、つまり人が他人の手によって自身の生命を終わらせる行為は、自殺と同列におかれます⁹⁴。

教会は常に平和を呼びかけ、戦いを悪だと、殺人を道徳上、法律上の罪だと考えています。同時に、戦いにおいて敵を殺すことは犯罪ではありません。なぜならこれは祖国と隣人の守護のためのものだからです⁹⁵。教会は、戦いにおける功績をいつも高く評価してきました。ある戦士は聖人の列に加えられ、聖

⁹² フィラレート『正教訓蒙』256頁参照。

⁹³ 『社会に関するロシア正教会の基本理念』12章8項によれば「故意の自殺者は、『人の侮辱を受けたるにより、あるいはその他小膽（しょうたん）なるより起（おこ）りし事件によりてこれを行〔上田将訳〕『聖規則書』正教会編集局、1898年、412-413頁。』った場合については、キリスト教の埋葬も奉神礼的記憶も受けられない。[.....] もし自殺者が無意識に、『分別の外で』、つまり精神的な病気の発作において自身の生命を奪った場合には、教区主教による調査の後で教会による祈祷が許可され得る。同時に、自殺の罪は、自殺者の周囲にいながら同情や憐れみを示すことができなかった人々もともに行ったものである場合があるということを忘れてはならない。教会は使徒パウロとともに『互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです（ガラ6:2）』と呼びかけている。」

⁹⁴ 安楽死に対する教会の態度については『社会に関するロシア正教会の基本理念』12章8項を参照。
[2021年現在和訳はない。]

⁹⁵ フィラレート『正教訓蒙』272頁参照。また『社会に関するロシア正教会の基本理念』8章2項「教会は戦争を悪だとしながらも、隣人の守護や犯された正義の回復に関する限り、その信徒に対して戦闘行為に参加することを禁じていない」を参照。

像（イコン）に武器を手にした姿で描かれています⁹⁶。他の人々のために戦場で生命を捧げた戦士に対して、教会は、イエスが自分自身について述べた「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない（ヨハ 15：13）」という言葉当てはめています。

父母の尊敬の戒めもまたキリスト教で保たれています（マタ 15：3-6、19：19、ルカ 18：20）。同時にイエスは「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない（マタ 10：37）」と述べており、イエスに対する愛はいかなる親族関係をも上回るものだとして強調しています。キリストへの愛と両親の意志に対する服従の間の選択という状況は、親がキリスト教信仰に反対している場合、子どもたちにキリストへの信仰をやめさせようとしている場合に起こります。

2. 真福九端（至福の教え）

福音書は、救世主の多くの教えを含んできました。その中でも特別な位置を占めるのは**山上垂訓**（マタ 5-7）です。山上垂訓の中に、キリストが自身の信者たちに、それに従って生きるようにと呼びかけている道徳的規律が述べられています。

⁹⁶ たとえば、四世紀初めの迫害で生命を落とした聖大致命者凱旋者ゲオルギオスやテサロニケの聖大致命者潤膏者ディミトリオス、四世紀末の致命者戦士ヨハネ、1380年のクリコヴォの戦いで落命したスヒマ修道士アレクサンドル・ペレスヴェートとアンドレイ（ロディオ）ン・オスリャービヤなどです。

山上垂訓はイエスの自画像だといえるでしょう。なぜならイエスは山上垂訓の中で、自分自身がその生活で体現した原則、イエス自身が有していた特徴を言い表しているからです。

山上垂訓は、**至福の教え**（真福九端）から始まります。これはイエス・キリストの霊的、道徳的教えの神髄を含んだものです。

1. 心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
2. 悲しむ〔正教訳：泣く〕人々は、幸いである、その人たちは慰められる。
3. 柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。
4. 義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。
5. 憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。
6. 心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。
7. 平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。
8. 義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
9. わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。
10. 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある（マタ 5：3-12）。

この文章は何よりもまず、何が幸せなのかという一般的な考え方をくつがえしています。一般に幸せというのは、物質的な豊かさ、職業上の成功、家族生活の幸せ、問題や困難、試練や悲しみがないことだと考えられています。イエスは、真の幸せ（至福、真福）は外的要因に左右されるものではないと教えているのです。真の幸せとは、人が自身の資質のおかげで手に入れる、その人の内的な財産なのです。

この資質の一覧の中で最初にあるのは、心の貧しさであり、これは一般に**謙遜**のことだと理解されます。つまり神を覚えていることと神の臨在を感じ取ることからくる、特別の内的な霊的状态です。しかし謙遜は、無為であることや屈辱感とは全く違います。キリスト教徒は積極的に生活して善いことを行うという使命を帯びていて、それでいながら人は、霊的にも物質的にも持っているもの全てを神から与えられたのだということを忘れてはならず、自身の善行を自身の功績であると考えてはいけません。謙遜の対極にあるのは傲慢（自己過信と自身を激賞すること）です。傲慢は、神と人との間に障害を置き、人と他者との関係に不調和をもたらします。

悲しむ [泣く] 人々についての至福の教えは、キリスト教徒は忍耐強く悲しみに耐え、不幸や試練を恐れず、喜びや満足だけの生活を求めないということができなければならないということを意味しています。試練の内に神の手を見、神の臨在という感覚の中に慰めを見いだせなければならないのです。キリスト教徒は憤慨や憎しみによって、あるいは憂鬱や絶望によって泣くのでは

なく、自分自身の罪の自覚によって（悔い改めの涙）、あるいは神への近さによる喜びによって（感涙）泣くのです。

柔和とは、内的な霊的平穩を手に入れるのを助ける資質です。イエスはこう語りました。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである（マタ 11：28-30）。」イエスは柔和の手本であり、弟子たちに自身を模範とするように呼びかけています。使徒ペトロは自身の手紙の中で、女性たちに向けてこう呼びかけました。「あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです（一ペト 3：3-4）。」柔和は内面的な美しさの兆しであり、女性にも男性にも不可欠なものです。

キリストは義に飢え渴くように、すなわちいつでもどこでも**公正さ**、正当さを追求するようにと命じています。正義は旧約聖書で「神は正しくいます（詩 7：10）」とあるように、神自身の特徴の一つとされています。人の公正さは、この神の正義の反映なのです。神の正義は時間枠の外、永遠のものですが、時間枠の中で生きる人々に神が与えた戒めに反映されています。「義に飢え渴く人々」とは、神の戒めを熱烈に実行しようとし、あらゆる正義の源である神を

Добавлено примечание ([小野 成信
DF139p では一ペト 2：3-4 とあるが、3 章が正しい。]

心の全てで探し、力と地位の許す限り無法を阻止し、不当に傷つけられる人々を支える人々なのです。

キリスト教徒は「憐れみ深く、恵みに富（詩 103 [102 聖詠] : 8）」む主になり、**憐れみ深く**なければなりません。憐れみとはただ心の状態ではなく、具体的な慈善の行為、つまり飢えている人に食べさせ、のどが渴いている人に飲ませ、旅をしている人に宿を貸し、裸の人に着せ、病気の人を見舞い、牢にいて人を訪ねる（マタ 25:35-36）という行為に現れなければならないものです。キリストは畏るべき審判において、それぞれの人にまさにこれらの行為について思い込ませることになります。信仰は善行に現れなければならないということについては、使徒ヤコブも「魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです（ヤコ 2 : 26）」と述べています。

心の清さは、人に神を見ることへの道を開きます。神は、その本性において見えませんが、謙遜で柔和で清い心に自身を現します。心の清さを自分自身の努力だけで手に入れることは不可能であり、「神よ、わたしの内に清い心を創造し／新しく確かな霊を授けてください（詩 51 [50 聖詠] : 12）」とあるように神の助けが必要です。そして神が人に求めているのは、悔い改めと痛悔の心です。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた〔正教訳：痛悔の〕霊。打ち砕かれ悔いる心を／神よ、あなたは侮られません（詩 51 [50 聖詠] : 19)。」

キリストの弟子は**平和を実現する人々**となる使命、つまり周囲の人々に平和をもたらす使命を帯びています。そのためにはその人自身が内的平和とゆ

るぎない精神的力を持っていなければなりません。サロフの克肖者聖セラフ
ィムは「平和の心を達成しなさい。そうすればあなたの周りの何千人もが救わ
れるでしょう」と語りました。平和を実現する人とは、自身の中に平和を持っ
ていて、悪によって悪に答えない人です。どこかで不和が起こるときには、こ
のような人は不和を解決するために全力を尽くすのです。

キリストは自身の弟子たちに、迫害を受けることを覚悟しなければならな
いと警告しています。様々な力の迫害が何世紀にもわたって教会に襲い掛か
ってきました。教会が生まれて最初の三世紀、ローマ帝国の懲罰機構が全力で
教会の根絶を図っていた時代もそうでしたし、二十世紀にソビエト連邦が教
会に凄絶な弾圧を加えていた時代もそうでした。

しかし平和で安穏な時代でさえも、キリスト教徒であるということは、幸せ、
道徳、善悪に関してゆがんでひっくり返った考え方を持つ「この世〔俗世〕」
に対して挑戦する覚悟を意味します。山上垂訓の始めにある至福の教えは、キ
リスト教道徳が人類共通の道徳と呼ばれるものと部分的にしか重なっていな
いということを示しています。内的に互いに無縁な主体の平和な共存を確保
することだけが人類共通の道徳の目的であるのに対して、キリスト教道徳は
人の志向を聖性と霊的完全性へと向けるのです。霊的完全性は「神父（かみち
ち）及びハリストスの奥義を知（正教訳コロ2：2）」るために、人々を兄弟愛
の断ちがたいきずなで結びつけることのできるものなのです。

3. 旧約聖書の戒めとキリスト教道徳

山上垂訓中でキリストは、旧約聖書の道徳が示していたよりもはるかに高い道徳的基準を設けています。キリストが山上垂訓中で与えた道徳的法は、旧約聖書に述べられているモーセの律法を本質的に補足（ある場合には修正）しています。

殺人と怒り

イエスは弟子たちにこう語りました。「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる（マタ 5 : 21-22）。」

旧約聖書は、殺人を人間の悪意、敵意、嫌悪のもっとも極端な現れだとして禁じていますが、イエスは殺人をもたらしかねない原因を示しています。人間は自身の心にある**怒りを根絶**し、隣人に対する侮辱の言葉を差し控えなければなりません。不和による悲劇的な結果を避け、自身の心の中という、怒りが生まれるその場所で消してしまうためです。

イエスは誓いや嘘に反対しています。「また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはな

らない。[.....] あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである（マタ 5 : 33-37）。」新約聖書中「悪い者」は、あらゆる悪や罪の源である悪魔を指しています。悪魔はまた嘘の草分けでもあります。この世において、悪魔の嘘は、神の真理と対立するものです。嘘の道に進むことで、人は悪魔に奉仕することになります。

悪に力で対抗しないこと

キリスト教道德の最重要な原則は、山上垂訓の次の言葉で述べられています。「あなたがたも聞いているとおおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない（マタ 5 : 38-42）。」

ここでイエスは、多くの道德体系の基礎である、過不足ない報復に反対しています。この原則は、旧約聖書中に描かれている社会文化的環境において、不均衡な復讐を予防するために重要なものでした。しかしキリストは「**悪に対して悪で応じてはならない**」という新しい原則を掲げています。

なぜイエスは、悪に対して悪で応じないように命じているのでしょうか。なぜなら悪は、悪によってではなく、善によって癒されるからです。善の助けに

よってのみ、悪を根絶することができるのです。二人の人が対立している場合、キリスト教の立場からすると、相手に対して復讐することに成功した人が勝者なのではありません。自身の利益を犠牲にすることもふくめて譲歩することによって、対立が続くのを阻んだ人が、道義的な勝利をおさめたことになるのです。一般的な認識からすればこのような人は敗北者にみえるかもしれませんが、悪に対するこの人個人の勝利は、彼にとって、犠牲になった利益より大きい意義を有しているのです。

悪に力で対抗しないという原則は、この世に存在する悪に対する消極性として理解すべきではありません。キリスト教徒は、自身の中に存在する悪と戦い、自身の家族、社会、国家というレベルに存在する悪に反抗しなければなりません。キリスト教徒は、傷つけられる人々、抑圧される人々の庇護のために立ち上がり、危険の際には祖国を護り、教会を侮辱から護るという使命を帯びているのです。

敵への愛

さらにもう一つ、キリスト教道德の最重要な原則は、救世主の次の言葉に述べられています。「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。**敵を愛し**、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてく

ださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか（マタ 5 : 43-47）。」

イエスのこの呼びかけがなされた文脈において、社会政治的次元を有していました。これはつまり、他民族を自民族の敵として、異教徒や異民族を神の敵として認識することをやめるということです。これは当時のユダヤ人にとって、自分たちの足元の基盤を全く失い、アイデンティティの構成要素の最も重要なものの一つを失い、民族自決への戦いの動機を失うことを意味していました。

イエスは自身の戒めによって、なによりもまず、聴衆の思考の枠を広げ、イエスの教えは普遍的なものなのだとすることを分からせようとしています。イエスは、敵への愛と隣人への愛とを対置していません。彼は、敵をも隣人の中に含めることによって「隣人」の概念を広げているのです。彼の教えの基本的な思想は、次のように表現できます。他人に対する態度は、その人のわたしたちに対する態度に左右されてはなりません。愛は相互的なものだけであってはなりません。善はお返しのものだけではありえません。キリスト教徒は、愛の発現と善行において、相手の行動に対して反応する立場ではなく、自身が先んじて行動する立場をとる使命を帯びているのです。キリスト教徒は他者

の感情や行動に反応するだけではなく、自身が愛と善の源とならなければならないのです。

イエスは、まさにこのような行動の模範を示しています。何千もの人々がイエスのもとにやってきて、イエスは、返答としての愛や感謝、報いに期待せずに、彼らと話し、彼らの病を癒し、彼らが必要としているものに注意を払い、彼らに愛と憐れみを示したのです。イエスの配慮や愛は、徴税人や罪深い女性も含めて、あらゆるカテゴリーの人々に向けられていました。イエスの気づかいは、ファリサイびとや律法学者にすら向けられていました。イエスは、ファリサイびとの態度に対して厳しく非妥協的に接し、その最もゆがんだ発現を非難しながらも、ファリサイびとたちと話したり、彼らの質問に答えたり、彼らの家を訪れ、食卓をともにすることを拒否していなかったのです。自分を迫害する人々のために祈るという戒めについていえば、イエスは、自身を十字架に釘打った人々のために十字架上で祈った時（ルカ 23：34）に、これを文字通りに実行したのです。

敵に対する愛の戒めは、キリスト教道德全体の真髄だといえます。この戒めはまるで焦点のようであり、キリストの他の戒めが反映されているのです。敵に対する愛の戒めこそが、旧約時代の愛、道德、そして隣人に対する人の関係が基づけられるべき規範を、決定的に一新しているのです。この戒めは、教会というイエスの弟子たちの共同体内でのみ完全に実行されることのできる、新しい世界秩序の基礎となっているのです。

愛とは、理性というよりも、感情的な基盤を有する内的感覚です。必要だと頭では分かっている、誰かを愛そう、敵を愛そうと自分に強いるのが非常に難しいのは、これが理由です。敵に対する愛は、自己暗示によって得られるものではありませんし、人の、隣人に対してこう行動しようという決定の結果でもありえません。敵に対する愛を得るためにはもちろん、自身を磨くことが必要ですが、それだけでは不十分です。人がこの特質を自身の中で養うための、好適な環境も不可欠なのです。この環境とは、教会なのです。

キリストによって言い表された道徳の原則は、なによりもまず、彼の弟子たちの共同体である教会の中で働いています。しかしキリスト教徒は、自分と似た人々からなる環境でだけこのような人であってはいけません。キリスト教徒は、これらの原則とは無縁の人々からなる環境の中でも、キリスト教道徳の原則を実現しなければならないのです。

敵に対する愛についての教えは、祖国を護ること、あるいは真理を護ることの放棄の呼びかけとしてとらえてはなりません。モスクワの府主教聖フィラレートはこう述べています。「神の敵をいといなさい、祖国の敵を粉碎しなさい、あなたがたの敵を愛しなさい。」⁹⁷

4. 神への愛と隣人への愛

二つの主たる戒め

⁹⁷ Филарет Московский. Слово в Неделю 19-ю по Пятидесятнице

イエスは、律法学者との会話の中で引用した二つの戒めを旧約の律法の真髄だと考えていました。この律法学者は「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか」とイエスに質問し、イエスはそれに対して「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」と応じたのでした（マタ 22 : 35-40）。

この戒め両方が旧約聖書（申 6 : 5、レビ 19 : 18）から引用されていますが、キリスト教的観点からすればこれらは新たな意味と内容を得ています。旧約聖書で「隣人」とは同族の人、同じ民族の子を指していました。イエスは、戒めを引用するにあたり、民族的、宗教的に何者かということとは関係なく、あらゆる人々が隣人なのであるという理解によって、この戒めの意義を本質的に拡張しているのです。

福音記者マルコは同ジエピソードを述べるに際し、イエスの話し相手の反応を強調しています。「『先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。』イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠くない』と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった（マコ 12 : 28-34）。」

イエスの話し相手がいけにえについて言及しているのは、偶然ではありません。この儀式は、大昔のイスラエルで、宗教生活がなによりもまず法律的なものとして受容されていた時代に発生したのです。罪は神に対する犯罪であり、神の慈悲を必要とするものだと考えられていました。このような慈悲を起こさせるためにいけにえが用いられたのです。

イエスは、いけにえの儀式の代わりに、他の前提から出発する新しい宗教をもたらしました。イエスは、義務や恐怖ではなく、愛と忠実に基づいて神との関係を構築するようにと勧めたのです。心も含め人の全身全霊をつつむ神への愛は、いけにえではなく、隣人への愛へと反映されなければなりません。神は、いけにえや宗教儀式ではなく、愛や慈悲の行為こそを基準として、畏るべき審判において正しい人々と罪びとたち、羊と山羊とをわけるとイエスは述べています（マタ 25 : 31-46）。

律法学者はイエスに最重要な一つの戒めについて質問していますが、イエスは自身の答えの中で二つめの戒めを加えています。これは、神への愛と隣人への愛とが、イエスにとっては二つで一つの戒めを構成していることを示しています。つまりこれらの愛の片方は、他方なしには考えられないのです。神への愛は隣人への愛に反映され、隣人への愛は神への愛の自然な延長なのです。神学者ヨハネはこれについて次のように述べています。『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛

さない者は、目に見えない神を愛することができません。神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です（一ヨハ 4：20-21）。」

キリスト教における愛の理解

旧約聖書は、隣人を「自分のように」愛するようと呼びかけており、これが旧約聖書的道德の頂点です。律法学者の質問がもっぱらモーセの律法に関するものだったため、イエスはこの戒めについて律法における二つの霊的、道德的頂点の一つとして挙げているのです。イエスは山上垂訓の中で、それぞれの方が自分を愛し、良いことを自分のために望んでいるということを出発点として、隣人に対する態度の旧約の原則をまとめた規則を言い表しています。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である（マタ 7：12）。」

しかし、イエス自身の愛に関する教えにおいては、モーセの律法的道德的教訓にあるのとは違う響き、違うトーンが聞こえます。最終的にイエスは、隣人を自分のようにではなく、自分よりも愛するようと呼びかけています。イエスは、隣人のために命を捨てることもいとわないようと呼びかけています（ヨハ 15：13）。他人のために命を犠牲にすることこそ、キリスト教的愛の極致なのです。

愛とは、キリスト教神学とキリスト教道德の基礎的概念です。キリスト教はよく愛の宗教だと呼ばれます。これは、愛についての教えがキリスト教の意義

的、価値的眞髓であることを意図した呼び方です。神学者ヨハネは「神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました（一ヨハ4：8-9）」と述べています。イエスは、自身の受難と死とを通じて「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた（ヨハ13：1）」のでした。イエスはまた自身の弟子たちに対して、機密の晩餐において互いに愛しあうようにという「新しい掟」を与えたのでした（ヨハ13：34）。

何が目新しいのでしょうか。キリストは、ただ普通の愛で互いを愛するようではなく、それに応じる愛を期待しない、自己犠牲的な愛で互いを愛するようと弟子たちに呼びかけているのです。彼が語っているのは、愛する者と愛される者とが同一の民族に所属していることによって行われる愛ではありません。これはまた、血族関係にある人々、あるいは友情を持った人々の間にあつた当然の愛のことでもありません。イエスが語っている愛とは、性質的に異なる愛です。この愛は、超自然的な性格を有しているために、前述の愛全てを含み、超越しているのです。この愛の源泉は、人の感覚や感情ではありません。その源泉たりうるのは、神自身のみなのです。

愛についてのキリスト教の教えは、教会でのみ完全に実現されるものであり、教会こそが、キリスト教徒がキリスト自身から愛を学ぶようにと呼びかけられている場なのです。しかし、キリスト教徒が呼びかけられている愛は、教会のメンバーだけに限定されるべきものではありません。この愛は、具体的な

ある人の個人的な敵すらも含めて、全ての人々を例外なく包み込むべきものです。キリスト教徒は、友人と敵、自分側の人々と相手側の人々という風に人々を分けてはなりません。キリスト教徒にとっては、全ての人々が自分側の人々、隣人、親族なのです。そしてキリスト教徒は、相手が自分を愛してくれるかどうかに関係なく、全ての人を愛すようにと呼びかけられているのです。

5. 罪と悔い改め

罪

キリスト教的道徳の教えにおいては、**罪**の概念が大きな意味を持っています。「罪」という言葉が意味しているのは、犯罪や、その他社会的法体系の違反ではありません。罪とは、神の規定した道徳の法、神が人のために規定した目的から逸脱する、人のあらゆる行為のことです⁹⁸。

罪は人を神から引き離し、霊的な死へと導きます。使徒ヤコブの言葉によれば「人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます(ヤコ 1:14-15)。」

人の罪は多様であり、すべてをつくすような分類はできません。初期キリスト教文献では、あらゆる罪は、罪の情念から発生する、八つの主要な罪、すなわち貪食、淫蕩、強欲、怒り、悲嘆、怠惰、虚栄、高慢⁹⁹に帰結するという意

⁹⁸ 「грех (グレフ)」というスラブ語に訳されるギリシャ語の言葉「αμαρτία (アマルティア)」の文字通りの意味は「失敗」です。(元々これは、的を外した弓の射手について用いられるものでした。)

⁹⁹ ヨハネス・カッシアヌス「八つの大罪との戦いについて」。

見が述べられています。西方の伝統では、罪は、死に至る罪、つまりもっとも重い罪と、そしてそれ以外の、より軽い罪とに分ける教えが広がりました。罪は三つのカテゴリー、すなわち神に対するもの、隣人に対するもの、自分自身に対するものに分けられることもあります。

罪には、自由なものと不自由なものがあります。自由な罪とは、人が故意に行うものです。つまりその人は、ある行動が神の法に反していると分かっているが、これを行っているのです。不自由な罪とは、その人自身の希望に反して、自身の意志に反して行われる罪を指します。

キリストは、「はっきり言うておく。罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である（ヨハ 8：34）」と述べています。罪は人をその奴隷とし、人を罪の習慣、傾向、「肉の欲、目の欲、生活のおごり（一ヨハ 2：16）」に依存させてしまうのです。

現代の医学用語で「依存症」とは、人の何かに対する強い欲求を意味します。薬物依存症、アルコール依存症、ゲームへの依存などがあります。ある種の依存症は、精神障害と関連づけられます。しかし依存症の基盤となっているのは、深く根付いた罪の習慣である場合が多いのです。たとえば、アルコール依存症や薬物依存症は、個性の完全な退化へと導いてしまう可能性があるため、教会の視点では罪とされます¹⁰⁰。

¹⁰⁰ アルコール依存症や薬物依存症に対する教会の態度については、『ロシア正教会の社会構想の基本』11章6項参照。

様々な形態の依存は互いに関連しています。ただ機械的な方法によるある依存からの解放は、その人が他の種類の依存に陥るということにもなりかねません。罪も全く同様に互いに関連しており、ある罪は他の罪を招来するということがよくあります。たとえば使徒パウロは、度を越えた飲酒と淫蕩との関係を強調しています（エフェ 5：18）。カルタゴの聖キュプリアヌス（三世紀）はこう述べています。「一方で貪欲を降伏させれば他方で肉欲が生じ、肉欲が征服されると野心が所を替えて頭をもたげてくる。野心がねじ伏せられると今度は怒りが爆発し、傲慢が高まり、深酒が誘惑し、恨みが平和を破り、妬みが友情を断ち切ってしまう。」¹⁰¹

自己の意志の力だけ、あるいは自己暗示だけによって罪に打ち勝つのは不可能です。罪との戦いにおいては自分だけを頼ってはいけません。神の助けを求め、信仰と聖書から力を得なければならないのです。使徒パウロはこう述べています。「立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、平和の福音を告げる準備を履物としなさい。なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができるのです。また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい（エフェ 6：14-17）。」

Добавлено примечание ([小野 成信
DF c. 153. Еф. 5 : 14-17ではなく、6 : 14-17

¹⁰¹ 和訳は、キュプリアヌス（吉田聖訳）「死を免れないことについて」上智大学中世思想研究所（編訳・監修）『中世思想原典集成 4 初期ラテン教父』平凡社、1999年、285-286頁による。

キリスト教において罪は病として理解されます。霊的病としての罪は、その結果として身体的病をもたらすこともあります。同様に、霊的な快復は、人の霊的、身体的構造全体に影響します。主イエス・キリストが中風の人を治して「子よ、元気を出しなさい。あなたの罪は赦される（マタ 9：2）」と言ったのは、これを指してのことだったのです。治癒された他の中風の人にイエスは「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない（ヨハ 5：14）」と言っています。

悔い改め

教会の使命は、人の罪を非難することではなく、その人が自身の罪を認識するのを助け、癒すことです。罪に対する薬は**悔い改め**です。

悔い改めによって癒されることのできない罪はありません。主イエス・キリストは「人が犯す罪や冒瀆は、どんなものでも赦されるが、“霊〔神（しん）〕”に対する冒瀆は赦されない（マタ 12：31）」と述べています。神・聖神に対する冒瀆とは通常、神の意志を頑固に否定すること、神との意図的な対立、罪を悔い改めて更生するのを望まないことを指していると理解されます。

悔い改めは、後悔と同一ではありません。行った罪に関する遺憾の念としての後悔は、無益なものたりえます。銀三十枚で救世主を裏切ったユダは、後悔して祭司長や長老に金銭を返して「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました（マタ 27：3-4）」と言いました。それでいてユダは、悔い改めでは

おらず、キリストの弟子の共同体に戻ることもなく、自身の罪をさらに重くする深刻な罪、自殺をしたのでした。それに対して、キリストを知らないと言った使徒ペトロは、これについて激しく泣き（マタ 26：69-75）、キリストへの愛を告白し、その後の人生と致命という献身全てによって、その愛を証明したのでした（ヨハ 21：15-19）。

悔い改めとは、ただ罪を行ったという事実を述べて後悔するというだけに留まりません。悔い改めとは、霊的体系の総体です。その体系に含まれるのは、毎日の自己分析であり、行ってしまった罪や思い浮かんだ罪深い考えについての後悔であり、与えた損害をできる限り修正するために努力することであり、霊的矯正のための恒常的な自己鍛錬です。悔い改めるということはつまり、自身の意識と生き方を変えるということ¹⁰²、罪深い行いをその反対のものに替えるということ、道徳的価値のキリスト教的体系を受け入れるということ、神の戒めを行うということ、行動のみならず思考や感情においても常に善を志向するということです。

使徒パウロは「以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かって
いる古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければ
なりません（エフェ 4：22-24）」とキリスト教徒に呼びかけました。悔い改め

¹⁰² 「покаяние（ポカヤニエ）」というスラブ語、ロシア語の言葉に訳されるギリシャ語「μετάνοια（メタノイア）」の文字通りの意味は、意識の変革、考え方の修正です。

を通じた内的、霊的な再生は、その人の完全な道徳的生まれ変わりを導き出すのです¹⁰³。

罪を赦す神

悔い改めは人を神へと戻します。神は全ての人を愛し、人が罪深い生活の仕方から離れて、神の下へと戻ることを待っています。旧約聖書中で神は「わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを楽しむ（エゼ 33 : 11）」と語っています。

新約聖書においては、イエスがエルサレムに向かう道中で語った、放蕩息子のたとえ話の中で悔い改めについて述べられています。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっ猪の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるの

¹⁰³ 悔い改めについて、より詳しくは——参照。

に、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親

は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか（ルカ 15：11-24）。』

このたとえ話において、悔い改めは段階的なプロセスとして表されています。このプロセスは放蕩息子が我に返り、父を思いだし、父の下に戻ることに決めるところから始まります。その後放蕩息子は、行動に移ります。しかし、たとえ話の主役は、息子ではなく、神を象徴している父です。ある人が神の下へと戻って悔い改めるとき、神はその人を非難せず、もろ手を挙げて受け入れるのです。

悔い改めとは常に、人と神とが互いに近づいていくことなのだとたとえ話から分かります。たとえ話の中で父は、息子が近づいてくるのをただ忍耐強く待っているだけではありません。父は、息子を目にして彼の下に駆け寄っています。父の口からは、ただ一言の非難もとがめも放たれないのです。

主イエス・キリストは自身について「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来た（ヨハ 12：47）」と述べています。イエスは、姦通の現場で捕らえられた女性に「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。[.....] わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない（ヨハ 8：10-11）」と話しています。イエスの足に香油を塗った罪深い女性をイエスが非難するのを、ファリサイ

びとが待ち構えていたとき、イエスは非難するのではなく「あなたの罪は赦された [.....] あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい（ルカ 7：48、50）」と言いました。イエスは、洗礼者ヨハネの宣教のおかげで悔い改めた人々について、ファリセイびとに向かってこう述べてています。「はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった（マタ 21：31-32）。」

悔い改めるのに遅すぎるということはない

悔い改めるのに遅すぎるということはなく、全く手に負えない悪人ですらも、人生の最終段階で悔い改めて、神からの赦しを得ることができます。義とされた犯罪人「善智なる盜賊、右盜（うとう）」の例がこれを示しています。この犯罪人はイエスとともに十字架に釘打たれ、自身の以前の生き方がいかに罪深いかを認識し、イエスに「あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください（ルカ 23：42）」と求めたのでした。イエスはこれに対して「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる（ルカ 23：43）」と答えたのです。

同時に、悔い改めをいつまでも先延ばしにしてはなりません。なぜなら、死が人を突然襲うこともあるからです。ピラトの命令で殺されたガリラヤ人に

ついでに質問に応じて、イエスは「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と述べています（ルカ 13 : 1-3）。

永遠における人の運命は、その人がこの地上でどう生きたか、神との関係をどう構築したかによって決まるのです。世俗の法体系では、犯罪に対して、それに対応した罰が必ず設けられていますが、神の下で働く法は異なったものです。ある人が心から罪を悔い、悪の道を離れ、善の道を歩み始める場合、神はその人を罰から解放するのです。

6. 家族観

結婚と離婚についてのキリストの教え

イエスは山上垂訓でこう述べています。「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。不法な

結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる（マタイ 5 : 27-32）。」

ここで救世主は、第一に、肉体的な罪や貞操義務違反の原因となりうるものを述べています。これらの原因は、人の心、みだらな思いで他人の妻を見ることができてしまう、その腹黒い視線に根付いています。主は、第二に、相手方による貞操義務違反による場合のみを除いて、**離婚に徹底的に反対**しています。

あるときファリサイびとたちがイエスへと近づき、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と質問しました。イエスは人の創造についての聖書のエピソードに言及して「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とお造りになった」と応じ、「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である（創 2 : 24 参照）。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」と創世記を引用しています。ファリサイびとはあきらめず、続けて「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか（申 24 : 1 参照）」と質問しました。イエスは「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。言うておくが、不法な結婚でもな

いのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる」と応じたのでした（マタ 19：3-9）。

救世主の弟子たちにすらこのやり方はあまりにも厳しい者に思えたのでした（マタ 19：10）。しかし教会は、結婚についてのキリストの教えを、彼が与えた通りの形で護っています。教会法の中では、**婚姻関係が唯一であり破棄できないもの**だという理解が出发点となっています。離婚が許されるのは、救世主の示した理由、そしてその他、配偶者の一方あるいは両方にとって婚姻関係を続けることを不可能とする理由によってのみです¹⁰⁴。

二度目、三度目の結婚は、相手方配偶者の死去、またはその他、教会の規則によって留保されている特殊な状況¹⁰⁵でのみ許されます。さらに、神品に対しては、いかなる状況下でも再度の結婚は許されません。

¹⁰⁴ 『ロシア正教会の社会構想の基本』10章3項によれば、離婚の原因と認められるものとして、相手方配偶者による姦通および他者との婚姻の他に以下のものが挙げられています。すなわち、配偶者が正教から背教した場合、本性に反する罪があった場合、婚姻以前に発現し、または意図的な自切によって結婚生活が不可能となった場合、長期にわたる失踪の場合、全ての権利の喪失を伴う刑罰に処せられた場合、強度の精神障害にかかり回復の見込みがない場合、配偶者から悪意で遺棄された場合、医学的に証明されたアルコール依存症や薬物依存症、夫の同意なしに妻が堕胎を行った場合などです。

¹⁰⁵ 『ロシア正教会の社会構想の基本』10章3項によれば、「離婚は、教会によって離婚自由として認められた行動が配偶者によって行われた場合にのみ、非常手段として実行され得る」と強調されています。とはいえ「もし結婚の破綻がすでに既成の事実である場合、特に配偶者同士が別居しており、家族の復興が不可能であると認められる場合、牧会的酌量により、教会としても離婚を許すことがある。教会は再婚を奨励しているわけではない。とはいえ、教会法によれば、教会法に則った離婚の後でも、有責ではない側の配偶者には、二度目の結婚が許される。最初の結婚の離婚に対する有責配偶者については二度目の結婚が許されるのは、この人が、悔い改め、教会法に則った懲罰（エピティミヤ）を実行した場合のみである。三度目の結婚が許される例外的な状況においては、カイサリアのバシレイオスの規則によれば、懲罰（エピティミヤ）の期間は延長される。」懲罰（エピティミヤ）とは、それぞれの具体的な場合に、教会の権威によって定められる、特定の罰の形を意味します。

「小さな教会」である家族

キリスト教の伝統において家族は、「小さな教会」だと受け取られています。この理解は、当時のキリスト教家族を指して「家の教会（ロマ 16：4、一コリ 16：19、コロ 4：15）」と呼んだ、使徒パウロの教えに基づいています。あらゆる世代のキリスト教徒は、その家族の中で、自分たちが教会で聖書を通じて学ぶ愛の理想を実現する使命を帯びています。夫婦は、家族生活を、福音書の道徳的教えに堅く基づいて作るという使命を帯びています。

キリスト教における婚姻関係とは、「主における」結びつきです。使徒パウロは「主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。それは女が男から出たように、男も女から生まれ、また、すべてのものが神から出ているからです（一コリ 11：11-12）」と述べています。

あらゆる家族にとって、神の特別な賜物は**子ども**です。聖詠には「見よ、子らは主からいただく嗣業。

胎の実りは報い（詩篇 127 [126 聖詠] 3）」とあります。救世主は出産の喜びについてこう述べています。「女は子供を産むとき、苦しむものだ。[.....] しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない（ヨハ 16：21）。」

キリスト教道徳は、あらゆる人命の絶対的な価値を主張しており、堕胎を厳重に禁止しています。これを殺人と同一視しているからです。この世に生まれ

出ることは、あらゆる人の、奪われることない権利です。いかなる人からであってもこの権利を奪うということは、教会の見方によれば重い罪であり、それに参加した全ての人々が、神の前に責任を負うことになります¹⁰⁶。

避妊に用いられる手段の内、堕胎を促す働きを有するものの使用も、重い罪となります¹⁰⁷。

正教の伝統において、婚姻として認められるのは、互いの愛に基づき、子どもを産み育てることを重要な目的の一つとする、男性と女性の間関係のみです。現代社会で広がる「代替的」な同棲関係は婚姻として認められず、教会の祝福は与えられません。

7. 子どもの養育

古代世界において子どもは、社会の半人前のメンバーだと考えられていました。キリスト教は、子どもに対する態度を、根本的に修正しました。文明社会で確立された、子どもの尊厳と権利についての現代的な理解は、キリスト教的理解をその基盤としています。

¹⁰⁶ 堕胎に対する教会の態度については、『ロシア正教会の社会構想の基本』12章2項参照。

¹⁰⁷ 『ロシア正教会の社会構想の基本』12章3項にはこう述べられています。「避妊に用いられる薬品の一部は、胎児発生の最初期段階で人為的にこれを断ち切るものであり、事実上堕胎を促す効果を有している。したがってその使用については、堕胎に関するのと同じ判断が適用される。受精の瞬間にすでに発生した命を断ち切るものではない[避妊の]方策については、これは堕胎とは全く異なるものである。堕胎を促すものではない避妊の方策についての態度を定めるに際し、キリスト教徒夫婦は、神に規定された婚姻関係の主たる目的の一つは、人類の継続であることを覚えておかねばならない。利己的な動機によって、子どもの誕生を意図的に拒否することは、結婚の意義を失わせる、明白な罪である。」

キリストと子ども

イエス・キリストは、子どもに対して特別に心を配り、注意を払っていました。「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである（マタ 18：10）。」

福音書では、イエスの一生からの次のようなエピソードが述べられています。「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。』そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された（マコ 10：13-16）。」

他のエピソードも同様に特徴的なものです。「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、『いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか』と言った。そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。『はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。しかし、わたしを信じるこれ

らの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである。世は人をつまずかせるから不幸だ。つまずきは避けられない。だが、つまずきをもたらす者は不幸である（マタ 18:1-7）。』

これらの言葉において主は、ある人の天の国における重要性の評価基準が、地上における評価基準とは正反対だということを示しています。例として子どもが用いられています。大人よりも子どもの方が、山上垂訓で表されている理想に近いのです。キリスト教徒の使命は、小さい子どもが親を頼むのと同様に、自身の父である神を頼むことです。

救世主はまた、子どもの養育に対する大人の責任を思い起こさせています。子どもを墮落させることは、極めて重い罪です。「つまずきは避けられ」ませんが、それは、これが神の意志だからではなく、善と悪とがぴったりと絡み合っているこの世においては、つまずきは毒麦と同様、麦と同じ畑に生えているからです（マタ 13:24-30）。そうはいつても、つまずきを蒔く人は、それに対して個人的な責任を負っています。この責任は、罪深い、または墮落した行為、あるいは罪の宣伝の様々な形態の対象が子どもである場合、より深刻なものとなります。

子どものキリスト教的養育

キリスト教の伝統において子どもの養育は、子どもたちも、大人に負けず劣らず、神の恩寵を必要としているという確信に基づいています。そして、子ど

もの霊的発達、肉体的発達に劣らず重要です。これが、キリスト教徒の両親が、幼児の頃からすでに、子どもを教会に親しませる理由です。

幼児に洗礼を受けた後すぐにしなくてはならないのは、彼に聖体を受けることです。聖体を受けることができるのは、分別のある年頃を迎えた子どもだけだ、と考えるキリスト教教派と異なり、正教会は、乳児にも聖体を受けることを許します。子どもが周囲の環境をまだ理性的に理解できなくても、救いの恩寵が子どもに働くと思っているからです。始めて聖体を受けた後は、定期的に、できれば少なくとも毎週日曜日、子どもに聖体を受けるべきです。聖体を受けることが、子どもにとって、稀にしかない出来事とならないためです¹⁰⁸。

子どもが分別のある年頃に近づくにしたがって、一番単純なことから、正教の信仰の基礎を説明しなければなりません。子どもが乳児の頃から、神が天にあって、神は彼を見て聞いており、さらには愛しているということを教えなければなりません。子どもが幼児の頃から、イエス・キリスト、生神女、最も有名な聖人のイコンを分かるように教え、彼らが何者なのかを教えなければなりません。福音書は、やさしく書き直したものでも構わないので、子どもが小さい頃から読み聞かせなければなりません。救世主の言葉が、子どもの意識に

¹⁰⁸ 定期的に聖体を受けている子どもは、一般に、聖堂の雰囲気や機密自体に対して、肯定的に反応します。反対に、たまにしか聖体を受けていない子供にとっては、聖体を受けるのは、ストレスと隣り合わせです。聖堂や祈りの雰囲気が子どもを怖がらせるのではなく、子どもにとって親しみのある、慣れたものとなるようにすることが重要です。

深くしみ込むようにするためです。聖人伝や他のキリスト教書籍を読むのも有益です。

信仰において養育され、教会を自身の霊的な家だと受けとめる子どもは、不信仰や不品行からの全人生にわたる予防接種を受けることになります。極めて模範的なキリスト教的教育もちろん、一定の年齢を迎えた人が、教会から離れないという完全な保証とはなりません。とはいえこのような場合ですらも、子ども時代に埋め込まれた、信仰の堅い土台は、その人の心の奥底に守られ続けるのです。その人が、福音書のたとえ話にある放蕩息子（ルカ 15：11-24）のように、自身の天の父を思いだし、その下へと戻ることを願うまで、これは続くのです。

キリスト教徒の家族において、子どもの養育は、暴行や強制ではなく、**愛**の上に成り立たなければなりません。自由に独力で善を選び、悪を拒否するように子どもに教えなければなりません。広く見られる間違いは、親への不服従やその他のあやまちを罰する神というイメージを、子どもに押しつけることです。神を愛し、キリストと教会を愛するように子どもに教える方がずっと大切なのです。これを達成するためには、家族における養育システムが、愛に基づいていることが不可欠です。ただ血の繋がりだけに基づく愛ではなく、神の愛に基づいた愛こそが、家族のメンバー全員を、一つの「家の教会」へとしっかりと結びつけるのです。

使徒パウロの書簡には、家族生活や、親と子どもとの間の関係に関するシンプルなアドバイスが含まれています。「子供たち、どんなことについても両親に従いなさい。それは主に喜ばれることです（コロ 3：20）。」「子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。『父と母を敬いなさい。』これは約束を伴う最初の掟です。『そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる』という約束です。父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ論されるように、育てなさい（エフェ 6：1-4）。」

これらのアドバイスは、何世紀にもわたって様々な民族が行っていた養育の方法を反映しています。しかし現代ではこれに対して、子どもが、あらゆる外的要因から自由で独立していることが最も大切だとする社会においては、異議が唱えられています。宗教はよく、特定の世界観や道徳観を子どもに押しつける手段の一つとしてのみ捉えられます。ある人々は、教会が子どもを養育することに対して、これが子どもの自由を侵害するものだと、意義を唱えています。

自由のキリスト教的理解

しかしキリスト教において、自由は、最も重要な概念の一つです。使徒パウロはこう述べています。「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によつ

て互いに仕えなさい（ガラ 5：13）。」キリスト教的理解における自由とは、道徳規範からの解放ではなく、反対に、善に根付いていること、真理を知ることです。キリストは「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする（ヨハ 8：32）」と語っています。真理を知ること、神と教会に親しむことは、ただ子どもの自由を侵害しないだけではありません。これは反対に、子どもに霊的な自由を与えるのです。この霊的自由は、子ども時代、青年時代に、外部の有害な影響に抵抗するのを助け、善の道から離れるのを許さない、内的な軸を護るのを助けるのです。

8. 教会における女性

キリスト教の道徳的教えは、多くの側面において、旧約の道徳、さらには古代世界に広がっていた道徳全般と比べて、根本的な新機軸を有していました。その一つの例は、**女性に対するキリスト教の態度**です。

「教会は社会や家族における女性の役割を低く見て、時代遅れの家父長制維持を主張している」という見方が広くあります。教会に対するこのような非難は、不当なものです。

まさにキリスト教の伝統の中で、女性と男性とは最初から、相当な程度に同等の役割を担ってきたのです。使徒パウロはこう述べています。「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も

女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです（ガラ 3：27-28）。」

キリストと女性

男性の弟子たちとともに、イエスの後には女性の弟子たちもつき従っており、その名前も分かっています。「すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた（ルカ 8：1-3）。」

福音書中には、女性について述べられている部分が顕著に見られます。イエスが、サマリアの女性（ヨハ 4：7-26）、マルタとマリア（ルカ 10：38-43、ヨハ 11：20-32）、罪深い女性（ルカ 7：48）、姦通の現場で捕らえられた女性（ヨハ 8：10-11）、出血の続いていた女性（マタ 9：20-22）、カナンの女性（マタ 15：25-28）、マグダラのマリア（ヨハ 20：14-17）、他の女性たち（マタ 28：9-10）と会話している様子を見ることができます。

イエスにつき従っていた女性たちの姿は、四福音書全てにおいて、キリストの受難と死、そしてその復活についての叙述の中で、重要な役割を果たしてい

ます。イエスが捕縛されたとき、男性の弟子たちは「イエスを見捨てて逃げてしま（マタ 26：56）」いましたが、女性たちはイエスにつき従い続けたのでした。女性たちはイエスの十字架の下に立ち（マタ 27：55、マコ 15：40-41）、週の初めの日の明け方にイエスの墓へと、香油を塗るためにやってきて、この女性たちこそが、復活したイエスを最初に見たのでした（マタ 28：1-10、マコ 16：9-11、ルカ 24：1-10、ヨハ 20：1-18）。女性たちが、男性の弟子たちに、キリストが復活したことを知らせたのでした。

キリスト復活の後、十一人の弟子たちは「皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈ってい（使 1：14）」ました。キリストの死と復活とが、イエスの一生の間彼と結びついていた人々を、一つの共同体へと合同させたのでした（使 1：16）。この共同体のメンバーとなったのは、使徒たち、イエスの母を含め彼の親族、そしてガリラヤですでにイエスに奉仕していた、あの「婦人たち」だったのです。

キリストの使徒は全員が男性でしたが、教会の歴史の中には、マグダラのマリア、ジョージアの光照者聖ニノ、義徳大公妃聖オリガなど「亜使徒」として列聖された女性がいます。教会の神品の使徒継承は、何世紀にもわたって男性によって伝えられてきたもので、神品職は男性の務めですが、これは女性の役割を軽視するものでは全くありません。問題となっているのは、権利の違いではなく、召命の違いなのです。

教会における女性の務め

使徒パウロは、こう述べています。「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。」続けて、教会においては、全ての人が同じ召命を有しているわけではない、と述べています。「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。」さらに「皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか」とパウロは問いかけています（一コリ 12 : 4-7、28-30）。

女性の召命は、教会の体のあり方が基づいている召命の内でも、特別な位置を占めています。女性は、主教や司祭にはなりませんが、[女子]修道院の院長（イグーメニヤ）、聖歌隊の指揮者、神学の教授になったり、教会の指導に関わる役職についたりします。

女性の特別な召命としての母性

教会の教えによれば、家族におけるのと同様、男性と女性が有しているのは、異なる権利ではなく、**異なる召命**です。「子を産むことによって救われ（一テモ 2：15）」と述べてあるのは、女性についてのみです。子どもの出産と養育は、女性の特別な召命です。当然のことながら、これには男性も参加するわけですが、女性には特別な役目があります。母親になることができるのは女性だけであって、家族の中で、この召命を他の何かで代替することはできません。父親にも、何にも代えがたい召命があります。

女性に対する教会の態度については、教会が、生神女をどれほど高く評価しているか、ということから判断できます。至聖なる生神女は、キリストの母であり、教会の母です。生神女という人において、教会は母性を栄光しています。これは、女性固有の財産であり、優越性なのです。

母マリアの頬に自身の頬を寄せる幼児イエスを抱く彼女の聖像（イコン）こそ、正教会がキリスト教徒に勧めている理想です。正教会のあらゆる聖堂に、無数の図案でみられるこの聖像（イコン）は、極めて大きな霊的魅力と、道德的な力とを有しています。教会が存在している限り、この聖像（イコン）は、女性に、その地上の生活における主たる召命としての、**母性と子どもの養育**を思い起こさせることになります¹⁰⁹。

¹⁰⁹ 旧約聖書においては、子どものないことは「人々の間 [.....] の恥（ルカ 1：25）」だと捉えられていました。夫婦に子どもがないのは、神が、彼らの罪に対する罰として子孫を与えなかったのだ、罪深い人々なのだと考えられていました。キリスト教においては、子どもがないことは、神からの罰だとは

9. キリスト教徒の生活は、霊的献身の道

救世主は、山上垂訓において、弟子たちにこう教えています。「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ（マタ 6：19-21）。」このようにしてイエスは、物質的な富や社会における地位、その他地上の幸福に縛られるのではなく、常に天の国を探すように、と教えているのです。

救世主は述べています。「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない（マタ 6：24）。」地上の幸福を追い求めること、熱にうかされたように富を追い求めることは、神への務めとは相容れないものです。価値体系の頂点にあるべきなのは、神です。他のあらゆる幸福は、二番目以降の位置にしかありえないのです。

イエスは、地上の心配ごとにひたらないように、と弟子たちに呼びかけ、彼らに神の摂理について思い起こさせています。「空の鳥をよく見なさい。種も

掬えられませんが、夫婦のどちらか、あるいは両方が肉体的に子どもを作れないことは、離婚要因とはなりません。教会は、子どものない夫婦に対して、養子を育てるようにと呼びかけています。

蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。[.....]なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。[.....] だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる（マタ 6 : 26-33）。」

これらの言葉で救世主は、働いたり、自身やその子どもたちを養うために心を配ったりするのを禁じているわけではありません。イエスは、用事の奴隷となること、用事を目的そのものに变化させてしまうことについて警告しているのです。霊的な分野に志向することなしに、無我夢中で、自分の力と健康の全てを地上の用事にささげる人という理想は、キリスト教とは無縁のものです。キリスト教が描いている理想は、異なるものです。この理想とはすなわち、浮世の気苦労や、あまりにも多い気づかいに呑み込まれずに地上に生き、「神の国と神の義」を求め、自身の天の父を覚えていて、自身の力よりも神の摂理を当てにする人です。

イエスは教えています。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない（マタ 7：13-14）。」イエスはこうも語っています。「もし片方の手か足があなたをつまづかせるなら、それを切って捨ててしまいなさい。両手両足がそろったまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になっても命にあずかる方がよい。もし片方の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。両方の目がそろったまま火の地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても命にあずかる方がよい（マタ 18：8-9）。」これらの比喻は、キリスト教徒が、どのような容赦なさや断固とした態度で、自身の中の不道德な傾向を根絶しなければならぬのか、ということを示すために用いられています。

キリスト教徒の生活は、霊的献身と戦いの道です。しかし人は、この戦いにおいて一人ぼっちではありません。人が、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる（マタ 7：7-8）」という神の約束の言葉を忘れずに、神の助けを求めれば、神自身が、誘惑やつまづきを克服し、自身の内にある不道德を根絶し、善行の道を行くように人を助けるのです。

課題

五章から七章（山上垂訓）に特に注意を払って、マタイの福音書を読んでください。自分自身の生き方と、キリストの命じた生き方とを比べてみてください。自分に「キリストの命じたように生きたいだろうか」と聞いてみてください。もしそうならば、あなたは正しい道に立っています。

第三部 教会と奉神礼

1. 生神女と聖人
2. 祈り
3. 教会生活
4. 正教会の聖堂
5. イコンと十字架
6. 教会祭日
7. 週と日の奉神礼サイクル
8. 聖体機密
9. その他の機密と式

カテヒジスの第一部では、教会には二つの次元があるということが語られました¹¹⁰。つまり、地上の次元と天上の次元です。それらの間には、人間における心と肉体の間のように、深い内的な統一が存在しています。天上の勝利の教会は、地上の移ろいゆく教会を通して開かれます。地上における教会の生活は、天上での教会の生活の反映であり、続きなのです。天の国は、教会のおかげで地上の人間にとって現実のものとなります。

さて、天上の教会は誰からなり、地上の教会はいかにして作り上げられたのかについて話しましょう。キリスト教生活の道を歩み出すすべての人が知っておくべき最低限のことを説明します。

1. 生神女と聖人

¹¹⁰ ? 頁 (原文 89 頁) 参照。

キリスト教徒は、神だけでなく、天使や聖人——単に神を喜ばせただけでなく、聖性と呼ばれる特別な靈的完成を成し遂げた人々——にも崇敬を表します。

生神女

諸聖人の筆頭に立つのは、至聖なる生神女です。教会は生神女を、「ヘルヴィム（ケルビム）より尊く、セラフィムに並びなく栄える」、つまり己の潔さと聖性において天使をもはるかに凌ぐものとして崇敬します。

人類は、神の母において、人々を救おうとする神へと向かいました。神は人々に御子を賜い、人類は神に聖性と完全さの最も偉大な手本を捧げたのです。このことは、あるキリストの降誕祭の歌で語られています。「キリストよ、あなたが私たちのために地上に人として現れてくださったことに対して、私たちはあなたへ何を捧げましょうか。あなたに造られたものは皆あなたに何かを捧げます。天使は歌を、天は星を、博士は贈り物を、地は洞穴を、野は飼料の葉桶を、そして私たちは童貞女マリアを¹¹¹。」

¹¹¹ 「ハリストスよ、爾が我等の為に人として地に現れしに因りて、我等何を以て爾に奉らん、蓋爾が造りし物は各（おのおの）爾に感謝を奉る、天使は歌を、天は星を、博士は礼物を、**牧者は奇跡を**、地は洞（ほら）を、野は芻槽（かいばぶね）を、我等に於ては母、童貞女を奉る。（聖事經 147 頁 Рождество Христово. Стихиры на Господи воззвах）」 «Пастырие чудо» はあえて書いていないのか？ <http://days.pravoslavie.ru/rubrics/canon242.htm>

多くの教会祭日が彼女に捧げられ、数多のイコンが彼女を讃えて書かれています。至聖なる生神女は、人類のために、ご自分の神の子へ執り成しをしました。奉神礼のたびに彼女への祈りが捧げられ、キリスト教徒は、彼女がこの祈りを聞いていて、それに応えてくださると信じています。

天使

祈りのなかで、キリスト教徒は天使¹¹²にも目を向けています。教会の教えによると、天使の世界は、大天使、セラフィムやヘルヴィムを含む様々な階級に分けられています。ガブリエルやミハイルなど、いくつかの天使は、聖書に言及されているおかげで名が知られています。一人ひとりに、生まれたその時から守護天使がついていて、神への道においてその人を助け、悪から守ります。

聖人

キリスト教徒は聖人にも祈りを捧げます。聖性はすべてのキリスト教徒に求められますが、そこへと到達できるのはごくわずかです。なぜなら、「招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」（マタ 22:14）からです。ある人がイエスに「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と尋ねたところ、イエスは「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ」（ルカ 13:23-24）と答えました。

¹¹² 天使については、? 頁（原文 28-29 頁）でも語られている。

聖人とは、永遠の生へつながる「狭い」道を選び、その道を最後まで歩み、数多のキリスト教徒の模範となった人々のことです。彼らは、己の人生と偉業によって、聖性とは到達不可能な理想ではなく、すべての信者が目指すべき規範なのだとすることを証明しました。しかし聖人は己の偉業を一人で成し遂げたわけではありません。神自身が彼らを助けたのです。「だれが救われるのだろうか」という問いに、主は「人間にはできないことも、神にはできる」（ルカ 18:26-27）と答えます。ときどき、キリスト教による精神的・道徳的な要求は、人間の力を超えているように思えることがあります。しかし聖人は、そうではないということを、そして人間がもし自分の力だけを頼りにせず、神を信じ、神の助けを待ち望むなら、「信じる者には何でもできる」（マコ 9:23）のだということを証明しました。

教会暦では、聖人は、彼らの生きた時代や、成した偉業、有していた聖職位に依拠して、いくつかのまとまり（階級・カテゴリー）に分けられています。旧約時代の聖人〔旧約時代に神の民から出た聖人〕と、新約聖書の時代に活躍した〔輝いた〕聖人は区別されています。

旧約の聖人に分類されるのは、まず第一に、聖書に登場するアブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデ王などの**義人**です。キリスト教教会では、聖書で語られているエリヤとエリシャ、またその人の本が聖書の一部になっているイザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、および十二「小預言者」のよう

な**預言者**も崇敬¹¹³されています。旧約の義人の列を締めくくるのは、新約の入り口に立ち、キリスト教の聖人リストの幕開けを飾る洗礼者ヨハネです（彼はときに、最後の預言者であり、最初のキリスト教の致命者（殉教者）であるといわれます。）

教会は、キリスト自身によって奉仕のために選ばれた、キリストの直接の弟子である**使徒**を崇敬します。福音書によると、イエスは十二使徒を選び（マタイ 10:1-5, マコ 3:13-19, ルカ 6:13-16）その後ほかに七十門徒¹¹⁴を選びました（ルカ 10:1）。十二使徒のうち一人は裏切り者となり、キリスト復活ののち、彼の代わりに別の者が選ばれました（使 1:15-26）。さらに主自身が、これまで教会の迫害者であったパウロを奇跡的な方法で召命しました（使 9:1-20）。ペトロとパウロは「首座使徒」として崇敬され、他の十二使徒や七十門徒も教会全体の崇敬を受けています。教会では、とくに四人の福音記者、つまり十二使徒のマタイ、ヨハネと、七十門徒のマルコ、ルカが賛美されています。

致命者への崇敬も、教会では古代から知られています。ペトロとパウロを含む多くの使徒は、殉教によってその生涯を終えました。キリスト教教会史における最初の三世紀は、殉教が大いなる偉業であった迫害の時代でした。教会に対する迫害は定期的に繰り返され、二十世紀には、きわめて苛酷な試練と苦悩

¹¹³ icons are only symbols, Orthodox do not worship them, but reverence or venerate them. John of Damascus carefully distinguished between the relative honor or veneration shown to material symbols, and the worship due to God alone.

¹¹⁴ 訳者注：「七十門徒」（正教会訳）、あるいは「七十二人」（新共同訳）と数えられている。

のなかで己のキリストへの忠実さを証明した数多くの致命者が世に現れました。キリスト教徒の名前として人気のある凱旋者ゲオルギオスやテサロニケのデメトリオス、テオドロス・ティロン¹¹⁵も致命者に属しています。

キリストのために苦難を受けて勇敢に耐えたが、生き残って人生を全うした聖人は**表信者**と呼ばれます。

主教位を有していた聖人は**成聖者**と呼ばれます。ここに属しているのは、四世紀に生きたミラのニコラオス、または奇蹟者ニコライ（ロシアの伝統では「聖者〔神の僕？〕ニコライ」として有名）や、彼の同時代人である聖大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金口イオアン、そしてその後の時代の多くの成聖者です。致命者として人生を終えた主教や司祭は神品致命者と呼ばれます。

修道士であり、禁欲生活や洞察力、奇跡の業、その他の霊的な才によって称賛を受けた聖人は**克肖者**と呼ばれます。四世紀に生き、修道制を創始したアントーニイ、パホーミイ、マカーリイ、大イラリオン、またロシアの修道制の創始者である洞窟修道院のアントーニイとフェオドーシイ（十一世紀）、そしてラドネジのセルギイやサーロフのセラフィム、アトスのシルアンを含む、さらに後の時代の聖人たちも克肖者に属しています。致命者として人生を終えた克肖者は克肖致命者と呼ばれます。

¹¹⁵ 正教会ではそれぞれ、聖大致命者凱旋者ゲオルギイ、聖大致命者潤膏者ディミトリイ、聖大致命者フェオドル・ティロンと呼ばれる。これらの名を現代ロシア語にすると、ユーリイ、ドミートリイ、フョードルとなる。

人々から侮辱や罵言を受けるために狂気の仮面を被るという特別な偉業をなした聖人は、**佯狂者**または**至福者**と呼ばれます。この仮面のむこうには、しばしば預言の賜物を含む、偉大な靈的賜物が秘められています。最も有名なビザンチンの佯狂者はアンドレイで、彼の名は生神女庇護祭の確立に関わっています。最も有名なロシアの佯狂者は至福者ワシリイで、モスクワの赤の広場にある有名な聖堂は彼の名にちなんでいます。ペテルブルクの至福者クセーニヤも大きな崇敬を受けています。

聖人には、**王や王妃、大公や公妃**も多く含まれています。彼らのうち、ある人々は個人の聖性によって、また別の人々は教会に施した善行によって誉め讃えられています。例えばコンスタンティヌス大帝（四世紀）は、彼のおかげでキリスト教教会が三世紀にわたる迫害の後に自由を得たとして賛美されています。キエフのウラジーミル聖公（十～十一世紀）はルーシの洗礼者として崇敬されています。ここで触れた二人の聖人は亜使徒として賛美されています。教会はこのようにして彼らの偉業を使徒の働きになぞらえました。

キリストのために致命者となったのではないが、キリストのように苦難と死を耐え抜いた聖人を**受難者**と呼ぶことになっています。受難者として特に崇敬されているのは、聖公ボリスとグレブ（十一世紀）です。一九一八年に銃殺された最後のロシア皇帝ニコライ二世とその妻子は「皇帝受難者」と呼ばれます。

聖人は天の国にいて、神とともに永遠の至福のなかにいます。しかし彼らは地上の兄弟姉妹のことを忘れずにいて、彼らの祈りを聞き、助けにきて、神の前で彼らについて執り成します。

聖人の不朽体

聖人の遺体を不朽体といいます。聖人の体は何年も、あるいは何世紀もの間不朽のままであることは稀ではありません（とはいえ、聖性の必然的な結果が不朽ではないのと同様、不朽であることは決して聖性に必須の特徴ではありません。）

聖人の不朽体は、その保存状態とは無関係に聖なるものとして崇敬されています。信者は、聖人に助けと病の治癒を求めてその不朽体に口づけします。このような崇敬の根底にあるのは、聖人の受けた恵みが、彼らの霊だけでなく体も新しくしたことへの信仰です。

多くの聖人の不朽体は完全に保存されて、その聖人が偉業を果たした場所にある聖堂に眠っています。不朽体のなかには、別の場所や聖堂に譲渡するために一部が分けて置かれているものもあります。

守護聖人

洗礼を受けると、人はなんらかの聖人の名前を得ます。原則としてこの名前は戸籍名と一致していますが、場合によっては異なってもかまいません。

その名が洗礼機密で人に与えられた聖人は彼の守護聖人です。この聖人を、神自身によって各人に立てられた守護天使と混同してはいけません。この守護聖人の記憶日は、俗語ではときどき「守護天使の日」と呼ばれますが、教会の言葉では「聖名日」といいます（名の日（именины）という言葉はここからきています。）

正教会における聖人への崇敬

神とは仲介者なしでやりとりできるにもかかわらず、正教会は聖人を人と神の仲介者として受容しているときどき非難されることがあります。これはもちろん、不当で根拠のない非難です。教会は神との交わりを直接経験することを認めています。それどころか、教会はそれをあらゆるキリスト教徒の宗教生活の根幹だとみなしています。しかし教会は、聖人への崇敬がなんらかの方法で人と神の祈りによる直接の交わりを妨げるものだとは考えていません。正教徒によって聖堂や家で捧げられる祈りの基本的な部分は神へ向けたものですが、その際キリスト教徒は生神女や聖人にも祈っています。

正教徒にとって、聖人とは真のキリスト教の生きた体現者であり、彼らの人生は高い道徳的模範となっています。それだけでなく、教会は聖人が死後も教会のなかで生き続けていると信じていて、まさに彼らが生きた存在であるということへの信仰が、彼らに向けた祈りの呼びかけの根拠となっています。

2. 祈り

祈りとは、なによりもまず神とのコミュニケーションです。祈りは会話の形式をとっていて、言葉によって表現されます。

祈りは常に対話です。祈りのなかには、信者が神に向けた言葉だけでなく、神からの答えも含まれています。祈りとは、一方通行の道ではなく、人と神がお互いへと向かっていく動きなのです。

神を聴き、神を父だと感じ、神の存在を自分の生のなかで感じるこそが、祈りの真の目的です。祈りに対する神の返答は多様な形を取り得ますが、キリスト教徒の心からの誠実な祈りが返答なしに残されることは決してありません。

天主經

イエス・キリストは自分に従う者たちに、神を父と呼び、父に次のように祈ることを教えました。

天に在す我等の父よ。願は爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に与え給え、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え、我等を誘に導かず、なお我等を凶悪より救い給え。蓋国と権能と光荣は爾に世々に帰す。アミン。（ふりがなと仮名遣い要確認。どこから引用するか？）

この祈りは、キリスト教教会で天主經（主の祈り）と名づけられました。天主經はすべての主要な奉神礼で読まれ（あるいは歌われ）、またキリスト教徒は毎日家で祈るとき、天主經の言葉によって神に話しかけています。

祈りの最初の三つの請願では「爾」という代名詞が、次の三つでは「我等」という代名詞が基本となっています。私たちは父なる神に話しかけると、天主經のなかで、本来聖なるものである神の名が私たちのうちで聖とされ（つまり誉め讃えられ）、神の王国が私たちの人生の現実となり、神の御心が天使たちの世界で行われているように、私たちのもとでも行われますようにとお願いします。私達は日々必要な食料を神に求め、罪の赦し、誘惑と悪魔の力からの解放を神に願います。

正しく祈るには？

ときどき、「私は祈り方を知らないので祈りません」あるいは「教会スラヴ語を知らないので祈りません」という方がいます。実際には、神に祈るために、私たちが話し、考える言語以外の、なにか別の言語を知る必要はありません。聖堂では奉神礼のために特別な儀式言語が使われていますが、家での祈りにはそれはまったく必要ありません。私たちは、両親や子ども、親戚とコミュニケーションするのと同じように、神とコミュニケーションすることができます。最も重要なことは、私たちの祈りが誠実で、経験で、心からのものであるということです。

いつでも、どんな場所でも祈ることができます。通常の家での環境や聖堂では、キリスト教徒は立ち、イコンを見て、十字架の印とともに、つまり十字を切って祈ります。そのためには、祈る人は、右手の三本の指（親指、人差し指、中指）をひとつに合わせて、二本の指（薬指と小指）を手のひらの方に曲げて、右手で順に、額、胸、右肩、左肩に軽く触れます。しかし特別な状況下では、座ったまま（例：公共交通機関の中で）、あるいは横になったまま（例：病気で寝たきりの場合）であっても祈ることができます。その際、一般的には、祈りの外面的な身振りは控え、口を開かずに、頭と心をひとつにして内心で祈ります。

イエスの祈り

正教では、**イエスの祈り**が古代から伝統的に用いられています。イエスの祈りには、「主イエス・ハリストス、神の子よ、我、罪人を憐れみ給え」という完全形のほかに、たとえば「主イエス・ハリストス、神の子よ、我を憐れみ給え」、「神の子よ、我を憐れみ給え」といった省略版があります。これらの祈りや、あるいはさらに短い「主憐れめよ」（これは奉神礼でよく唱えられます）という祈りは、一人で唱えることができます。このような祈りを絶えず唱えることで、人は神のことを一瞬たりとも忘れずにいることができます。

使徒パウロは、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝なさい」（一テサ 5:16-18）と呼びかけています。この言葉のなかで、

第一に、キリスト教徒の生活は神の臨在を感じていつも喜びで満たされているものであると述べられています。第二には、キリスト教徒は、時おり祈るだけでなく、絶えず祈るよう呼びかけられています。まさにこの理想は、イエスの祈りの実践において具現化しました。第三に、キリスト教徒はすべてのことに対して、つまり成功や喜びだけでなく、神が人の信仰や忍耐を試すために与えた悲しみや苦しみに対しても神に感謝するよう呼びかけられています。

感謝の祈り、悔い改めの祈り、請願の祈り

祈りは、その内容によって、感謝や悔い改め、請願の祈りとなることがあります。

人はよく、神の助けなしには得られなかった成功を、自分の才能や努力によるものとみなします。しばしば人は、自分の人生の出来事の向こうに、絶えず自分を気にかけている神を見ません。神にその恩恵を感謝できること、私たちの人生における神のかかわりを見るのを学ぶことはとても大切です。

聖人によって作り上げられた多くの祈りは、悔い改めの性質を持っています。キリスト教徒は、毎日眠る前に過ぎ去った一日を思い起こし、犯したあやまちについて神に赦しを得ることが求められています。このあやまちは、最初のしかるべき機会に痛悔で告げる必要があります。

請願の祈りは、もっとも多様な内容をもちます。人は霊的生活や様々な種類の物質的な必要性において神の助けを求めることができます。きわめて些細

なお願いであっても、神に訴えることを遠慮する必要はありません。しかし、祈りを単になにか物質的に満たされるための手段だと考えてはいけません。祈りにおいては、神の臨在、神との交流という事実自体が重要なのです。

他者のための祈り

キリスト教徒は、自分についてだけでなく、自分の隣人、つまり両親や子ども、親戚、友人、同僚、上司、部下についても祈るよう呼びかけられています。教会史上、母の祈りが子どもを死から救ったり、妻が、医者からすでに死を宣告された重病の夫について神へ懇願し、願いが叶えられたりした事例はたくさんあります。親しい人々のための祈りは、彼らを助ける有効な手段であり、いかなる物的消費も不要で、ただ善良な、心からの好意のみが必要な善行の一つです。

イエス・キリストは、自分に従う者たちに、親しい人々のためだけでなく、自分を侮辱する者や迫害する者（マタ 5:43-44）のためにも祈るよう求めています。祈りは、人間の悪意や憎悪、敵意に対する普遍的な応答です。人はよく、悪によってのみ悪に勝つことができると誤ってしまいます。しかしキリストは、善によって悪に勝つという別の方法を教えました。祈りはこの勝利のための強力な手段です。なぜなら、人は敵のために祈ることで自分の心のなかから相手に対する敵意や憎しみを取り除くことができ、これが和解への道の重要な一歩となるからです。

キリスト教徒は生者のためだけでなく、死者のためにも祈ります。このような祈りは、なによりもまず、すでに別の世界に移り、その死後の運命が神によって決められている人にとって重要です。人はみな、血縁や愛、友情、他の多くの人々との職業上の交流といった絆によって地上に結び付けられています。私たちは、親しい人々を彼らが生きているときに思いやるように、彼らが私たちのもとを去るときにも思いやらなければいけません。

そのほかにも、死者のための祈りは、今まだ地上に残されている私たち自身にとっても重要です。この祈りは、私たちが親しい人の喪失を耐え、私たち自身がその人に続いて永遠へと移るときに完全に回復するその人とのつながりを失わないよう助けてくれます。

祈りは見せかけのものであってはならない

主イエス・キリストは自分の弟子たちに次のように言いました。「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをして

はならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」（マタ 6:5-8）

くどくどと祈らないようにという助言は、長く続けて祈ってはいけないという意味ではまったくありません。ときにはイエス自身が一晩中祈っていた（マタ 14:22-25、ルカ 6:12）ほか、初期のキリスト教の祈祷集会も夕方から朝まで続くことはめずらしくありませんでした（使 20:7-11）。救い主がここで言っているのは、祈りにおいては余計な言葉を避けること、つまり最も重要なことに集中するということです。

主は、祈りが偽善的で見せかけのものであってはならないということに注意を促すと同時に、神の全知、つまり神は私たちが求めることをすべて知っているということも教えています。

なぜ祈る必要があるのか？

もし神が、私たちが神に伝えたいことをすべて知っているとすれば、何のために祈るのでしょうか、とときどき聞かれることがあります。私たちは、神が知らないことを伝えるために祈るのではなく、私たちにとって重要で、気に病んでいることを神と分かち合うために祈るのです。そして神は私たちの願いをいつも聞いています。人生は、神の意志だけでつくられるのではなく、人間自身が神に望み、求めるものからもつくられます。つまるところ、人生とは人と神とが共同でつくりだす果実なのです。

キリスト教徒にとっての人生の目的は、その人の個人的な意志が神の意志と完全に一体化することです。それゆえに、「爾の旨が行われますように」という願いには、あらゆる祈りに共通する雰囲気反映されています。私たちは神に望むものすべてを求めることができますが、最終的には、神の意志に自分を委ねる必要があります。

まさにそれゆえに、人はときどき求めるものを神から受け取れないことがあります。もし私たちが祈っているのに求めるものを受け取れないなら、それは神が私たちの祈りを聞いていないのではなく、聞いているけれど別の判断を下しているということを意味しています。神への信頼は、まるで神が私たちに応えることを望んでいないかのように思われるときの神の沈黙などを私たちが耐え抜くのを助けてくれます。両親が、自分の子の頼みを聞いているけれどいつも頼みに応じるわけではないのと同じく、神も常に私たちの祈りを聞いていますが、いつも私たちが期待しているとおりに応えてくれるわけではありません。

神とのやりとりにおいて、私たちは思いがけない喜びにも失望にも備えなければなりません。しかしこの失望の原因は、神が私たちの願いを叶える能力がないからではなく、もし神がそれを叶えないのならば、それが神の聖なる意志であるということを私たちが理解したくないことによります。

3. 教会生活

「教会」という言葉は、一つの聖なる公なる使徒の教会という意味で使われる場合（この場合、ロシア語では大文字で書かれます）と、キリスト教聖堂の特定の建物という意味で使われる場合があります（この場合は小文字で書かれます）。

教会生活

人々が教会（聖堂）と関わるのは、子どもの洗礼や亡くなった親族の埋葬式、重病人のために感謝祈禱を頼むとき、試験前にろうそくを立てにくるときなど、特別な場合に限られていることがよくあります。これらはみな重要なことですが、教会生活への参加はこれだけに限られるべきではありません。

教会生活では、定期的に――少なくとも大祭と日曜日には、奉神礼と**聖なるキリストの機密である領聖**に参加することが前提とされています。正教徒の生活は、世俗の祝日や平日、個人生活、職業生活、家庭生活でのイベントのカレンダーだけでなく、教会暦にも従っています。正教徒にとって聖堂とは、単に通勤の道中でときどき立ち寄る場所や、特別な場合にのみ顔を出す場所なのではなく、神に会い、教会の他のメンバーと交流するために定期的に訪れる場所なのです。

神の聖堂への愛

詩編では、「ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り、主を仰ぎ望んで喜びを得、その宮で朝を迎えることを」**ロシア**

語と違いあり（詩編 27:4／聖詠 26:4）と語られています。この言葉には、神を愛し、神との交わりを切望する魂の感情が表現されています。

聖堂とは神の住まいであり、「主は聖なる宮にいます」（詩編 11:4／聖詠 10:4）。聖堂には、「決まりだから」「義務だから」行くものではありません。キリスト教徒の魂は、神の聖堂を求め、奉神礼と祈りを愛するのが自然な状態です。古代の聖詠作者が「主の家に行こう、と人々が言ったとき、わたしはうれしかった」（詩編 122:1／聖詠 121:1）と語ったように、キリスト教徒は、教会の奉事の開始を告げる鐘の音を聞いて喜び、聖堂へ行くために進んでいつもの仕事を手を止めます。

4. 正教会の聖堂

正教会の聖堂は、奉神礼が行われ、人々が祈りと機密を通して神と触れ合う場所です。

正教会の聖堂建築の特徴

聖堂には、木造や石造、その他の材質から造られたものがあります。見た目はそれぞれ大きく異なっているかもしれませんが、正教会のあらゆる製造建築には、十字架のついた、一つあるいは複数の丸屋根（クーポル）がついているという共通点があります。正教聖堂と礼拝用でない通常の建物は、ほとんどの場合見分けがつきます。鐘楼がさらに建てられている聖堂もあります。

ごく一部の例外を除いて、あらゆる正教聖堂は至聖所が東を向くよう建てられています。これには深い意味があります。東は、神学や奉神礼のテキストにおいて「儀の太陽」「天からの東」と呼ばれるキリストを象徴しているのです。

聖堂の内部は、ふつう至聖所、聖所、啓蒙所という三つの部分に分かれています。啓蒙所と聖所（聖堂のメインの部分）の境目は、建物の造りとして分かれていないこともあります。至聖所と聖堂のそれ以外の部分との境目は、至聖所の仕切りによって——大抵はイコノスタスの形で常に示されています。

イコノスタス（聖障）

イコノスタスとはイコンの描かれた壁のことです。イコノスタスには、一段のものと多段のものがあります。一段のイコノスタスは、横一列のイコンで構成されています。中央には王門が配置され、奉事が行われていないときは閉じていますが、奉神礼の決まった場面では開かれています。王門の右側にはイエス・キリストのイコンが、左側には生神女のイコンが配置されています。同じ列にはその聖堂が記念している聖人または祭日のイコンと、その聖堂にとってもっとも重要な他のイコンが配置されています。イコノスタスの下段には、王門のほかに北門（左）と南門（右）があります。これらの門は、奉神礼の際、至聖所に出入りするために用いられます。

イコノスタスが多段である場合、下から二段目の列（祭日列）には主要な教会祭日が、三列目（デイシス列）には救い主と生神女、前駆ヨハネ、使徒たちが、四列目（預言者列）には預言者たちが、五列目（先祖列）には旧約聖書の義人たちが描かれていることがあります。

イコノスタスに描かれるイコンのテーマは教会によってさまざまですが、イコノスタスはどこでも共通の意味、すなわち単に至聖所と聖堂の本体を分ける仕切りなのではなく、別の世界への窓という意味を有しています。救い主と生神女、聖人は、イコンを通して私たちを永遠の世界から見つめています。

至聖所とそこにあるもの

至聖所はまず第一に奉神礼に参加している聖務者（主教、司祭、輔祭）と堂務者（誦経者、副輔祭、堂役）のためのものです。祝福を受けた人のみ至聖所へ入ることができ、聖務者のみ宝座に触れ、その前に立つことができます。

至聖所の中心に置かれた机を宝座と呼びます。司祭は奉神礼のときに宝座の前に立ちます。宝座には聖祭品、つまり聖体機密のためのパンとぶどう酒が供えられています。宝座には、読み、そして信者が拝むために奉神礼の特別な場面で至聖所から運び出される福音書も置かれています。宝座には、主教の署名の入った特別な布であるアンティミンス（代案）も置かれています。（この署名は、聖堂が特定の教区に属していて、その聖堂の司祭が奉神礼を行うことを主教から祝福されていることの証です）。ロシア教会の習慣では、アンティ

ミンスには致命者や聖人の不朽体の小片が縫い込まれており、これは致命者の墓で聖体礼儀を行っていた古代の伝統を反映しています。この伝統は、宝座を成聖するとき、致命者や聖人の不朽体の小片が宝座自体へ収められるところにも反映されています。

至聖所の左側には、司祭が聖体機密のためにパンとぶどう酒を準備するときに用いる奉献台が置かれています。

宝座の向こうには、七つの灯明のついた燭台である七灯燭台が置かれています（宝座の上に置かれる場合もあります）。七灯燭台は、旧約聖書の幕屋（出25:31-37）とエルサレム神殿に置かれている祭具の一つを想起させます。

聖堂の主要部分

イコノスタスのまえには、奉神礼の際に聖務者が歩く壇であるソレヤ（高处）があります。ソレヤの中央部はアンボンと呼ばれ、司祭はそこから説教を行います。ソレヤの端に沿って聖歌隊席が設けられており、奉神礼の際にはそこに聖歌隊員が配置されます。

聖堂の壁は、旧約・新約聖書の聖史におけるさまざまな出来事や、聖人伝の場面、聖人の姿が描かれたフレスコ画で飾られていることがあります。フレスコ画のテーマは、通常、聖堂が記念している出来事や聖人に関係しています。フレスコ画の像は、イコノスタスと同じように列をなして配置されています。

聖堂には主たる至聖所のほか、横にも（副）至聖所が、中心の至聖所と横一直線上に配置されたり、聖堂中心部の内部に個別の部屋として設けられたりしている場合もあります。至聖所は副祭壇と呼ばれることもあります（主祭壇と副祭壇と呼ばれます）。

聖堂の建築と内部の装飾は、目に見える世界の向こうに存在する目に見えない世界を信者に想起させるためのものです。キリスト教建築や奉神礼の美学が形作られた時代には、多くの信者は文字が読めず、壁画やイコンは「文字の読めない人々のための福音書」として受け止められていました。司祭はさまざまな聖人や聖史の出来事について語りながら、壁画やイコンを指し示すことができたのです。今日では誰もが文字を読むことができるようになりましたが、聖堂の聖画はその意義を失っていません。

5. イコンと十字架

神は本質的に霊であり（ヨハ 4:24）目に見えませんが、しかし受肉——神が人間の肉体で世界に現れたことは、キリスト教史の重要な出来事となりました。受肉のおかげで「言は肉と」（ヨハ 1:14）なり、人々は神の子イエス・キリストの姿において、神秘的で目に見えない神の姿を目にしたのです。

イコンを描くうえでの理論と実践は、まさにこの真理のうえに成り立っています。目に見えない神を描くことはできませんが、目に見える姿で示されたものはすべて描くことができます。つまり、イエス・キリストとその人生の出

来事は描くことができるのです。神現祭のアイコンでは、聖神をイエスが水の中から出た際に、鳩の姿で人々に現れたように描くことができます。アイコンには生神女や聖人、聖史や教会史のさまざまな出来事を描くこともできます。

アイコンへの崇敬

正教会では、アイコンは特別な崇敬を受けています。アイコンへの崇敬は、単なる敬虔な伝統ではなく、教義です。アイコン崇敬に関する八世紀の宣言は、アイコン崇敬に対し聖像破壊論者が行った激しい迫害の結果です。教会は聖像破壊を異端と断罪し、アイコンを描き、崇敬するというはるか古代から教会でなされてきた経験を神学的に意味付けました。

アイコン崇敬は偶像崇拜とはなんの関係もなく、「あなたはいかなる像も造ってはならない」（出 20:4）というモーセの十戒の第二条には決して違反していません。古代の人々は動物や日用品、あるいは自然の力を神格化し、神のように崇拜するのが常であったため、この戒律は偽りの神への崇拜に向けられたものでした。キリスト教徒は一なる真実の神を崇拜します。

聖像破壊論者の非難に答えながら、教父たちは神のみに捧げられる崇拜と、生神女や聖人に捧げられる崇敬の違いを示しました。キリスト教徒は三位一体において賛美される唯一の神を崇拜します。彼らは聖人も崇敬しますが、神格化して神や偶像のように崇拜することはしません。

イコン崇敬は、信者がその前で祈り、叩拝し、接吻することで表されます。その際、崇敬のしぐさは絵の具の塗られた板ではなく、そこに描かれている人へと向けられています。教父の言葉にあるように、「像に与えられている誉れは原像から生じている」のです。

イコンの神学的、奉神礼学的、道徳的意味

イコンのスタイルはそれぞれ本質的に大きく異なっている場合がありますが、あらゆるイコンとそれ以外の絵画との違いは、「規範（カノン）」——何世紀ものあいだゆるぎなく保たれている規則の総体に従って描かれているところにあります。

イコンは肖像画ではなく、聖人の容貌を忠実に描写する必要はありません。私たちは、古代の聖人がどのような姿であったかを知りませんが、最近教会によって列聖された聖人の写真は存在します。聖人の写真をそのイコンと比較すると、聖人の容貌の最も基本的な特徴だけを保とうとするイコン画家の意図がはっきりとわかります。イコンを見てその聖人を識別することはできませんが、イコン上では別のかたちで、つまり容貌が洗練され、より高尚になり、イコンの様式を付与されて描かれています。

イコンには、変容し神格化された状態の人間が描かれています。「イコンとは、情念を焼き尽くしすべてを成聖する聖神の恩寵を実際に受け続けている人の像です。それゆえに、その人の肉体は、朽ち果てる運命にある通常の人間

の肉体とは本質的に別の形で描かれます。イコンは、冷静で、霊的経験に根ざし、あらゆる熱狂から完全に離れた、ある霊的現実を伝えるものです。もし恩寵が人間全体を照らすなら、その人の霊的—精神的—肉体的な身体全体は祈りによって包まれて神の光のなかにあり続け、生きたイコン、神の肖となったその人はイコンにおいて目に見える形で形象化されます。」

イコンはその目的からして儀式的で、聖堂という奉神礼空間と不可分の一部で、奉神礼に欠かすことのできない参加者です。どのイコンも通常、聖人の記憶日を含むなんらかの教会祭日と一致しています。

イコンは深い道徳的内容を有しています。たとえば至聖なる三位一体の像は、神の三位一体を象徴的に示しているほか、救い主自身から私たちに呼びかけられている一なるキリストの教会の一員としての霊的一致を思い出すために重要です。生神女就寝の像は、教会祭日に反映された具体的な歴史的出来事のほかに、キリスト教においては、死が、キリスト自身が、自分を信じ自分の戒めを実行した者たちを待っている永遠の生への移行として理解されていることを示しています。

キリストと生神女、天使、聖人のイコン

イエス・キリストのイコンにはさまざまはタイプがあります。たとえば「全能者キリスト Спас Вседержителя」のイコンでは、イエス・キリストは福音書を手に持った形で描かれています。「救い主インマヌエル Спас Эммануил」の

アイコンでは、イエス・キリストはちぢれ髪の若者として描かれています。「Спас в силах」のアイコンでは、イエス・キリストは天使たち——ケルビムとセラフィムに囲まれた宝座に座っています。

生神女のアイコンも、幼子イエスを伴ったものや一人のものなど、さまざまなタイプがあります。「умиление」のタイプのアイコンは、生神女は四分の三回転し（何度？）、幼子は自分の頬を母の頬へ擦り寄せた形で描かれています。

「Одигитрия」（導き手）のタイプのアイコンは、生神女も幼子もこちらに顔を向いて描かれており、幼子は手を上げ祝福を受けるジェスチャーをしています。「Знамение」のタイプのアイコンでは、生神女はこちらを向き、幼子は環の中に描かれています。生神女は、とくにそのアイコンが「деисусный чин」の一部である場合、幼子なしで描かれています。

それ以外にも、生神女のアイコンは発祥・崇敬の地によって異なっています。ウラジーミル、スモレンスク、コストロマ、イベリア（イヴィロン？）、その他多くの地のアイコンが知られています。これらはすべて独自の歴史を持ち、数多くの奇跡を起こしてきたことによって誉め讃えられています。

天使のアイコンはふつう翼を持った青年の形で描かれています。アイコン画家の伝統において、ケルビムは多くの目を持ち、セラフィムは六つの翼を持って描かれるなど、ある天使の位階は特別な姿で表されています。

教会によって讃えられている聖人もアイコンに描かれています。聖人を描くときには一定の決まりが存在します。たとえば、成聖者は主教の祭服を身につ

け、致命者は手に十字架を、克肖者は修道士の服を、預言者は手に巻物を持った姿で描かれています。一つのイコンのなかに複数の聖人が描かれることもあります。

奇跡を起こすイコンと呼ばれるものもあります。そのイコンによって多くの人々の病が癒えるなどの奇跡が起きたものをこう呼びます。戦いでの勝利や危険からの救いと関係するイコンもあります。奇跡を起こすイコンには、上述した生神女のイコン以外にも「すべての悲しむものの喜び **всех скорбящих радость**」や「**взыскание погибших**」、「思いがけぬ喜び **нечаянная радость**」などその他多くの生神女のイコンが含まれます。

十字架崇敬

正教会のなかで特別な位置を占めているのは、処刑道具から贖いの道具、死に対する勝利のしるしとなった十字架への崇敬です。十字架はキリスト教のもっとも大事なシンボルで、叩拝され、その前で祈られ、奇跡的な力があるとされています。

十字架崇敬には何世紀にもわたる神学的基礎があります。十字架はパウロ書簡ですでに何度も言及されています。使徒パウロは、磔にされた救い主の説教を、「滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力」である「十字架の言葉」と名づけています（一コリ 1:18）。パウロは自分についてこう書いています。「このわたしには、わたしたちの主イエス・

キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあつてはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです」(ガラ 6:14) 使徒パウロの言葉によると、キリストは「十字架を通して、両者を一つの体として神と(人を神と) 和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」(エフェ 2:16)。これらすべての例や他の多くの例では、使徒が十字架について己の書簡で語る時、十字架は磔刑——救い主の十字架上の死と同義になっています。

正教会では毎年、十字架叩拝のための日があります。それは十字架叩拝の週(大斎第三週)と主の十字架挙栄祭、その他十字架を記念したいくつかの祭日です。毎週金曜と受難週には、奉神礼でキリストの十字架を記念した祈りが読まれます。奉神礼のときに読まれる多くの祈りは、十字架につけられたイエスに対してだけでなく、主の十字架自体にも向けられています。

正教会は奉神礼や家での祈りのときに十字を画く(切る)という古代の慣習を守ってきました。この慣習は聖伝と不可分のものです。信者は祈るときや、あらゆることを始める前に十字を画きます。司祭の祝福は、自分のところへやってくる人に十字を画くことで表現されます。救い主の肉と血に変容したパンとぶどう酒、洗礼機密における水の成聖、その他のきわめて重要な聖務には、十字を画くことが欠かせません。

正教会の伝統では、十字架の表現にいくつかの種類があります。広く普及しているのは二本の棒からなるシンプルな四端十字架で、まさにこの十字架が

古代教会ではもっともよく使われていました。ロシアの伝統においては八端十字架が広まっています。八端十字架の上の棒は「ユダヤの王、ナザレのイエス」と書かれた板を、下の棒は救い主の足台を象徴しています。八端十字架は「ゴルゴタ」と呼ばれる二段の台の上に描かれていることもあります。ゴルゴタの上には（十字架を挟んで）左に救い主の脇腹を突いた槍が、右に救い主の口へと差し出された海綿のついた杖が配置されます。聖堂には、こうした十字架の象徴的な表現のほかに、「磔刑」と呼ばれる十字架上の救い主の像が置かれていることもよくあります。

正教徒はみな、服のしたに十字架をつけています。ロシア正教会の司祭はリヤサの上から胸掛け十字架をつけます。主教は奉神礼のとき、パナギアとともに十字架をつけます。十字架は教会や礼拝堂（часовня）の丸屋根や正教徒のお墓に立てられています。

大勢の人が埋葬されている場所を含め、開けた場所で、危機から救われたことを記憶し、あるいはその場所に建っていた聖堂を記憶し、これからその場所に聖堂が建つことを記念して、信者が叩拝するために設けられた十字架を、叩拝十字架（поклонный крест）といいます。

十字架への崇敬は、何世紀にもわたって正教会の生活に欠かせないものであり続けてきました。それは十字架につけられた救い主、主への叩拝と分かち

がたく結びついていて、奉神礼のテキストには十字架と受難、磔刑、そして復活のテーマが密に織り込まれています。

キリストの十字架は癒やしの源であり、悪魔を追い払い、十字架を通して神の祝福が信者に与えられます。しかし十字架を通して働く力は、十字架それ自体に固有の自律的な力ではありません。十字架から発される力は、主自身から発されています。そして十字架から生じる救いは、十字架それ自体ではなく、十字架に世の救い主、イエス・キリストがつけられたことに起因しているのです。

6. 教会祭日

教会には、祭日と聖人の記憶日を含む独自の暦があります。その根底には時間の成聖という思想があります。教会暦のそれぞれの日々は聖なる出来事や人物の記憶に捧げられています。

教会暦における祭日

教会暦は、私たちが、イエス・キリストの地上の生における主な出来事すべてを、主の祭日の通年サイクルを通して霊的に体験できるよう組み立てられています。それと並行して、生神女の祭日を通して私たちは生神女の人生の主要な出来事に触れることができます。さらに毎日、古今の様々な聖人が思い起こされます。

祭日には、**固定祭日**と**移動祭日**があります。固定祭日とは、毎年同じ日付で祝われる祭日です。移動祭日とは、毎年異なった日付で祝われる祭日のことです。固定祭日のサイクルは太陽暦と、移動祭日のサイクルは復活祭の日と連動しています。

大祭と呼ばれる祭日がいくつかあります。ここには復活祭に加え、十二大祭と呼ばれる祭日も含まれています。

十二大祭

- 一、生神女誕生祭（九月八日／二十一日）
- 二、十字架挙栄祭（九月十四日／二十七日）
- 三、生神女進堂祭（十一月二十一日／十二月四日）
- 四、主の降誕祭（十二月二十五日／一月七日）
- 五、主の洗礼祭（神現祭）（一月六日／十九日）
- 六、主の迎接祭（二月二日／十五日）
- 七、生神女福音祭（三月二十五日／四月七日）
- 八、聖枝祭（主のエルサレム入場の日）（移動祭日）
- 九、主の昇天祭（移動祭日）
- 十、五旬祭（移動祭日）
- 十一、主の顕栄祭（八月六日／十九日）
- 十二、生神女就寝祭（八月十五日／二十八日）

移動祭日

教会の一年のうち、最も重要な移動祭日は**キリストの復活祭**です。この祭日は、救い主の復活がユダヤ教の過越祭[パスハ]の日に起こったことを記憶し、キリスト教で伝統的に「パスハ」とも呼ばれています。「パスハ」という言葉は、文字通りには「移ること」を意味します。(過越祭という)古来の祭日は、エジプトの地からのイスラエルの民の脱出という出来事を記念して定められました。が、キリスト教の伝統において、この出来事はキリスト復活の原型として再解釈されています。(つまり、キリストが復活したおかげで、新たなイスラエルであるキリストを信じていた人々は、死から生へ、時間から永遠へ、地から天へ移行することができます。)

復活祭の日付は、四世紀に定められた法則に基づいて計算されています。つまり、春分の日の後、最初の満月の後に迎えるはじめての日曜日が復活祭にあたります。復活祭は、新暦¹¹⁶四月四日から五月八日までの三十五日間のうちの、いずれかの日になります。

復活祭の日付から、大斎の開始日が計算されます。大斎は復活祭の七週間前に始まり、主によってラザロが復活したこと(ヨハ 11:1-45)を記憶するラザロ(ラザリ)のスポタの前日で終わります。これに続いて、復活祭の一週間前

¹¹⁶ またはユリウス暦で三月二十二日から四月二十五日。 **新暦の説明を書く？**

に**主のエルサレム入場祭**が行われます。この祭りは、イエス・キリストが己の十字架の死を前にしてエルサレムに荘厳に入ったことを記念しています。

その後には**受難週**が続きます。受難週のあいだは、イエス・キリストが地上での生活を送った最後の日、最後の時間（月曜から木曜）、十字架上での死（聖大金曜日）、埋葬（聖大土曜日）が日を追って記憶されます。聖大土曜日の奉神礼では、受難週の嘆きから、キリストが復活したことについての復活祭の歓喜への移行が実現します。

イエス・キリストが天に上げられたことを記念する**主の昇天祭**（復活祭から、その当日を含めて四十日後）と、聖神（聖霊）が使徒たちに降臨したことを記念する**五旬祭**（復活祭から、その当日を含めて五十日後）も、復活祭の日付から算出されます。

固定祭日

教会の一年で最も大きな固定祭日は、**主の降誕祭**です。この祭日は、主イエス・キリストが世界に来られたこと——童貞女（処女）マリアからキリストが生まれたことを記念しています。

救い主がベツレヘムで生まれてから八日目に行われた出来事を記憶して、降誕祭の八日後に**主の割礼祭**が祝われます（ルカ 2:21）。

幼子イエスがエルサレム神殿に連れてこられたことを記憶して、降誕祭の四十日後に**主の迎接祭**が祝われます（ルカ 2:22-38）。迎接祭は主の祭日であると同時に、生神女の祭日でもあるとされています。

生神女福音祭は降誕祭の九ヶ月前に行われます。この祭日は、大天使ガブリエルが至聖なる童貞女マリアに現れて、彼女からキリストが生まれることを告げたことを記念しています（ルカ 1:26-38）。

主の変容祭は、イエスの変容してその顔が太陽のように輝いたという、弟子たちの見た、三つの福音書に書かれている出来事を記念しています。

生神女の祭日には、福音祭と迎接祭のほかに、**生神女誕生祭**と**生神女進堂祭**、**生神女就寝祭**が含まれます。

生神女庇護祭（十月一日／十四日）は大祭に含まれますが、十二大祭ではありません。この祭日はコンスタンチノーブルのヴラヘルネ聖堂で生神女が現れたことを記念しています。佯狂者聖アンドレイが生神女の現れを目撃し、このことを奉神礼のために集まった人々に話しました。

教会の一年が九月に始まり八月に終わるので、生神女誕生祭が一年で最初の大祭となり、生神女就寝祭が最後の大祭となります。

十二大祭には、上記の祭日以外に**十字架挙栄祭**が含まれます。この祭日は。亜使徒である聖太后ヘレナが主の十字架を発見したことを記憶して定められました。

教会の一年のうち、主の大祭の固定祭日を除くすべての日が、聖人の記憶日となっています。たとえば奇蹟者ニコライ（十二月六日／十九日および五月九日／二十二日）など、特に崇敬されている聖人の記憶は、教会全体のレベルでとくに盛大に祝われます。そのほか、特定の国や地域、教区、あるいは個々の聖堂で、とくに崇敬されている聖人がいる場合もあります。

もし聖堂がある聖人を記念している場合、その聖人の記憶日は**堂祭**と呼ばれます。もし聖堂が祭日を記念している場合、その祭日は聖堂にとって堂祭にもなります。もし聖堂内に、異なる聖人や祭日を記念したいいくつかの宝座がある場合、その聖堂にはいくつかの堂祭があることを意味します。

教会祭日は、ごちそうをたくさん味わうためというよりむしろ、信者がこの日聖堂に行き、聖体機密においてキリストと一つになることで生じる霊的な喜びのための日だという点で、世俗の祭日とは異なっています。同時に、もし齋が特定の食事制限の遵守を前提としているなら、祭日には多くの場合これらの制限は取り払われます。

齋

いくつかの祭日の前には齋が存在します。復活祭の前にはあわせて七週間の**大齋**と**受難週**が、降誕祭の前には四十日の**降誕祭の齋**が、生神女就寝祭の前には二週間の**就寝祭の齋**があります。**使徒の齋**（またはペトロ・パウロの齋でもあるので、ペトロの齋とも呼ばれる）は、その年によって日数が異なります。

使徒の齋は、五旬祭（復活祭の日付に連動）の一週間後に始まり、使徒ペトロとパウロの記憶日である六月二十九日／七月十二日に終わります。

何日も続く齋のほかに、一日だけの齋もあります。一日だけの齋は、通年で水曜日と金曜日のほか、十字架挙栄祭、前駆イオアン斬首祭（八月二十九日／九月十一日）に行われます。

齋には厳格なものと通常のものがあります。教会の規定によると、厳格な齋では植物性食品だけをいただくよう定められ、通常の齋の日には魚を食べることが許されています。

さまざまな病に苦しんでいる人や妊娠中の女性は、司祭の祝福によって齋がゆるめられることがあります。考慮すべき理由のあるその他の人々も同様です。

7. 週と日の奉神礼サイクル

教会祭日を含む年間の奉神礼サイクルのほかに、週と日の奉神礼サイクルもあります。

週の奉神礼サイクル

週¹¹⁷のことを教会スラヴ語で седмица といい、それぞれが決まったテーマを扱う七つの日の奉神礼のことを週のサイクル(седмичный круг)といいます。日曜日の奉神礼では、キリストの復活が思い起こされます。日曜は、奉神礼の週において一番目の、主要な日とみなされており、常に祭日です。教会は、月曜には聖なる天使を、火曜には前駆イオアンを、水曜と金曜にはイエス・キリストの磔刑を(まさにそれゆえに水曜と金曜は斎の日なのです。水曜にはユダがイエスを裏切ることに同意し、金曜には救い主が磔にされました)、木曜には使徒と聖ニコライを、土曜には亡くなったすべての人を思い起こします。

日の奉神礼サイクル

一日の間に行われる教会の礼拝、つまり晩課、晩堂課、夜半課、早課、時課(一時、三時、六時、九時)、聖体礼儀のことを、奉神礼の日のサイクルといいます。日曜日の前晩に行われる晩課と早課は合わせて一つの奉神礼となり、**徹夜祷**と呼ばれます。徹夜祷は、古代教会では一晩中行われていましたが、現代の教区教会では晩に始まり、晩のうちに終わります。通常、一時課は早課に続いて行われ、三時課と六時課は聖体礼儀の前に、九時課は晩課の前に読まれます。

¹¹⁷ 教会スラヴ語の「週(неделя)」という言葉は、日曜日、つまり人が働かない(не делает)日のことを指しています。

教会のあらゆる奉事では、旧約聖書の『聖詠経（詩編）』の詩が読まれます。この本には百五十編の聖詠が収められ、奉事規則によると、聖堂にて、一週間で（大斎の際は一週間で二周）読み終えなければなりません。晩課、早課、時課の奉神礼の基礎を構成するのは、これらの奉事のために特別に選び出された聖詠です。ほかにもこれらの奉事では、主に西暦千年までの時代のキリスト教著述家によって作られた、教会祭日やさまざまな聖人の記憶日に捧げる聖歌が歌われます。

正教の奉神礼の特徴

教会建築、イコン、壁画、奉事道具、読み物、歌、厳かな行列、鐘の音など、正教の奉神礼のあらゆる要素は、信者の気をそらすのではなく、逆に祈りの気持ちと呼び起こし、教会の教えによると地上の教会だけでなく天上の教会も、人間だけでなく天使も参加している神への賛美に信者を誘うことを目的としています。

人はすべての感覚を用いて奉神礼に参加します。聴覚と視覚はもちろん、イコンや聖物に触れることによって触覚を、香しい乳香を用いた炉儀では嗅覚を、領聖のときや、成聖されたパンや聖水をいただくときには味覚を用います。

正教の奉神礼の特徴は、その絶え間なさにあります。聖詠や輔祭の連祷、聖歌隊の歌、司祭の祈りと高声が次から次へと休むことなく続きます。奉事全体が、絶え間なく並べられた不可分の機密のように一息で行われます。深い神学

的内容に満たされたビザンティンの奉神礼テキストでは、ある時代に古代ヘブライ語で書かれた聖詠と、聖書の朗読およびそこで扱われたテーマに関する司祭の思索（説教）が繰り返されます。

ロシア正教会の大半の聖堂では、奉神礼は**教会スラブ語**で行われます。いくつかの国では、その国の言葉で（例えばモルドバではモルドバ語で、日本では日本語で）奉神礼が行われています。

8. 聖体機密

一日の奉神礼の中で最も重要なものは**聖体礼儀**（リトゥルギア）で、その間には、教会の主要な機密、**聖体機密**（エウハリスティア、ユーカリスト）が行われます。

ギリシャ語の言葉「Λειτουργία（リトゥルギア）」は、文字通りには「共同の仕事」を意味します。機密の晩餐の記憶として行われる、パンを裂く奉神礼は、古代からこの言葉で呼ばれてきました。

「Ευχαριστία（エウハリスティア）」という言葉は「感謝」を意味します。これは、この奉神礼の間に司祭と信徒によって捧げられる祈りが、主（おも）に感謝を表す性格を有していることを示しています。

8.1. 教会のあり方の基盤である聖体機密

聖体機密は、教会の最重要な機密で、「機密の機密」とも呼ばれます。なぜなら、聖体機密は、教会生活の真髄であり、教会という建物が建てられている

土台だからです。聖体機密に参加することなしには、人の救い、人が永遠の生命へと入ることは不可能なのです。

これについては主イエス・キリスト自身が述べています。「わたしは命のパンである。[.....] わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。[.....] はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる（ヨハ 6：48-56）。」

聖体機密とは、機密の晩餐の再生であり継続です。機密の晩餐とは、イエスと弟子たちとの最後の夕食であり、その際にイエスは、パンとぶどう酒として、自身の体と血を弟子たちに与えたのでした。

救世主の復活の後、彼の弟子たちは、一週間の最初の日毎週集まって、イエスの記憶としてパンを裂いていたのでした。聖体機密の食事は、夕方に始まり、朝まで続くこともありましたが（使 20：7-11）。この食事は、おごそかで、儀式的、奉神礼的性格を有しており、その主たる色合いは、感謝でした。食事の間には、旧約聖書の諸書が朗読され、長時間にわたる説教が行われ（使 20：9、11）、「詩編〔聖詠〕と賛歌と霊的な歌（コロ 3：16）」が歌われたのでした。

イエス・キリストの記憶としてパンを裂く、という聖体機密自体は、食事の最後に行われました。

時とともに、聖体機密は、食事から、整然と書き表された奉神礼の式にしたがって執行される祈りに変化しました。しかし聖体機密自体は、食事、領聖としての性格を残し続けたのでした。

聖体機密が執行されるときは常に、キリスト自身がその頭（かしら）としてある、と教会は信じています。まさしくキリストが、聖体機密の真の執行者なのであり、キリストが、聖体機密を行う共同体の頭（かしら）として立っている司祭や主教を通じて、働いているのです。

聖体機密には、教会共同体全体が参加しています。聖体機密は、司祭が信徒のために執行する聖務ではありません。これは、司祭を頭（かしら）とする共同体全体が神に捧げる無血のいけにえなのです。

聖体機密におけるパンとぶどう酒

聖体機密において、パンとぶどう酒には何が起こっているのでしょうか。司祭と教会共同体全体の祈りによって、神・聖神がパンとぶどう酒に降り、パンとぶどう酒とは、**キリストの体と血となる**のです。

聖変化の後で、聖体機密のためのパンとぶどう酒とが、象徴的にではなく、現実**に**キリストの体と血になるという信仰は、教会が初めから有している信仰です。正教会ではこの信仰が、ゆるぎなく護られています。パンとぶどう酒

とは、聖変化の後、その外見や物質的特徴を残していますが、その本性としては、救世主の体と血になるのです。これが教会の最重要な聖物であり、人に対する、貴重で機密的な神の賜物だということを強調して、救世主の体と血とは「聖機密」、または「聖祭品」と呼ばれます。

領聖を通じた、神との結合

イエスは、機密の晩餐で弟子たちに「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である（ヨハ 15：5）」と言いました。人は、イエス・キリストが神であり救世主だ、という信仰を通じて、キリストの体と血との交わりを通じて、キリストによって創られた教会の生活への参加を通じて、キリストの戒めの実行を通じて、特別な、超自然的な形でキリストと結びつく可能性を得られるのです。枝がぶどうの木についているのと同様に、人はキリストにつき、命を施す樹液を、キリストから吸い取ることができるのです。この樹液は、枯れて死んでしまった枝すらも、生き返らせることのできるものなのです。

キリストの聖機密を領聖することによって、信者は自分の中に神自身を受けます。神・子の体と血とが人の体と血とに入るということは、人が神と完全に結合する、ということを意味し、このような結合は、他のいかなる方法でも達成することができません。わたしたちは、祈りを通じて、神とコミュニケーションをとることができ、神に自分の心を開き、神の答えを聞くことができます。わたしたちは、善行を通じて、神を喜ばせ、神の恵みを得ることができま

す。しかしわたしたちが、神と霊的、物質的に結びつき、わたしたちの体が神の体と結びつき、わたしたちの血管の中を神の血が流れるようにするために、神を自分の中に受けることができるのは、キリストの聖機密の領聖を通じてだけなのです。

教父の教えによれば、領聖を通じて、信者は**神の親族**となり、神と一つの肉体に結びつきます。神・子は、藉身（せきしん）して、わたしたちの兄弟となりました。そしてわたしたちは、領聖のおかげで、キリストの体を通じてその神性に結びつくことによって、その兄弟となるのです。克肖者、新神学者シメオン（十一十一世紀）は、こう述べています。「彼〔キリスト〕は、肉体においてわたしたちの親族となり、わたしたちを自身の神性に参加する者となして、全ての人々を自身の親族としました。[.....] エバが、アダムの肉と骨からとられ、彼ら二人が一体だったのと同じように（創 2：24）、キリストは、自身の体の領聖において、自分自身をわたしたちに与えるのです。」¹¹⁸

新神学者シメオンは、他の箇所でもこうも書いています。「あなた〔キリスト〕は、肉体において、わたしたちの親族であり、わたしたちは、あなたの神性において、あなたの親族です。[.....] わたしたち全ては、結びつくことによって、一つの家に、つまりわたしたち全てが親族に、わたしたち全てがあなたの兄弟になります。[.....] あなたは、今も、永遠にも、わたしたちとともにあ

¹¹⁸ 新神学者シメオン『道徳講話 1（ロシア語訳では、講話 45）』。

り、それぞれを住まいとし、全ての人々に住まれます。[.....] わたしたちのそれぞれが個々にあなたとともにあり、救世主は全てとともにあり、あなたは、それぞれの個々とともに、一対一であります。[.....] このようにして、わたしたちそれぞれの身体の部分全てが、キリストの身体の一部となります。[.....] そしてわたしたちは、ともに、神とともにある神になるのです。」¹¹⁹

人が、神の恩寵の働きによって、聖性の頂点で得るあり方の新しい質を、教父は**神成**（しんせい）と呼びました。これはつまり、人が、神との結びつきのおかげで、神性の特徴を得る状態のことです。この状態に到達するための、有効な手段が、キリストの聖機密の領聖なのです。

天にいる神が、領聖を通じて、単に天から地に降るのではなく、人の身体と心に入りこみ、その中で、その人を内側から成聖、啓蒙し、その人の人生を変容させ、命を施す自身の臨採によってその人を充満させながら、生き始めるのです。

聖ヨハネス・クリュソストモス（四世紀）は、信者が領聖するキリストの血について、こう述べています。「この血は、わたしたちに繁栄した、王としての風采を与えます。[この血は] 思いもよらない美しさを与え、精神に常に飲ませ食べさせて、精神の気高さを衰えさせないのです。[.....] この血は、[わたしたちがこれを] ふさわしく受けるとき、わたしたちから悪霊たちを引き離

¹¹⁹ 新神学者シメオン『賛歌 58』。

し、遠くに追いやり、わたしたちに天使と天使たちの主を呼び寄せます。悪霊たちは、主の血を見るところから逃げ、天使たちは、そこへと集まります。十字架上で流されたこの血は、全世界を洗い流しました。[.....] この血は、わたしたちの霊（たましい）の救いです。わたしたちの霊（たましい）は、これによって洗われ、これによって飾られ、これによって燃えたつのです。この血は、わたしたちの意識を、炎よりも明るいものにします。この血は、わたしたちの霊（たましい）を、金よりも澄んだものにします。この血は流されて、天を、わたしたちの到達できるものとしたのです。」¹²⁰

領聖への準備

領聖の機密へは、事前の**準備が必要です**。これについては、使徒パウロも思い起こさせています。「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。（一コリ 11：27-29）。」

領聖へとふさわしく準備するためには、何世紀にもわたって形成された、一定の決まりがあります。まず、領聖直前の朝には、飲食してはいけません。また、領聖の前（当日、または前日）に、霊（たましい）を罪から浄め、主の赦

¹²⁰ ヨハネス・クリュソストモス『ヨハネによる福音書注解』。

しを得るために、痛悔する決まりです。信者は、領聖する予定の聖体礼儀の前日に、晩祷に参加するように、そして家で「領聖預備規定」という一連の祈りを読むように勧められています。キリスト教徒の多くは、領聖の前に、一日、または数日斎（ものいみ）します。

上記の決まりは、司祭の祝福によって、緩和されたり、重病のような特別な場合には、完全に取り消されたりすることがあります。宗教生活に対する浅薄な態度は、キリスト教会とは無縁のものです。このような、一定の規則を実行すれば、神を喜ばせられる、というような態度は、イエス・キリストの時代のファリサイびとにつきものだったものです。領聖への準備で最も大切なのは、神は、人の心、人の内的状態を見ている、ということを忘れないことです。神は、わたしたちから、神への愛を期待しているのであって、ある規則の機械的な実行だけを期待しているわけではありません。「わが子よ、あなたの心をわたしにゆだねよ（箴 23 : 26) 」と、神を具象化した、聖書中の「知恵」は語っています。領聖への準備の今ある実践は、それ自体が目的ではありません。領聖への準備は、人がふさわしい気持ちを得るのを助け、聖体を受けるのにふさわしく、霊（たましい）と心を浄めるためのものなのです。

どれくらい頻繁に領聖するべきか。

初代教会では、信者は、聖体機密では毎回領聖していました。洗礼を受けたキリスト教徒が聖体礼儀に来て立ち通し、それでいて領聖しないというのは、

全く考えられなかったのです。ある時代、ある国では、まれにしか領聖しないという習慣ができました。その理由の1つは、準備の決まりの厳しさでした。現代では、信者の多くが、日曜日ごとに、そして全ての大祭日に領聖します。それでいて、信者はそれぞれ、自分の痛悔司祭¹²¹、または聖堂の司祭と、聖体機密への準備に関する個々の決まりについて、相談することができます。

8.2. 聖体礼儀の執行方式

正教会には、聖体礼儀の式は、大ワシリイ [バシレイオス] の聖体礼儀、金ロイオアン [ヨハネス・クリュストモス] の聖体礼儀、先備聖体礼儀の三つが用いられています。**大ワシリイの聖体礼儀**は、一年に十回執行されます。これはつまり、主の降誕祭の前日、主の洗礼祭の前日、大ワシリイの記憶日、大斎（おおものいみ）中の日曜日、聖大木曜日と聖大土曜日です。一年中の他の日には、大斎（おおものいみ）中の平日を除いて、**金ロイオアンの聖体礼儀**が執行されます。大斎（おおものいみ）中の水曜日と金曜日には、**先備聖体礼儀**が執行されます。大斎（おおものいみ）中の月曜日、火曜日、木曜日には、聖体礼儀は執行されません。

大ワシリイの聖体礼儀と金ロイオアンの聖体礼儀との違いは、司祭が宝座の前で読む祈りの分量と内容です。現代の習慣では、これらの祈りは全員に聞

¹²¹ 正教のキリスト教徒が、定期的に痛悔に行き、必要な場合にアドバイスを受けに行く司祭のことを、痛悔司祭（ドゥホヴニク）[聴悔司祭]、または霊的父と呼びます。それぞれのキリスト教徒が、可能な限り、痛悔司祭を持つようにしなければなりません。

こえるようには読まれないので、これら二つの聖体礼儀の間にある違いは、信徒にとってはほとんど分からないものです。先備聖体礼儀と、大ワシリイや金ロイオアンの聖体礼儀との違いは、先備聖体礼儀では聖体機密が行われない、ということです。先備聖体礼儀で信者たちは、直前の聖体機密が行われた聖体礼儀〔つまり、大ワシリイや金ロイオアンの聖体礼儀〕で用意された聖体を領聖します。

聖体礼儀は（これ以降は、大ワシリイと金ロイオアンの聖体礼儀についての話がされます）司祭が至聖所の中で行う、**奉献礼儀**（ほうけんれいぎ）（ギリシャ語「Προσκομιδή（プロスコミディー）」）から始まります。奉献礼儀では、聖体機密のためのパンとぶどう酒が、特別に選ばれた祈りを伴いながら、準備されます。

聖体礼儀自体は、啓蒙者の礼儀と信者の礼儀という、二つの部分に分けられます。初代教会では、聖体礼儀の第一の部分には「啓蒙者（けいもうしゃ）」、つまり洗礼を受けるための準備をして、啓蒙式を受けた人も参加することが許されていました。彼らは、「衆啓蒙者出（い）でよ」という言葉が読まれた時には、聖堂を離れなければならない、その後に聖堂に残るのは「信者（洗礼を受けた人）」だけで、信者たちは、その後で聖体機密に参加し、領聖したのでした。

啓蒙者の礼儀

啓蒙者の礼儀は、なによりもまず、教えを授ける種類のものです。これは「父と子と聖神の国は崇め讃（ほ）めらる、今も何時（いつ）も世世に」という言葉から始まり、その後で大連祷、つまり、平穩、教会、靈的、俗世的權威、聖堂とそこに信仰と神を恐れる心をもってきた人、そして良い気候について、さらに、神の恩寵が信者を助け護るようという、一連の祈願が続きます。その後には、102 聖詠〔詩篇 103〕と 145 聖詠〔詩篇 146〕、そして、教会が、「わたしたちを救うために」人となった、神の言（ことば）であるイエス・キリストに呼びかける、「神の独生（どくせい）の子」の聖歌が続きます。福音書の真福九端〔至福の教え〕（マタ 5：3-12）が歌われ、その後で、福音經¹²²を莊嚴に持ち出す、小聖入が続きます。

聖三祝文（「聖なる神、聖なる勇毅（ゆうき）、聖なる常生（じょうせい）の者よ、我らを憐れめよ」の祈り）が歌われた後で、使徒書簡（使徒言行録、共同書簡、使徒パウロの書簡）と福音書の朗読が行われます。その後で、至聖所にいる司祭の祈りを伴う、一連の祈願である連祷が続きます。啓蒙者の礼儀は、「啓蒙者出（い）でよ」の言葉で終わります。

信者の礼儀

その後で、切れ目なしに、**信者の礼儀**が始まります。聖祭品、つまり聖体機

¹²² 訳者注：奉神礼用の福音書で、装飾を施されたものである場合が多く、通常、至聖所の宝座の中央に置かれている。

密のために用意されたパンとぶどう酒を、至聖所から持ち出し、また至聖所へと持ちこんで、宝座に置くという大聖入が行われます。

大聖入の時には、「我ら奥密（おうみつ）にしてヘルウィム〔ケルビム〕を像（かたど）り、聖三の歌を生命（いのち）を施す三者に歌いて、今この世の慮（おもんばかり）をことごとく退くべし、神使（しんし）〔天使〕の軍の見えずして荷（にな）い奉る萬有（ばんゆう）の王を戴かんとするによる、『ア riluyā』¹²³」という、ヘルウィム〔ケルビム〕の歌が歌われます。ヘルウィムの歌の文言は、地上の人々によって行われる奉神礼には、彼らだけではなく、天使も参加しているのだ、という教会の信仰を反映しています。

大聖入の後には、一連の祈願〔連祷〕がもう一つ続き、その後で信経が歌われます（ロシア正教会の現代の慣習では、信者全員によって歌われます）。聖体機密が始まる前に信経がおごそかに宣言されるということは、教会の視点によれば、正しい信仰と、主要な教会の教義を告白していることとが、神との結合に必須の条件だということの証明なのです。

聖体機密の規定（カノン）

聖体礼儀の主要の部分、聖体機密は、使徒パウロの言葉に基づいた祝福「願（ねがわ）くは我が主イイスス・ハリストスの恩（めぐみ）、神・父の慈（い

¹²³ ヘブライ語を元とする「ア riluyā（ハレルヤ）」の言葉は「神をほめたたえよ」を意味します。

「アミン（アーメン。本当に）」の言葉と同様、翻訳されることなしに、キリスト教奉神礼に取り込まれました。

つくしみ)、聖神の親(したしみ)は、なんじ衆人(しゅうじん)と偕(とも)に在らんことを(二コリ 13:13 参照)」から始まります。その祝福に、聖歌隊が「なんじの神(しん)とも」と応じ、その後で、古来の奉神礼的言葉「心上(うえ)に向(むか)うべし」、「主に感謝すべし」が続きます。

聖体機密の規定(カノン)と呼ばれる感謝の祈りは、聖歌隊が歌っている間に、司祭が至聖所で読みます。この祈りは(金口イオアンの聖体礼儀のものよりも、大ワシリイの聖体礼儀のものの方がはるかに長いですが、内容的には両方似ています)神に対する感謝を含んでいます。つまり、目に見えず、言葉にできず、知ることのできない神が、世界と人を創ったこと、神が、人々の墮罪の後にも、人に背を向けず、預言者や教師を送って、自身を人々に明らかにしていたこと、そして特に、神が、人々に「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るため(ヨハ 3:16)」に自身の子を送ったことに対する感謝です。降誕、十字架上の死、復活、再臨までの昇天という、主イエス・キリストの一生と救いの業の主要な出来事が思い起こされます。(このようにして、祈りの中で、過去と未来とが結びつけられています。)特に、イエスが弟子たちに自身の体と血を与えた、機密の晩餐が思い起こされます。

司祭は、至聖所内で聞こえるように祈りの大部分を読んで、キリスト自身が機密の晩餐で話した言葉「取りて食(くら)え、これ我が体(たい)、なんじらのために擘(さ)かるるもの、罪の赦(ゆるし)を得るをいたす」、「皆これを飲め、これ我(われ)の新約の血、なんじらおよび衆(おお)くの人のため

に流さるるもの、罪の赦(ゆるし)を得るをいたす」を全員に聞こえるように、大きな声で読み上げます。司祭は、この言葉を読み上げた後で、神・聖神が、信者と聖祭品とに降り、聖祭品をキリストの体と血にするように、と祈ります。

この時から、宝座にあるのは、もうパンとぶどう酒ではなく、**救世主の体と血**です。

領聖への準備が始まります。しかるべき祈りが読まれ聖歌が歌われ、その後で天主経(「天に在(いま)す我らの父や」)が続きます。この祈りが領聖の前に歌われることは、特別な意味を持っています。なぜならこの祈りの中には「我が日用(にちよう)の糧(かて)を今日我らにあたえたまえ」の言葉があるからです。ここで「日用(にちよう)の糧(かて)[日ごとの食物]」は、ただの食事を意味しているのではなく、救世主の言葉にある「天から降って来て、世に命を与える(ヨハ6:33)」糧(かて)を指しているのです。

領聖

神品が至聖所で領聖し始める直前に言われる、「聖なる物は聖なる人に」の言葉は、聖体は「聖なる人」、つまりキリストを信じ、洗礼を受けた人だけのためのものだ、ということを意味しています。初代教会で「聖人」という言葉は、キリスト教徒全てに対して用いられていました。現代ではこの言葉は、キリスト教徒全てが有している、聖性への使命を重い起こさせます。

神品の領聖の後、王門が開かれ、キリストの体と血が入った聖爵(ポティー

ル) が、信徒の領聖のために持ち出されます。信徒のそれぞれが、敬虔に聖爵 (ポティール) へ近づき、手を十字形に胸の上で組み、大きい声で自分の「洗礼」名を述べて、口を開きます。司祭が、キリストの体の一片とキリストの血を少量、聖匙で、領聖者の口に入れられるようにするためです¹²⁴。その後で、領聖者は、聖爵 (ポティール) の下端に接吻して離れ、「聖体が口の中に残らないように」温かい水で口の中をすすぎます。

聖体礼儀は、荘厳な感謝の祈りと聖歌、「平安にして出 (い) ずべし」の言葉 (領聖した人は、内的、霊的平和の状態に聖堂を離れなければならない、ということを示しています)、そして司祭による解散の祝福で終わります。聖体礼儀が終わると、信者は十字架に接吻します。

キリストの体と血とは、大いなる聖物であり、大切に、敬虔に接しなければなりません。領聖の後で、すぐに地上的な気苦労に染まり、日常的活動に戻るべきではありません。なるべく長く、神との結合を通じて得られる、内的平和を保つことが大切です。理想を述べれば、キリスト教徒は、神の聖性を、なんらかの悪い、または罪深い行為によって侮辱しないように気づかい、神は、どこからともなく見ているのではなく、領聖の機密によって、その人の中に住ん

¹²⁴ 領聖の際、自分の「洗礼」名の他には、何も話すべきではありません。司祭に感謝の言葉を述べたり、質問したりしてはいけません。動いたり、または、聖体を置いた聖匙を口で取りに動いて、司祭を「助けよう」としたりするべきではありません。まっすぐ、動かずに立ち、口を大きく開いて、聖匙が口の中に入ったら、すぐに口を閉めるようにしましょう。うっかり聖爵 (ポティール) に手をひっかけてしまう恐れがあるので、領聖の直前、直後には十字架をかくべきではありません。

でいるということを忘れずに、この霊的平和を常に保つべきなのです。

9. 他の機密と式

ここまでで三つの機密、第一部で洗礼機密と傅膏機密について、第三部八章で聖体機密について、すでにお話ししました。他の四つの機密と、いくつかの教会の式についてお話ししましょう。

9.1. 痛悔機密

悔い改め、または痛悔とは、信者が自分の罪を話し、司祭が、神の名によって、その赦しを宣言する機密のことです。

多くの人が、自分自身の罪や短所を見ることができていません。自分を批判的に評価する能力がない（同時に、他者の短所に対しては、異常に発達した注意力がある）というのは、非常に広く見られる霊的病です。これについて主イエスはこう述べています。「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる（マタ 7 : 3-5）。」

この病からは、**悔い改め**によって癒されます。悔い改めは、自分に対する当

を得ていない非難や、自己呵責ではありません。悔い改めには、冷静かつ健全な、それでいて自分自身に対して批判的な視点が必要です。このような視点を、神の助けなしに手に入れるのは困難です。これこそが、大斎の時に読まれる祈りの一つ〔聖エフレムの祝文〕で、「主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざる〔断罪しない〕をたまえ」と述べられている理由です。

自分の罪と短所を見られるというのは、悔い改めの最重要な前提条件です。自分の罪を見るためには、自分の生活を、マタイによる福音書の山上垂訓やその他のイエスの教えなど福音書と、常に突き合わせなければなりません。鏡のように、これらの教えに照らすと、その人が、どの点で道徳的理想に届いていないのかが見えるようになります。

痛悔は、神への祈りという形態で行われることもありますし、司祭との対話という形態で行われることもあります。痛悔で重要なのは、形態ではなく、内容です。痛悔の時に、周囲の状況や様々な随伴的事項を話して、詳細に罪について語るべきではありません。他者の罪について語ったり、他者についてぐちをこぼしたりするべきではありません。痛悔を、人生の苦悩、神学的疑問といった「問題」の議論へと変えてしまってははいけません。痛悔とは、なによりもまず、自身の短所、罪、不品行について語ることです。これらから解放され、赦しを受けるための条件は、痛悔する人が、これらのことを放棄する決意を持っていること、あるいは少なくとも、これらと戦う決意を持っていることです。

痛悔にくるたびに、同じ罪について痛悔している、ということがよくありま

す。これは、痛悔が無益なためではありません。罪からの解放は、自動的に発生するわけではありません。罪とは、**霊的病**以外のなにものでもありません。ここで大切なのは、身体的な病の場合と同様、正しい診断を下すことです。痛悔において、痛悔する人は自分で自分に診断を下すのであり、司祭はそれを助けるのです。「医師」が霊的な薬を正しく選べるように、自分の霊的病の症状を的確に述べる、ということも重要です。治癒に関していえば、これは長年にわたることもある、長くて難しいプロセスだという場合もあります。

人は、神に近ければ近いほど、自分の罪深さや短所を、より鋭く感じるものです。使徒パウロは、自分を「罪人の中で最たる者（一テモ 1：15）」だと考えていました。悔い改めは、人を、自分の罪深さを深く自覚するように導き、それでいて他者の欠点には気づかないようになり、もし他者の欠点に気づくとしても、罪びとと罪、病人と病氣とを分けて考えることができるようになるのです。

悔い改めとは、価値観の再評価であり、自分自身と周囲の人々に対する視点の、根本的な修正です。真の悔い改めは、人を怠惰や絶望に導くものではありません。反対に、長くて辛い病氣から快復した人が感じるような、内的で深い喜びをもたらすことのできるものなのです。

痛悔の最後には、司祭が、痛悔する人に赦罪経を読みます。この赦罪経では、主が痛悔する人の全ての罪を赦す、と述べられています。この祈りが有効であるための必須条件は、痛悔する人の誠意です。もし痛悔する人が、間違った差

恥心やその他なんらかの考えによって、司祭に対してある罪を隠した場合、この人は神からの赦しを得ず、霊的治癒の機密は行われません。

9.2. 婚配（こんぱい）機密

結婚、または婚配（こんぱい）機密とは、婚姻関係に入る人たちに対して行われる聖務です。教会の教えによれば、「婚配（こんぱい）とは機密である。この機密においては、新郎と新婦とが、司祭と教会の前で、互いに対する貞節を自由に約束する際に、その婚姻関係が、キリストと教会との霊的結びつきを象って祝福され、正当に子どもを生み、キリスト教的養育を行うための、敬虔な一致の恩寵が与えられる。」¹²⁵

古来の教会の規則に従って、婚配機密を許されるのは、正教を信仰する人に対してのみです¹²⁶。

婚配機密は、聘定式と戴冠礼儀という二つの部分からなります。聘定式は、戴冠礼儀と別に執行されることも、戴冠礼儀の直前に執行されることもあります。聘定式において、夫婦となる人々は、互いに貞節を近い、司祭は、神が彼らの婚姻関係を祝福するように、という祈りを読み上げます。

¹²⁵ フィラレート『正教訓蒙』。

¹²⁶ 同時に、ロシア正教会の社会構想の基本 10 章 2 項にはこうあります。「牧会上の酌量により、ロシア正教会は、過去においても、また現代においても、正教信徒とカトリック教会信徒、東方諸教会信徒、三位一体の神を信仰するプロテスタント信徒との婚配を、正教会におけるこの婚姻の祝福と、正教信仰における子どもの養育を条件として、認めることを可能としている。」同じ文書の中で、正教信徒と非キリスト教徒との婚姻に関しては、教会はこれを婚配機密によって成聖しないが、「このような婚姻関係を合法的なものとして認め、このような婚姻関係にある人々を、淫蕩の同居関係にあるものとは考えない。」[正教信徒とキリスト教他教派信徒との婚配が可能であるかどうかについては、それぞれ具体的な場合において、司祭の判断を仰がねばならない。]

戴冠礼儀自体は、その構造的に、聖体礼儀を思い起こさせます。これは、初代教会ではよく、婚配機密が聖体礼儀の間に行われ、その機密が行われる際に、教会共同体全体がその場にいたということと関係しています。（現代の習慣では、婚配機密は、通常、奉神礼とは別個に執行¹²⁷され、そこに参拝するのは新郎新婦の親族や友人だけです。）戴冠礼儀では、新郎新婦の頭上に冠が載せられ、婚姻関係の意義を明らかにする様々な祈りが読まれます。

この意義はまた、エフェソの信徒に宛てた使徒パウロの手紙の朗読からも明らかにされています。「妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のために御自分をお与えになったように、妻を愛しなさい。[.....] そのように夫も、自分の体のように妻を愛さなくてはなりません。妻を愛する人は、自分自身を愛しているのです。[.....] この神秘は偉大です。わたしは、キリストと教会について述べているのです。いずれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい（エフェ 5:22-33）。」

この言葉を、男性が家長であり、女性はそれに従属する立場にあるという、古来の家父長制が反映されている、とだけ見るべきではありません。もともと強調されているのは、**夫婦の貞節**です。妻に対する夫の愛は、自己犠牲的なも

¹²⁷ 訳者注：日本正教会では、現在でも、婚配機密が聖体礼儀の際に行われるのが通常である。

のでなくてはなりません。夫は、キリストの自己犠牲的、献身的な教会への愛を手本として、妻を気遣い、愛さなければなりません。そして妻は、何事においても夫を侮辱することのないように努力しなければなりません。

イエス・キリストが、ガリラヤのカナの婚礼で水をぶどう酒に変えた、福音書のエピソードが朗読されます（ヨハ 2:1-11）。この福音書箇所は、婚配が機密だということを強調しています。機密においては、物質的事物が、神・聖神の働きによる変化を通じて、癒しの力を得て、神の臨在に満たされます。これによってこそ、パンとぶどう酒はキリストの血と肉になり、香油の混合物は聖膏（せいこう）となり、普通の水は聖水となるのです。機密においては、同時に、機密に参加している人の変化も起こります。人は、洗礼機密において古い人から新しい人に生まれ変わり、聖体機密においてキリストと交わることによってキリストの体の一部へと変化します。婚配機密においては、二人の人が「一体（創 2:24）」、一つの肉体になる、分裂していたものが一つになる、分離状態から統合するという変化が起こります。この結合は、夫婦相互の愛の力と、神の恩寵の働きによってなされるのです。水がぶどう酒へと変化するの、さらに、家族生活の日常が、祝いの日へと変化するのの象徴でもあります。キリストによって祝福された婚姻関係、主自身が、目に見えず臨在している夫婦関係は、配偶者が、互いの中に神の顔を見つける、絶え間ない祝いの日となり、家族生活の日常を祝いの日へと変化させなければならないのです。

9.3. 聖傳（せいふ）機密

聖傳機密とは、重い病気を患っている人に対して行われる聖務です。

使徒ヤコブの手紙にはこうあります。「あなたがたの中で病気の人は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主が赦してくださいます（ヤコ 5:14-15）。」

初代教会の慣習を反映したこれらの言葉に従って、聖傳機密は数人（ウスタフによれば、七人）の司祭の参加を前提としています。司祭たちは病人のところにやってきて、その人の治癒を祈り、彼に成聖された油を塗ります。その際、使徒の手紙と福音書の一部が朗読されます。

多くの聖堂で「集団的な聖傳機密」という習慣があります。これは、聖堂で数人の司祭によって、（必ずしも重病人でなくても）全ての希望者に対して聖傳機密を行うものです。

聖傳機密において司祭は、ただ病人が治癒されるようにだけでなく、病人の罪が赦されるようにとも〔神に〕願います。忘れてしまった罪は聖傳機密において赦されるのであり、したがって聖傳機密は、ある意味で、痛悔機密を補うものだ、という考えがありますが、**これは間違い**です。痛悔機密と聖傳機密とは、それぞれ異なる二つの機密です。痛悔機密の目的は、罪という霊的病の治癒です。聖傳機密の目的は、**身体的な病気の治癒**です。それと同時に、それぞれが緊密に結びついていて、身体的な病気の治癒のためには霊的病の治癒

が必要なゆえに、聖傳機密には、身体的な回復についてだけではなく、罪の赦しについての祈りも含まれているのです。

過去には、聖傳機密を、臨終直前のある種の儀式だ、とする見方も普及していましたが、これも間違いです。聖傳機密は、神が奇跡を行って死に瀕した人を命へと戻してくれるという希望のもとに、死に瀕した人に対して執行される場合もあります。しかし、聖傳機密は「最後のはなむけ」ではありません。死に瀕したキリスト教徒にとっての最後のはなむけとは、痛悔機密と聖体機密を受けることなのです。

9.4. 神品（聖職）機密

神品機密という概念には、輔祭への按手、司祭への按手、主教への按手という、三つの聖務がまとめられています。これらは全て、主教によってのみ執行されるものです。輔祭、司祭への按手は一人の主教によって、主教への按手は、二、三人以上の主教からなる主教の集まりによって執行されます。これらの聖務全てが、聖体礼儀の間に、特に盛大に執行され、特別な祈りや言葉が読まれます。その祈りの中では、常に人の弱さを助け、その乏しさを補う神の恩寵が、その人を務めに就ける、ということが述べられています。

教会は、**神自身が、人を神品の務めに就ける**と信じています。そして神の恩寵が、その人へと、主教（たち）の按手を通じて与えられるのです。正教会において神品になることができるのは男性だけであり、適切な資質と神学教育

を有し、叙聖への障害となる事実¹²⁸がないことが必要です。輔祭と司祭とは既婚者たりえますが、結婚できるのは叙聖以前のみです。主教は、結婚していない神品¹²⁹の中から選ばれます。

9.5. 教会の諸式

相当数の聖務は、教会の式に分類されます。機密と式との間の違いは、キリスト教信仰の本質にかかわるものではありません。この違いは相対的なものであり、大分遅くになって現れたものです。教会のあり方全てが、機密としての性格を帯びており、機密に分類されない聖務の多くが、機密の特徴を備えています。

たとえば、修道士への剪髪式は、その構造と内容において、洗礼機密の式次第を思い起こさせるものです。修道士とは、世俗的な世を捨て、非婚、無欲、教会への服従を誓約し、祈りと禁欲の生活様式を送る人です。修道士になる際の式で、修道士となる人は、新しい名を与えられて俗衣を捨て、修道士の衣服を着せられ、以前の罪全てを赦され、修道士共同体の一員となります。

主の洗礼祭に行われる聖水式は、内容において聖体機密を思い起こさせます。神・聖神が、司祭と〔教会〕共同体の祈りによって、水に降り、これを大いなる聖物へと変えます。信者は、畏敬をもって、霊と身体の清めと成聖のために聖水を飲み、これを家に振りかけます。

¹²⁸ このような事実には、たとえば、司祭候補本人、またはその妻が再婚者だというものがあります。

¹²⁹ ロシア正教会では、全ての主教が修道士です。

臨終と死に結びついた式は、大きな意義を有しています。**教会は、臨終を迎える人を気遣い、特別な注意を払っています。**臨終を迎える人がまだ意識を持っている間に、司祭を招き、この人に痛悔と聖体を受けさせることが非常に重要です。親族は、臨終を迎える人が死について考えて「怯えて」しまわないように、司祭を招くのを最後の瞬間まで延ばす場合が多いものです。これは間違っており、冒瀆的態度ですらあります。

教会の教えによれば、人は死を恐れてはならず、もし人が臨終を迎えているのに、これを認識していない場合、この事実をその人から隠すべきではありません。司祭は、臨終を迎えている人が、堂々と、恐れず、平然と死を迎え、悔い改めによって良心を浄め、永遠へと移り行く前にキリストの体と血とを受けけるようにと、助けることができます。

人が息絶えたときには、司祭がその人のために特別な祈りを読み、その後（通常、三日目）に死者の埋葬式が行われます。遺体は聖堂へ運ばれ、近しい人々がその人との別れに同席します。その後で遺体は墓地へと運ばれ、土に埋められます。ここにも司祭が参加します。

その他にも、人生の様々な出来事に結びついた、教会の儀式があります。たとえば、家、車やその他の運輸機関の成聖式、就学の際の祈り、感謝祈祷（モレーベン）、様々な種類の死者のための祈りといったものです。これらの式や聖務は、信徒の依頼によって、司祭が行うものです。これらの式のおかげで、人生の様々な場面や事物は、教会の成聖と祝福を得ることができるのです。

課題

ヨハネによる福音書を読んで、自分に対して次の質問をしてください。あなたはイエス・キリストを神、救世主として受け入れることができますか。イエスが呼びかけた愛を学びたいと思いますか。イエスの弟子たちの共同体の完全なメンバーになりたいですか。

信経を読み、暗記してみてください。

天主経（「天にいます」）の祈りを読み、暗記してみてください。

もしあなたが、正教の信仰をより深く知るためにこの『カテヒジス』を読んだのならば、巻末言へと進んでください。

もしあなたがまだ洗礼を受けておらず、洗礼を受けたいと希望しているならば、あるいは子どもに洗礼を受けさせたいと思っているならば、司祭と相談して、洗礼機密を行う日付を決めてください。洗礼機密が行われた後で、巻末言を読んでください。

巻末言

キリスト教徒になるということは、ただ単に信経を知っているということ、ただ単に定期的に教会に通って、痛悔し、聖体を受けているということではなく、それに加えて、**キリスト教徒としての生活を送っている**ということです。キリスト教徒としての生活を送るということは、つまり「この世」の基準では

なく、他の規則と法に従って生きるということです。これは、潮流に逆らって従う覚悟を前提とし、靈的ヒロイズムを必要とし、直接的な迫害の場合には、表信、致命すらも必要となります。この道を最初に通ったのはイエスであり、イエスは、自身の信奉者に対して、他のどのような道も示さなかったのです。

福音書を一章ずつ、一端¹³⁰ずつ、あるいはせめて数行ずつ、毎日読むようにしてください。福音書を目につく場所（仕事机や枕元）において、なるべく頻繁に参照するようにしてください。福音書を読むことを通じて、キリストが、目に見えない形で、あなたの生活に臨在し、彼の生きた声があなたの耳元に響き、あなたの心で応答するようになります。福音書は、靈的生活の学校です。あなたが、福音書中のあるエピソードをもう何回も読んでいて、ほとんど暗記していても、このエピソードが予想外の新しい形で明らかになる可能性もあるのです。

多くの人々の経験に基づいたアドバイスを差し上げたいと思います。もし旧約と新約の全編を収録した聖書をお持ちの場合、すぐに全部を読もうとはしないでください。最初は四福音書だけを読んでください。その後で使徒言行録と公同書簡を読んでください。パウロ書簡を読む前に、旧約聖書の最初の二書、創世記と出エジプト記とを読んでください。その後で福音書に戻って読み直し、その後でパウロ書簡を読んでください。

¹³⁰ 現代出版される福音書は章に区切られており、奉神礼に使用される福音書は「端」に区切られています。端は、章よりも短く、それぞれが一つのテーマを有しています。

このような順番で聖書を読むことは、聖書に慣れ、その内的リズムを感じ、旧約と新約との間の相互関係を捉えるのを助けます。その後であなたはもう、自分の興味のひかれる書を選んで、独力で聖書の中を旅することができるでしょう。

聖詠經から毎日、少なくとも一つ、またはいくつかの聖詠¹³¹を読むようにしてください。聖書からとられた祈祷書には、悲しいものや喜びのもの、短いものや長いものなど様々な祈りが収められています。聖詠經には、祈りの経験の連なり全てが反映されており、ある人が、どのような靈的、感情的、あるいは肉体的状態にあったとしても、この祈祷書から、何か自分にあったものを見つけることができます。

毎日を祈りから始め、祈りで終えてください。そのためには「小祈祷書」、「領聖預備規定」という祈祷書を用いてください。これらの本には、朝の祈り、夕べの祈り、領聖の前と後にそれぞれ読まれる特別な祈り、そしてその他の祈りが収められています。しかし、ただ祈祷書に印刷してある祈りだけでやめてしまわないでください。自分の言葉で祈ることも忘れないでください。自分の個人的な祈り以外に、家族でする祈りも大切です。家族でする祈りは、家族を不可分の一体として確固たるものとし、その家族のメンバーが自分を「家の教会」だと感じるように助けます。

¹³¹ 聖詠經は、二十の「坐誦經（カフィズマ）」からなります。聖詠經を教会スラヴ語で読む信徒の多くは、毎日常坐誦經（カフィズマ）を読むように定められています。

もしあなたが結婚していて、しかしあなたの配偶者が、信仰と教会に親しんでいない場合、「信者でない夫は、信者である妻のゆえに聖なる者とされ、信者でない妻は、信者である夫のゆえに聖なる者とされ（一コリ 7：14）」ることを忘れないでください。自分の近しい人々に神を信じるように強制したり、むりやりに教会に来させようとしたり、教訓や非難で説得したりしようしないでください。ただキリスト教徒として生きてください。善を行い、教会に通い、あなたが教会で親しむ恩寵を近しい人々と共有してください。彼らが、信仰のあなたに与える良い影響を見れば、彼らは、自然と、信仰と教会にひかれることでしょう。

あなたが知る全てのことを、あなたの子どもと共有してください。子どもたちが何かを理解しなかったり、信仰や教会に触れてびっくりしたりすることを心配しないでください。教会生活への参加には、彼らにとって、良い効用しかありません。子どもたちは、人生全体を通じて、あなたが彼らを信仰の内に育て、神という最重要のものを与えたことに感謝することでしょう。

毎週一度は聖堂の奉神礼に行くようにして、教会の大祭日に通うようにしてください。奉神礼を学び、その意義をよく考えるようにしてください。教会の言葉がわかりにくいことを言い訳にしないでください。教会が、あなたとあなたの家族にとって、霊的な家となりますように。

定期的に痛悔し、聖体を受けるようにしてください。霊と心とに溜まった悪を浄めてください。神と司祭の前で霊を開くことを恐れしないでください。神を

畏れる心と信仰とをもって、聖体血の聖爵（せいしゃく、ポティール）に近づき、自分の中に神自身を受け入れてください。キリストの体と血という聖物を大切にしてください。この世のやっかいごとや騒がしさのせいで、領聖のおかげで得られる神との近さの特別な感覚を忘れてしまわないようにしてください。

あなたの力が及ぶ限り、教会の規定する斎（ものいみ）を守ってください。教会が斎を規定したのは、あなたを拷問したり苦しめたりするためではなく、あなたの身体的、霊的健康のためです。しかし、斎を守ることも、健康の向上も、それ自体が目的だというわけではないということを覚えておかなければなりません。大切なのは、何ものにも変えられない、霊的健康です。斎も含め、教会生活の体系全てが、それに向けられています。

教会生活は、辛いものではなく、喜ばしいものでなければなりません。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです（一テサ 5：16-18）」という使徒パウロの言葉を、常に思い起こしましょう。この言葉が、あなたの座右の銘になりますように。喜びのないところ、つまり気晴らし、金銭、不品行、色欲といったものに喜びを探さないようにしましょう。実際に喜びのあるところ、あらゆる喜びと楽しみの源である神の内に、喜びを探しましょう。この世の喜びは、すぐにやってきて去ってゆくものですが、神における喜びを「あなたがたから奪い去る者はいない（ヨハ 16：22）」ので

す。

教会での生活は、難問や悲しみから解放してくれるわけではありません。しかし、落ち着いて喜ばしげに悲しみを耐える力、起こる難問を、自信をもって解決する力を与えてくれます。教会での生活は、あなたを、他の人よりも恵まれた人にしてくれるわけではありません。しかし、あなたの人生全体に、あらゆる人にふりかかる苦難にすらも、意義と内容を与えてくれます。この苦難と試練は、あなたをこわすことはありません。なぜなら信仰の堅い軸が、絶望と倦怠に陥らないように、常にあなたを支えてくれるからです。

困難なときに、教会はいつでも助けに駆けつけます。教会は、あなたが病気にかかった時、これを耐えるのを助けます。来生へと旅立った近しい人についての悲しみを癒し、祈りと死者のための記憶を通じて、この人との生きた関係を護るのを助けます。あらゆる良い始まりについてあなたを祝福します。善行を固め、危険と誘惑を見破り、善と悪とを区別できるように教えます。

あなたがそうしたいと思えば、教会は、あなたの人生全てを、祝いの日へと変えることができます。神を忘れないようにしましょう。キリストの内に生きましょう。キリストの体と血とで自分の霊と体を養い、キリストから恩寵の力を得、キリストの知恵、忍耐、謙遜、温和さ、憐れみを学びましょう。急いで善を行い、悪と戦いましょう。言葉の上だけではなく、行いにおいてキリスト教徒になりましょう。

そうすれば、主が、あなたと常にともにいてくださることでしょう。

